
菜亭論

中村光夫評論集

（二葉亭四迷論　他二篇）

中村光夫著

芝書店版

目次

装幀　青山二郎

中村光夫評論集

永井荷風論

一

永井荷風氏の「ひかげの花」をよんで、私はふだんから氏に對して抱いてゐた考へを再び新たにした。この小説は今月の作品の內では力作であるし、又「つゆのあとさき」以來沈默を守つてゐたこの寡作の老大家に再びふれる機會は滅多にあるまいと思はれるので、以下氏について平素から考へてゐる事を述べて見たいと思ふ。

永井氏が「あめりか物語」「ふらんす物語」その他矢繼ぎ早やに發表された長短篇によつて、自然主義に決然たる反抗の聲をあげ、一躍して文壇に存在をみとめられたのは明治四十一二年のことである。

明治四十二年といへば今を去る二十五年前である。二十五年の歲月は「小說神

随一の著者の今日も尚健在である程、短い歴史しか持たぬ日本の近代文學にとつて決して短い期間でない。

そしてその間に日本のすべての文化現象の様に文學も慌だしく幾變遷を經た。又、永井氏自身もそれにつれて（或ひはそれに反抗しながら）今日では文壇の主流からはほとんど沒交渉な存在に化しさつてしまつてゐる。

しかし、潮汐の激しい日本の文壇で、十年の生命を保つ作家が如何に少ないかを考へるとき、我々は今日なほ「つゆのあとさき」「腕くらべ」「おかめ笹」「ひかげの花」等の一流作品を發表しつゞける永井氏の文學的經歴にもつと注意と尊敬とを拂つていいのではないかと思ふ。

なるほどこの作家が文學史と交渉を持つたのは明治の末から大正の始めにかけて自然主義衰頽期の短い一期間にすぎなかつた。

そして歐洲大戰前後から今日にいたるまで氏は次第に文壇の――といふより世間一般の――風潮に拗ねて、自ら江戸戲作者氣質の看板にかくれた傍流的作家に

的に、單純に永井氏を懷古的な江戸文學の模倣者、又は耽美派とするのは誤りであると信ずる。といへば恐らく永井氏自身が何故そんな勝手な斷定を下すのかと訝られるであらうが、その例證として私は氏の「日和下駄」から左の一節を引用しよう。

「私は新開地の借家の門口によく何々商會だの何々事務所なぞといふ木札をれいれいしく下げてあるのを見ると、何といふ事もなく新時代のかゝる企業に對して、不安の念を起すと共に其の主謀者の人物についても甚しく危險を感ずるのである。それに引かへて斯う云ふ貧しい裏町に昔ながらの貧しい渡世をしてゐる年寄を見ると同情と悲哀とに加へて又尊敬の念を禁じ得ない。同時にかういふ家の一人娘は今頃周旋屋の餌になつてどこぞで藝者でもしてゐはせぬかと、そんな事に思到ると相も變らず日本固有の忠孝の思想と人身賣買の習慣との關係やら、つづいて其の結果の現代社會に及ぼす影響なぞについていろ〳〵込み入つた考へに沈められる。

つい此間も麻布網町邊の裏町を通つたとき、私は活動寫眞や國技館や寄席などのビラが崖地の上から吹いて來る夏の風に飜つてゐる氷屋の店先、表からも一目で見通される奥の間で十五六になる娘が淸元をさらつてゐるのを見ていつものやうにそつと歩を止めた。私は不健全な江戸の音曲といふものが、今日の世にその命脈を保つてゐる事を訝しく思ふのみならず、今もつて其の哀調がどうしてかくも私の心を刺戟するかを不思議に感じなければならなかつた。

何氣なく裏町を通りかゝつて小娘の彈く三味線に感動するやうでは到底世界の新しい思想を迎へることは出來まい。それと共に又この江戸の音曲をばれいくしく雷氣燈の下で演奏せしめる世俗一般の風潮にも伴つて行く事は出來まい。私の感覺と趣味と又思想とは私の境遇に一大打撃を與へる何物かの來らざる限り、次第に私をして固陋偏狹ならしめ、遂には全く世の中から除外されたものにしてしまふであらう。

私は折々反省しようと努めても見る。同時に心柄たる身の末は一體どんなにな

つてしまふものかと、奔放擲して自分の身をば他人のやうに其の果敢ない行末に對して皮肉な一種の好奇心を感ずることさへある。

自分で己れの身を抓つて、この位力を入れゝば成程この位痛いものだと獨りでいぢめて獨りで涙ぐんでゐる樣なものである。或時は表面に活潑洒脫を粧つてゐるが、心の底には絕えず果敢ないあきらめを宿してゐる。

これが爲めに『涙でよごす白粉の其の顏かくす無理な酒』といふ樣な珍らしくもない唄が聞く度每に私の心には一種特別な刺戟を與へる。私は後から勢よく襲ひ過ぎる自動車の響に狼狽して、表通から日の當らない裏道へと逃げ込みそして人に後れてよろ〳〵步み行く所に、わが一家の興味と共に苦しみ、又得意と共に悲哀を見るのである。」（第一節日和下駄）この、恐らく一部の人達には甘つたれとも見られるであらう素直さを其底に持つ文章を、今日鼻であしらつて微笑する位容易なことはない。

しかし他人の文章を讀む時、先づ自己の優越を意識してかゝらうとする厄介な

習慣を持たぬ人は、こゝに永井氏によつてあまり幾度も無器用に繰返されたために、遂に世人が耳馴れて無視してしまつた、氏の「江戸趣味」の本體を見るであらう。

氏の「江戸趣味」には何か強ひられたものがある。氏は江戸時代をディレックントの時代として懐かしんでゐるが氏自身は「江戸趣味」に單に好みから這入つたのでは決してない。むしろ氏は周圍の環境に追ひつめられて江戸時代に首を突つ込んだのである。

極言すれば氏が足利時代や平安朝時代でなく江戸時代を選んだのは氏自身も書いてゐる通り、氏自身の環境と(紅茶の後、蟲干)明治といふ時代からそれが手近かであつたからにすぎないとさへ思はれる。

この點、白樺派の人々の近頃の骨董趣味とは全然異つてゐるのである。

かう書くと、或ひは人は云ふかも知れぬ、好みからにしろ強ひられたにしろ、とにかく永井氏が「江戸時代」に逃避したことに變りはないではないか。同じく

逃避といふ結果を生む以上、その様た區別をするのに何の益があるかと。これは一應もつともな議論である。だがそんな事を云へばボオドレルだつて政治から逃避したのである。文學の上では社會からの逃避といふことは問題にならぬ。問題はいはゞその逃避の强さである。何故ならば文學そのものも他の觀點から見れば逃避に外ならないからである。たゞ重要なのはルイ・フイリツプの末年酒屋の椅子によつて一藝術のための藝術」を說いた幾百の「詩人」の內、何故ボオドレル一人今日まで嚴然と生き殘つてゐるかといふことである。故に作家的資質の深さとは作家が「逃避」を强ひられるために、どれ程現實に傷いたかによつて計られるのである。作家の誠實とはこの苦惱の眞摯性に外ならない。勿論各個人の資質の相違はこの苦痛に一見相反する様々の性格を與へる。

そして多くの一流作家は自己の苦痛をそのまゝ表白することを避けてゐる。彼はそれが如何に他人に傳へがたいかを、絕望的に悟つてゐるのである。それ故にこそ、彼は唯自己の作品の中にのみそれを生かさうと努力する。そして一流作品

は例外なく、それによつてのみ生き殘るのである。

永井氏は無謀にも、自己の作品以外でしばしば自分の苦痛を曝けだした。それ故、世人は當然それを默殺した。人々がこの素朴さに氏の「お坊つちやん氣質」を見るのは勝手である。しかし恐らくそれだけではないのである。私の見る所では二十代の終から三十代の初めにかけて、氏を虐んだ問題は當時の日本の小說の傳統の範圍では表現出來ぬものであつたからだと思はれる。

かういふ點に氣をつけて、人々は氏の隨筆集をよみ返して欲しいと思ふ。少なくとも氏の苦惱の眞摯性だけは明かにされるであらう。

二

永井荷風氏は明治の作家の中でもつとも外國文學（文化）に直接ふれた一人で

あつた。
二十五歳のとき渡米してから、明治四十一年、三十歳でフランスから歸朝するまで、年月にして約六年間、氏の青春の恐らく最重要部分はアメリカとフランスで過されたのである。
明治以來、我が國の文人で海外を旅行したものは數へ切れぬ程ある。しかし、藝術家としての生涯の決定的な時期に外國にゐた作家は恐らく永井氏一人なのではなからうか。
藝術家が自己の表現の端緒を把む、彼の青春の最重要期、その心が內部の苦痛の故にもつとも外界の印象に傷き易くなつた一時期、その潑剌たる精神が周圍のあらゆる事物に素直に同化しようとして躍動するときを、ヨーロッパ（當時のアメリカは未開の歐洲であつた）で過したといふことは、單に視察や見學や又は物見遊山でヨーロッパを旅行した人とは比較にならぬ强い影響を永井氏にあたへたのではなからうか。當時の記錄である「西遊日誌抄」をよめば、その間の消息は

明かにうかゞはれるのである。

「西暦千九百四年（明治三十七年）

一月五日、亞米利加に來りてより余が胸裏には藝術上の革命漸く起らんとしつゝあるが如し、近時筆を執れども一二行すら滿足には書き能はざるは蓋此の如き思想混亂の結果たらずんばあらず、余はゴオチェの如き新形式の傳奇小說を書きたしと思ふ念漸く激しくなれりと雖も未だ其の準備十分ならず。徒らに苦悶の日を送るのみ。（後略）

一月十三日、薄幸の詩人アランポォの書を讀む。夜半燈を吹いて眠らんとするに大雨瀧の如く屋を打つ。夢しば〳〵驚きさまさる。

九月廿三日、余は遠き以前より自敍傳を作らん事を思ひつゝあり。此地に來りてより創作意の如くならざれば、此を機會に自敍傳の稿を起さんかと思ひ參考のためにもまづトルストイが自敍傳幼年少年の著を次第に讀み始めぬ」

この自己の表現に摸索する多感の青年にアメリカの自然は強くはたらきかけて

ゐる。例へば翌年五月十二日の日記に次の様な文章がある。

「この地（ミシンガン洲カラマヅ）素封家何某氏の舞踏會に招かれ、夜更けて歸る。此の折打眺めたる郊外の夜の景色は云はんと欲して云ふ事能はざるものなりき、半月はおぼろにかすみ樹木は暗然として嵐の雲の蟠るが如し。此の闇の間に一點二點夜更けて起きたる人家の燈を見る。四顧寂として風死したり、余は斯の如き夜のさまを屢ツルゲネフの小說中にて見たるが如き心地せり。幾分の恐怖と幾分の恍惚相共に交りて何とも知れず心打亂るゝ夜なりき」

かうした言葉を文學青年の感慨と笑ひ去ることは容易である。

しかし合衆國北部の村落の茫漠たる風物は案外ロシアの田舍に似てゐるのではなからうか？　このとき永井氏は當時の日本人の誰よりも二葉亭の所謂「晩春の夜のおぼろおぼろした」相であるツルゲエネフの「詩想」を美事に感得したのではなからうか？（勿論私も二十歳のときから淸元と落語に凝つた永井氏が智識階級の苦惱を唄つたツルゲエネフの藝術の全容を理解したとは思はない。しかし氏

と同時代の作家田山花袋の「蒲團」に現はれたツルゲエネフの「思想」が如何に貧弱であるかを思へば、それについて氏を咎めることは出來ないのである。むしろこの點にこそ氏の不幸は根ざしたのだと私には思はれるのだが、それについては後でくはしく述べたいと思ふ。)

しかし永井氏は米國の生活のさらに「詩情を喜ばすなきを嘆じて」フランスに渡つて「彼の國の文學を研究」する事を計畫し「その旅費を才覺すべく暑中休暇を勞働に當て」ようとしてゐる。所が父の反對のためそれは挫折してしまつた。このときの永井氏の絶望は次の日記でうかがはれる。

「再び家書を得たり。佛國に遊ばんと企てたる事も豫期せし如く父の同意を得ざりき。今は讀書も健康も何かはせん。余は淫樂を欲して已ます。淫樂の中に一身の破滅を冀ふのみ。先夜馴染みたる女の許に赴き、盛にシャンパンを倒して快哉を叫ぶ」(九月廿三日)

との時の女イデイスとの交情(彼女との同棲のためには「余は娼家の奴僕とな

ゐも何の恥ずるところあらん」とまで氏は思ひつめてゐる）はこの一卷の書の美しい彩りである。又この戀と氏の心中で鬪つた文學についても、次の樣に美事な言葉を吐いた明治の作家は稀である。

「余の生命は文學なり。家庭の事情已むを得ずして銀行に使はるゝと雖も、余は能ふかぎりの時間をその研究にゆだねざるべからず、

余は信ず、他日必ずかの『夢の女』を書きたる當時の如き幸福なる日の再來すべきを余は絕望すべきにあらずと自ら練め且つ勵ましたり。然も余は一時文藝に遠ざからざる可からざる事を思ふ時は何等かの罪惡を犯したるが如く又深き墮落の淵に沈みたるが如き心地して心中一點の光明なし。銀行の歸途酒場の卓子に獨り痛飮して夜半にいたる」（千九百三年十二月八日）

その他引用したい文章は多いがあまり長くなるのでこゝらで打切ることにする。實に「西遊日記抄」は永井氏の青春の記錄である。今日この書物を繙くものはこの「變屈親爺」（おかめ笹序文）の日記の撥剌たる力强い積極的な精神に驚くで

あらう。
のみならず他人に見せるつもりで書かれなかつたこの日記には河上徹太郎氏が「人に見せばや」と呼んだ永井氏特有の氣取りが全然ない。芥川龍之介氏が荷風氏の全著作の中でこれを第一に推したのも、そのためであると思はれる。
又これと同時に氏が青春の心に傾けて書いた「あめりか物語」「ふらんす物語」の二著は多少作意の跡が見え透く嫌ひがあるが、ちやうど魚が水の中を泳ぐ樣にのびのびとして歐洲の空氣を肺一杯に吸ひ込んでゐる永井氏の姿は判きり浮び上つて來るのである。アメリカにゐた時にも永井氏はフランスのオペラは逃さずに聞きに行つてゐる。フランスに滯在中には、恐らく季節の間は毎夜の樣に、劇場に通つたのであらう。オペラを觀、ヴオードビルを覗き、カルチエ・ラタンに醉ひ、紐育の支那街を徘徊し、朝にサムボリズムの詩を稱し、夕には自然主義の小說に讀み耽り、しかも少年時代からの憧れを、心のまゝに滿してくれる現在の環境から吸收した教養が、將來、日本に歸つて如何なる變化を受けるか當人は少し

も豫測しないのである。

明治文學を通じて永井氏程束縛のない幸福な青春を送つた作家があらうか。「ふらんす物語」中の「晩餐」等の僅かな例外を除いて氏のこの頃の著作中で繰り返される絶望憂愁孤獨等の言葉は氏が當時のフランス文學から借用した氣取りにすぎぬ。又は異境にある青年の鄕愁の「詩的」な表現にすぎぬ。

今日我々が之等の著作を讀んで感じるのは氏の子供らしいまでに素朴で強烈な歐洲文化への心醉である。しかも單なる若氣の心醉ではなく、魂の底から動かされた若い藝術家の純一な熱情である。

かつて左翼運動をやつた事のある友達が「ふらんす物語」をよんで「これ位フランスに陶醉出來りやいいな」と苦笑してゐた。恐らく彼自身は最早クレムリン宮を見てもその様な昂奮を感じないのを悟つてゐたのであらう。

藝術と政治とは違つても當時の永井氏を捕へたのは恐らくかういふ種類の全身的な感動であつた。

かゝるとき、夢にみたフランスより「更に美しく、更に優しかつた」現實のフランスの「凡ては皆生きた詩である、極點に達した幾世紀の文明に人も自然も惱みつかれた」巴里の風物に對して明治末年の日本は如何に粗雜に貧弱に見えた事か！

・　・　・

氏は恐らく（バイロンを眞似て）日本に生れた事を呪つたに相異ない。

「ボードレールも自分と同じやうに、モウパツサンも亦自分と同じやうに、此の午過ぎの木蔭を見て、盡きぬ思ひに耽つたかと思へば。自分は例へ故國の文壇に名を知られずとも藝術家としての幸福光榮は最早やこれで充分だと云はねばなるまい」（巴里のわかれ）

藝術家の幸福が、彼の性向と環境の一致にあるとすれば永井氏はこの時完全に幸福だつたのであらう。

しかも「生活といふ單純な問題、金錢と云ふ俗な煩ひの爲めに、迷つた犬のやうに、すご〳〵、おめ〳〵」（同上）歸つて行つた故國の文壇でも、滯歐中の收穫

である「ふらんす物語」は一躍して氏に流行作家の地位を保證した。今や『夢の女』を書きたる當時の如き幸福なる日」が再來したのである。しかし日本に歸つた永井氏は果して幸福であつたらうか？　その答へは恐らく何人の眼にも否である。

この、氏の日本に歸朝してからの無殘た幻滅を、我々は谷崎潤一郎氏とともに青春の夢に破れた永井氏個人の不幸と見ることも出來る。（永井荷風氏の近業について）

しかしヨーロッパの文化に骨の髓までひたされて歸朝した永井氏の悲劇はある意味では逆に當時の日本文學の演じた悲劇の一面ではないかと私には思はれるのである。

三

永井氏にも文壇で華やかな盛名を馳せた一期間があつた。しかしそれは前述した如く、極めて短いものであつた。勿論文學史上佐藤春夫氏の所謂、明治四十年の自然主義に縛られた文學といふ鳥に「啼聲を與へた」（潤一郎人及び藝術）永井氏の功績は忘れることは出來ないであらう。しかしこの「鳥」はやがて谷崎潤一郎氏によつて翼を與へられて後（少なくとも永井氏より見れば）あらぬ方へ飛び去つてしまつた。

又當時氏が次々と發表した諸作の毀譽褒貶がいかにまち〳〵であつたにしろ、同時代人の批評がいつもさうである樣にいづれも永井氏の眞情とは甚だ遠いものばかりであつた。しかもそれは氏にとつて甚だ心外である樣々のレッテルを貼りつけたにしろ、結局のところ一流作家の地位を氏は確保したのであつた。

「明治四十一年の秋西洋から歸つて後、わたくしは間もなく『すみだ川』の如き小說をつくつた。然し執筆の當時には特に江戸趣味を鼓吹する心はたかつた。洋行中佛蘭西のフレデリック・ミストラル、白耳義のジョルヂ・ヱックー等の著

作をよんで郷土藝術の意義あることを教へられてゐたので、この筆法に倣つてわたくしは共生れたる過去の東京を再現させやうと思つて、人物と背景とを隅田川の兩岸に配置したのである。わたくしはその頃既に近代佛蘭西の小說を多く讀んでゐ　事については、窃に人後に落ちないと思つてゐたが、然しいざ筆を取つて見ると文才と共に思想の足りない事を知つて往々絕望してゐたこともあつた。（略）然るに幸にも「深川の唄」といひ「すみだ川」といふが如き小作を公にするに及んで、忽江戶趣味の鼓吹者と目せられ以後二十餘年の今日に至つて猶虛名を贏ち得てゐる。文壇の僥倖兒と云はれるのは蓋し正宗君の言を俟つに及ぶまい」（正宗谷崎氏の批評に答ふ、荷風隨筆三〇四・五頁）從つて永井氏が「拗ねた」のは決して文壇に對してではない。むしろ氏の周圍の日本の社會に對してであつた。

「ふらんす物語」の一節に「晚餐」といふのがある。リヨンで偶然出會つた學校友達である銀行員と晚餐を共にし、そのあまりに變り果てゝしまつたのに驚くといふ話で、古雅なリヨンの夏の夜の風物と、野卑で、尊大でおまけに出しやば

りのまるで植民地くづれの様な銀行員と、その周圍の頭取、生絲商などのこぜこせした交際ぶりが對照の妙をきはめて描寫され、成程在留邦人とはこんたものかと思はせる名篇であるが、永井氏が歸朝して忽ち取り卷かれたのはこれ以上に低劣で又この幾層倍の强さと擴がりを持つた明治四十年代の日本であつた。

當時の氏の著作のどれでもいゝから開いて見給へ。如何に激しい嫌惡を以て氏は當時の日本の社會とその代表者たる「敎育ある」紳士達、乃至は混然雜然たる東京市の有様を描いてゐる事か！

しかし「俗物」に對する嫌惡は西歐のロマン派の唄ひ盡した所である。これは永井氏自身判きり知つてゐたに違ひない。その上日本の明治文學も獨特のロマン派を持つてゐた。もしも永井氏が單に野卑な金持や粹な紳士又は俠な藝者を對立させたにすぎなかつたら氏は泉鏡花の亞流にすぎなかつたであらう。

聰明な永井氏を虐んだ原因は日本の社會のもつと深いところにあつた。以下に氏の明瞭な言葉を引かう。

氏は自作「冷笑」の意圖について次の様に述べてゐる。

「……明白には云ひ切つては居ないが、篇中何處ともなしに、自分は現代の西洋文明の輸入が皮相に止まり、其の深き内容に至つては日本人は決して西洋思想を喜ぶものではない。

寧ろ日本には西洋人が黄禍論を稱へるよりももつと以上に強い排他思想の潜んでゐる事をも匂はしたつもりである。日本を包む空氣の中には立憲政治の今とても封建時代に少しも變らざる一種名狀すべからざる東洋的專制的な何物かゞ含まれてゐて、いかに外觀の形式を變更しても、風土と氣候と、凡て目に見えないものが、人間意思の自由思想の解放には惡意を持つてゐるらしいやうに思はれてならぬ處がある。それ等の漠然とした感想も自分は大いに意味あるつもりで書いた。（略）自分は日本の爲政者が維新以來急速に泰西の文明を輸入しながら、事實は果してかの米國の良民の如くに、能く個人の權能を尊び、神聖なる自治自由の精神を赤心から喜び迎ふるものなるや否やについても、多少の疑ひを抱かざるを得

ない場合すらある。其の實例を一々茲に列擧する事は自分の憚かり恐れる處である。」（紅茶の後）氏の云ふを恐れる所をその著書の發禁等の瑣事だとするのは皮相の觀察であらう。それが何であるかを知るためには我々明治四十年代の政治的狀態と、氏の滯在した米佛がもつとも徹底した民主々義國家であることを思ひ浮かべれば足りる。尙この點で同じく「紅茶の後」の中の「絶望なるかな」「希望」または「雨瀟瀟」に收められた「花火」なども興味ある文章である。

だが永井氏を驚かせ、又は悲しませたのは決して當時の政治狀態ばかりではなかつた。

むしろそれよりも、かゝる政治を甘んじてはびこらせておく國民の生活であつた。この場合、今日の立場から、明治維新の本質に關する理論などを持ち出した所で何にならう。永井氏の周圍にあつたものは尙ほ封建の餘影の濃い明治四十年代の動かす事の出來ぬ現實である。氏がその中で何の疑問もなく育ち、フランスから歸つた眼にはむしろ不思議に映つた單純な、退嬰的な人々の生活であつた。

近代文學を生んだ溫床である十九世紀のヨーロッパの社會とあまりに距だたつたこの日本の現實を前にして、永井氏はむしろ呆然とした。氏が六年間の教養は恐らく近代文學を日本に移植することの如何に困難であるかを悟らせただけであつた。だがこの問題にとにかく眞正面にぶつかつた小說に歸朝の翌年の年末から執筆された「冷笑」がある。この小說は當時に比して小說技術だけは異常な進步を遂げた今日から見ると、無味乾燥な議論があまり多すぎるためにほとんど讀むに耐へないものであるが、私の考へでは作者があらかじめ何等かの解決を持つてゐてそれを讀者に示すために書かれたのではない、思想小說の、失敗した、だが我が國最初の試みではないかと思ふ。この小說は當時の文壇では作者の享樂主義のみ歌つたのではない。むしろ享樂主義の主人公が、風土の空氣に餘儀なくされて川柳風の生悟りに入らうとする苦悶と悲哀とを語らうとしたものである。」といつてゐる。（冷笑について）

又同じ文中で氏は「自分が小說『冷笑』を書かうとした第一の目的は、亂雜沒趣味なる明治四十二年の東京生活の外形に向つて沈重なる批評を試み、その時代の空氣の中に安住することの困難なるを嘆息し、併せて我が純良なる日本的特色の那邊にあるかを考究摸索せんとしたものである」といつてゐる。これによれば氏は單に思想を「摸索」したのみでなく當時の社會をも描かうとしたのである。描きことに壯大な想圖である。これを完成するには一方にはドフトエフスキイの大才を要し、他方にはフロオベルの努力を要したのであらう。などゝ私は冗談を云つてゐるのではない。「冷笑」の無殘な挫折が如何に必然であつたかを云ひたいのである。傳統のない所に新しく創造することが如何に困難であるかを明かにしたいのである。

ロマン派の廢墟の上に立ち、同時代の社會及びその實證主義と絕望的に戰ひを交へた近代小說はフロオベルとドストエフスキイの二極に分れて實を結んだ。この困難は戰ひを何等傳統の武器も持たず、唯一人素手で交へた永井氏が失敗した

のは當然のことである。こゝでは唯氏の意圖が如何に正しかつたかを見ればよいのだある。思想小説も社會小說も二十數年後の今日やつと眞面目に論議され始めた。そしてそれを生むべき社會的條件も熟してゐるとされてゐる。しかも今の所はまだ我々を首背せしめる樣な作品は現はれないのである。

だが差當つて永井氏の場合である。明治四十年に生きてゐた氏はどうすればよいのであるか？

恐らく永井氏自身、世評の如何に拘らず、冷笑」の失敗を誰よりよく自覺してゐた。佛蘭西文學に通じてゐることにかけては人後に落ちないと思つた（なほ當時の日本の自然主義としてフランスのそれを手本としたものであつた）永井氏が「いざ筆をとつて見ると文才と共に思想の足りない」のに絕望したのは恐らくこの時ではなかつたであらうか。

「冷笑」によつて、自己の「文才」がその「思想」を表はすに足りぬと悟つた

（實は前述の通り當時の社會的條件の制約を受けたのであるが）永井氏はその後は少なくとも小說で自己の思想を正面から題材にすることは止めてしまつた。しかも氏はフロオベル流の客觀主義にも日本傳來の私小說にも赴かなかつた。氏の思想は自己を肉化すべき表象を探し求めて摸索した。そして氏はそれを花柳界の女に見出したのであつた。この一見奇妙な過程は先に述べた氏の社會觀を振りかへつて見れば大した困難もなく闡明されるのである。

永井氏が正しくも見破つた通り、日本の社會は西歐から輸入した資本主義の外皮の下に、今尙ほ封建制度の實質を殘してゐる。そしてこの社會狀態は氏によれば、東洋の氣候風土の必然の產物であつて、如何に西歐の文物制度を輸入しても決して根本的には消失しないものである。

かうした社會と相容れぬ作家が眞正面からその思想を發表するのが不可能であるとしたら、彼はそのために如何なる道具を選ぶべきであらうか？　反抗をするものは弱者でなくてはならぬ。かゝる社會の弱者とは何か。女である。しかも肉

體を金錢と權力に賣らねばならぬ花柳界の女である。又一方この反抗が有効であるためには反抗者は强者でなくてはならない。當代の貴顯紳士に最も力を振ふものは何か。これも亦花柳界の女である。紳士連はその虛榮心と好色性がなくならぬ限り、ある意味で花柳界の支配を脫するわけには行かぬ。

「中谷はこの始末の惡い馬鹿々々しいことをふてくされた女の醉拂つたのを見るやうに甚だしく痛快に感じてゐる。（略）ゴム輪の身を茶屋の玄關へ曳き込ませるお客さまは皆是現代の紳士である（略）これ等の紳士は花柳界第一の保護者で、表面裏面の差別なく大慈悲の神さまとして尊重されるべき筈であるのに、此處に嗤ふべきは、滅びた時代の戯曲家小說家が自己の辯護として金も力もない色男を讚美するために金力の主張者を極點まで醜化した。その因襲的感化によつて、花柳界の女の眼に映ずる彼等はいづれも影にまはつては『いけ好かないお髯さん』たるに過ぎない始末である。するとお髯さんは金佛さまならざるかぎり、お髯さんの意味を推知していつも威嚇的壓伏的の態度にその品位を保つてゐるだけ內心

藝者茶屋女の陋劣輕薄不人情なことを恐ろしく憤慨して居らせられる。と云つて憤慨の結果陋劣な人種を全然社會に生存出來ぬほど排斥してしまふのでなく、云はば頼まれもせぬ憤慨をするために、わざ〳〵世間の目を忍んで此處に大事な金を撒きに來る。」（冷笑第五章、二方面）これが恐らく永井氏が花柳小說に筆を染めた最初の積極的な理由であらう。「腕くらべ」の序文も恐らくこの間の消息をもらしたのではなからうかと思はれる。

尙又氏にとつては明治の「文明」の眞只中で、德川時代そのまゝの「無智と迷信」によつて無自覺に生きて行く藝者の生活は、當時の日本人の生活の象徵とも見られたのであらう。のみならず好都合なことには彼女等は同時代の日本の何處にも見られない「完成された文化」を持つてゐた。從つてそれ等を扱つた文學も豐富にあつた。

又、氏自身も、花柳小說に成功すべき素地を外遊以前から豐富に持つてゐた。「すみだ川」が氏に確保した名聲がある。かくて「ふらんす物語」の著者は一躍

して「新橋夜話」の作者となり、「新歸朝者の日記」の作者は一轉して江戸趣味の鼓吹者として世に知られるに至つたのである。

しかし、かうした動機が動機だけに、永井氏の江戸趣味は極めてひねくれたものであつた。例へば「冷笑」中の「夜の三味線」の章の末尾を見よ。この一章は「冷笑」の內でも作者が「誰が何と云はうとも、自分だけには眞心から出た文章である」としてゐる所であるからこゝに述べてある思想は明かに作者自身のものとして差支へないであらう。

こゝで氏はひろく東洋と西洋の文化を比較してその差異に驚異よりむしろ恐怖を覺え、終に三味線音樂に東洋の佛敎的絕望の表現としての「深遠なる意義」を見出すのであるが、こゝに陳べられてゐる歷史的社會學的な理解程おそらく「江戸趣味」に遠いものはあるまい。私が先刻氏の江戸趣味には强ひられた所があるといつたのはこの點をさすのである。氏は單に「滅びて行くもの」であるために藝者や江戸の文物を愛した。そこには何か强者に對して弱者を守る正義感に似た

ものさへある。

「わたくしはふと江戸の戯曲作者又浮世繪師等が幕末國難の時代に在つても泰平の時と變りなく悠々然として淫猥な人情本や春畫をつくつてゐた事を甚だ痛快に感じて、こゝに專ら花柳小説に筆をつける事を思立つた。『新橋夜話』または『戯作者の死』の如きものはその頃の記念である」（荷風隨筆三〇七頁）と氏は言つてゐるが、江戸時代の戯作者が「國難」を意識して故意にさうした事に耽つたとは私には思はれないのである。

だがこの點を意識した「戯作者」であることとに氏の藝術の本質がある。

「腕くらべ」「おかめ笹」等のことさら江戸時代の文學を眞似て書かれた小説が今日から見れば一種の社會小説であるのはこのためである。

おそらく、當時の文壇の風潮を無視して書かれたこれ等の小説には精緻な心理解剖もなければ、又一時代の惱み」を現してもゐない。

その代りそれは當時の社會の冷酷なクロニックである。「腕くらべ」は發表され

た當時こそ題材の華やかさ故に喜ばれもしたであらうが、今日から見れば駒代はくわいらいに似た封建社會の一女性である。その小さな頭腦に去來する單純な喜び、悲しみ、又はあてにならぬ打算など美事に作者の冷たい筆で描き出され、しかも谷崎氏の「盲目物語」の樣に人間情熱一般に昇華されてゐないので、かへつて當時の女として感銘を强めるのである。「同じ耽美派でも永井氏は谷崎氏よりずつと社會的である。」たしかこんな事を近松秋江氏が云つてゐた。

四

だが、これだけでは永井氏は過去の完成した作家である。氏と現代との聯關を說明することは出來ない。この兩者の間には恐らく前述した所とは比較にならぬ複雜なひねくれた關係が橫たはるのである。そしてこの複雜化の原因は氏と現代

との兩方にあると思はれる。

ポオル・ヴァレリイの有名な言葉に「我々が自ら眞理だとしたことがほんたうに自己の肉となるためには實に多くの年月を必要とする」といふのがある。これは永井氏の場合にもあてはまる言葉である。

このことは先づ氏の「江戸趣味」について起つた。前述した如く氏の江戸趣味は最初の内は郷土藝術の理論等から割り出した極めて觀念的なものであつた。このもつとも美事な例は一讀して小説だか論文だか判らない「妾宅」である。しかし「川柳風のあきらめと生悟り」の境地が、歐洲の土を踏んで來た氏にとつて、如何に居心地が惡からうが氏の江戸への愛着が眞實なものである以上、馴れない着物が次第に身につく樣になるのと同じく、氏の「江戸趣味」は眞の趣味になつて行つた。換言すれば氏自身が江戸的になつて行つたのである。もと〳〵氏は山の手の良家の生れであるが、學業をうとんじて、早くから江戸文化の雰圍氣にふれた人であつた。家に隱れて落語を習ひ、九段の寄席に出演した所を家僕に發見

され、家に連れ戻されて一室に押し込められたのなどはその頃の挿話の尤なるものであつた。それが當時の氏にとつて幼い反抗の一形式であつたことなど、今更何であらう。氏は唯自己の感性を喜ばす趣味の世界の過去の匂ひに惑溺出來ればいゝのである。最早氏は以前の如く「諦め」を說きはせぬ。自ら諦めの生活に入るのである。否少なくともさうした生活に入らうと努めてゐる。「斷腸亭雜藁」「雨瀟瀟」はその時代の記錄である。この中で氏の說くところは以前と變らない。しかし、その論文の調子はまるで違つたものである。永井氏がほんたうに世を拗ねたのは恐らくこの時からである。

「自分は間違つてゐるかも知れぬが、日本といふ處は深く考へずして早く諦めをつけてしまふには、世界中此樣に便宜な處はないと思つてゐる。（略）川柳風に淺薄な、厭味な所が日本の生活及び思想の根本には最も適合してゐるらしい」と氏は明治四十三年に書いてゐる。しかし今や氏自身がこれに「適合」する番が廻つて來たのである。「つまり最初に己れといふものを出來るだけ卑しくして然

る後、一種超越した態度に立つて局外者を眺めて見ると、何かにつけ自然と巧まずして冷やかな笑ひが口の端に浮んで來るものである」と氏はすでに「冷笑」（第五章）のなかで中谷について云つてゐる。だがこの微笑はもはや永井氏の身邊を離れぬのである。

谷崎潤一郎は逸早くこの危機を嗅ぎ分けて、氏の永井氏に對なる懸念を切々と語つてゐる。（永井荷風氏の近業について）だがこの文章が發表されたのは昭和六年のことである。

當時の永井氏の轉機は文壇の眼をかすめて行はれた。しかし永井氏自身にとつてその轉機はその起つたところの天候を覺えてゐる程明瞭なものであつた。（雨瀟瀟の書き出しを見よ）

「その頃のことゝ云つたとて、いつも單調なわが身の上、別に變つた話があるわけではない。唯その頃までわたしが數年の間さしては心に留めず、成りゆきの儘送つて來た孤獨の生涯が、つまる所わたしの一生であらう。此れから先わたしの

身にはもうさして面白いこともない。代りにまたさして悲しいことも起るまい。秋の日のどんより曇つて風もなく雨にもならず暮れて行くやうにわたしの一生は終つて行くのであらうといふやうな事をいはれもなく感じたまでの事である」(雨瀟瀟)

「ふらんす物語」の抒情的な昂奮とは何といふ對照であらう。人々は谷崎氏とともに此處に老衰の徴候を見るのであるか。だが私はその外に氏の肉と化した諦念を見るのである。

事態がこのまゝで進行すれば、恐らく永井氏は「榎物語」は書いたかも知れぬが「つゆのあとさき」「ひかげの花」は書かなかつたであらう。では何故事態の進行は氏の諦念を裏切つたか。

それについては我々はまづ、氏の藝術の特質を振返つて見なければならない。我々はさきに「新橋夜話」「腕くらべ」の頃の氏の江戸趣味が極めて觀念的であるのを見た。しかし觀念的なのは單に江戸趣味だけではなかつた。氏自身が極

めて觀念的なのである。「野心」といひ「地獄の花」といひ、氏の初期作品は、泉鏡花のそれと同じく、いづれも强力た觀念小說である。「ふらんす物語」「あめりか物語」においても人々は觀念の汎濫が様々の叙事文の藝術的統一をさまたげてゐる例にしばしば出會ふであらう。その最も極端た例は「冷笑」「歡宅」である。氏は明治文學には稀に見る觀念を驅使し得る作家であつた。氏が「腕くらべ」等一種の社會的な小說を書き得たのは氏の江戸趣味が觀念だつたからこそである。しかし氏は同時代の私小說の大家の様に自己の生活を作品の中に肉化すべき術を知らなかつた。この點氏が自己の周圍への嫌惡から把みかゝつた花柳界が江戸文學によつて表現を完成された肉體を持つてゐたのは甚だ幸運な事情であつた。

だが氏自身が江戸趣味が肉化するや否や觀念を奪はれた『詩想』は忽ち枯渴したのである。(雨瀟瀟參照)

この一見奇妙な矛盾の裡に私は氏の眞の不幸があるのだと思ふ。青春の憂鬱を歐米の風物に托したとき、氏は將來の夢を持つてゐた。又歸朝して自己の幻滅を

唄つたとき氏はすでに作家としての衿持に支へられてゐた。しかるに齢不惑をすぎた後、氏は自身の文學的理論を實踐した結果として自己の文學的表現の手段を奪はれてしまつた。しかもこの「詩與湧き起らぬ」孤獨の境涯を江戸趣味の裡に踏晦しようとすれば、氏の觀念的な頭腦は外界のあらゆる事件をもたらして氏を焦立たせるのだ。

永井氏は二葉亭四迷とともに自己の觀念に苦しんだ、明治文學中稀有な作家であつた。二葉亭は若年の頃、觀念の過剩に惱まされた。永井氏は初老に這入つてから自己の觀念の執拗さに苦しんだのである。

その上、氏をすでに「日和下駄」の中で憤激させてゐる江戸時代の舊跡の破壞は加速度に進行した。かつて新歸朝の氏をして憐れませた日本の社會は今度は逆に大震災を轉機として氏を追ひつめた。

「彼は人間の愚劣を、自己を虐むことに全力をあげた個人的な敵と見た……彼はそれを一寸した新聞の記事の間にも、時には美くしい書物の中にも發見した」

とモウパッサンはフロオベルについて書いてゐるが、「時勢」が同じく「過度の智的感受性」を持つた永井氏を虐んだのも恐らくこれに劣らないのである。しかも氏の趣味と教養とは、「マダム・ボヴアリイ」を書くことを氏に許さないのである。かう考へて見れば、「世間をすてた」筈の四十を越した作家が移り行く世相に對して殆んどヒステリーかと疑はれる漫罵の聲を放つのも、氏とすれば當然以上のことである。「つゆのあとさき」は女給といふ肉體を得てその周圍に氏の現代に對する嫌惡を凝固させた小說にすぎぬ。

「つゆのあとさき」について谷崎氏がここに氏のフランス文學の下地が現はれてゐると云つた。私も所謂日本の自然主義文學に比して遙かにフランスの自然主義に近い作品であると思ふ。フランス自然主義の作品も矢張り自己の生活とは遊離した觀念の世界に築かれたものである。しかし彼等の偉大さはこの點にあるのではない。自己の生活の絕望を以てその觀念を血塗つた點である。「雨蕭々」以後の永井氏も亦眞の絕望を知つた作家であつた。そしてその絕望は「つゆのあとさ

き」の江戸好みの文章の間から覗いて見えるのである。

しかし私が永井氏の近作を讀んで打たれるのはこの點ではない。この絶望が如何にも日本化されて、氏のいはゆる東洋的なところである。それを私は「ひかげの花」について述べてこの小論を終りたいと思ふ。

此小說は私の見る所では「つゆのあとさき」より遙かに純粹な永井氏にとつて一つの到達點を形成するものである。

「腕くらべ」の昔から、永井氏は唯一人の女しか描かなかつた。「腕くらべ」の駒代、「つゆのあとさき」の君江「ひかげの花」のお千代と、時代と風俗の相違によつて、多少の程度のちがひはあるにしても、いづれも善良で單純で、その上多少は慾張りで、しかも極端に反省を缺いて無自覺といふ點では一致してゐる。

その實生活ではあらゆる種類の女を知つてゐる氏が觀念の內ではただ一人の女しか育てなかつたことは極めて特徵的なことゝ、私には思はれる。

この間に日本の小說は種々樣々な性格を持つた「近代女性」を次々にと創造した。

しかし永井氏は冷然として、新しい風俗の中に古い女を登場させて憚らない。小賢しい女がいくら出て來てもそれは氏の關知しない所である。「いくら新しい粉飾をほどこした所でそれは上面だけのことだ。一皮むいて見れば今の日本の女はかうしたものさ」とおそらく氏は確信してゐるのである。何故ならば氏にとつて必要なのは「一皮むいた」封建社會の表象としての女性だからである。したがつて永井氏の女はしばしば現實性を缺くものとされた。

事實さう云へば「腕くらべ」の色戀はまだ綺麗事である。「つゆのあとさき」の君江は東京の風景の華やかな焦點にすぎない。しかし「ひかげの花」に至つて氏の女は完全に人間の肉體を具へた。しかもその肉體は殘酷なまでにいやらしいのである。

「年のころ三十も大分越したと見える女で、細帶もしめず洗ひざらしの浴衣の

前もひきはだけたまゝ、鏡臺の前に立膝して」客をとるために化粧をする有様・その若造りに、當分この分なら商賣が出來さうだと安心する男の心底を、作者は冒頭で火鉢にかかつたアルミの藥鑵のやうに冷たく艶もなく描寫する。そしてこの自分の意志を引き抜かれた樣な二人の主人公は波瀾を極めた全篇を通じて見えない手に操られる生命のない木偶の樣に行動する。

さう云へば谷崎氏は「つゆのあとさき」の著者を人形遣ひに擬してゐた。なるほど「つゆのあとさき」の人物には人形の美くしさがある。しかし「ひかげの花」の人形には人間の汚ならしさしかないのである。

そしてこの無殘な木偶を扱ふ冷酷な手付きは、最後の女の娘の手紙に至つて無類な投げやりの完成を示す。

この一篇を貫く虛無觀はその娘の一見生意氣な書き出しに始る手紙をよみ終つたのち、實に放逸に豐富にわき上つて來る。人々はこの母子に笑つていいのか、泣いていいのか迷ふであらう。

「いかに外觀の形式を變更しても、風土と氣候とすべて目に見えないものが、人間意思の自由、思想の解放に悪意をもつ」（前掲）封建的な社會と日本を觀ずる氏の思想は「ひかげの花」に至つて完全に肉化してゐる。正宗氏が「ひかげの花」で永井氏がこゝまで到達した（又は追ひつめられた）ことに只興味があるといつてゐるのはこのことをさすのではなからうか。

しかし、明治四十三年にこの思想を記したとき、氏がその實現のためには如何なる代償を拂ひ、如何なる絶望を潛つてそれを肉化するに到るべきかを、知つてゐたらどうであつたらうか。

またもしも、氏が二十八歳のころ米國にあつてフランス自然主義の小說を讀み耽つたとき、それが三十年後の今日かかる季節外れの變種を東洋の土壤に生むためであると知つたら何と思つたであらうか。

――三四年八月――

漱石私感

――「それから」について――

一

「わたしたちに最も恐ろしい事實はわたしたちの畢にわたしたちを超えられないと云ふことである。あらゆる樂天主義的な目隱しをとつてしまへば、鴉はいつになつても孔雀になることは出來ない。或詩人の書いた一行の詩はいつも彼の詩の全部である。」（十本の針）と芥川龍之介は云ふ。この「恐ろしい」―消極的な言ひ廻しはともかく、或る作家がその生涯を通じて遂に彼がもつて生れた思想（素質）をしか、表現し得ぬことは動かすべからざる事實であらう。

そして、當然この事情は獨創的な作家になるほど强く現はれる。何故ならば、眞の獨創性を持てば持つほど彼はその表現に際して自己以外に頼るべき規範を持たず、また彼の願ひは、恐らくその生涯にわたつて捕へあぐむ自己を表現することに盡きるからである。

かくして人々は「新年とは馬鹿げたものだ」といふ九歳のフロオベルの言葉が彼の全制作を貫くのを見る。十三歳のアンリ・ブリュラルの姿もまたスタンダアルの生涯を適確に要約したものであらう。

漱石がこれらの大作家と比肩し得る天才であつたか否かは暫くおき、書簡集の冒頭に掲げられた、明治二十二年五月、最初の喀血を經驗した子規を見舞ふ手紙にも、彼の全生涯の相貌がうかゞはれるのではなからうか。

「……且ツ少シにても肺患に罹ル「プロバビリチー」アル以上ハ二竪の膏肓に入らざる前に英斷決行有之度生あれば死あるは古來の定則に候得共喜生悲死も亦自然の情に御座候春夏四時の循環は誰れも知る事ながら夏は熱を感じ冬は寒を覺ゆるも亦人間の免かるゝ能はざる處に御座候得ば小にしては御母堂の爲め大にしては國家の爲め自愛せられん事こそ望ましく存候雨フラザルニ牖戸を綢繆スト八古人ノ名言に候へば平生の客氣を一掃して御分別有之度此段願上候

to live is the sole end of man!

五月十三日

歸ろふと泣かずに笑へ時鳥

聞かふとて誰も待たぬに時鳥……」

漢文と英語の教養の混淆の間から人々は冷酷な、そして健全な現實家が顏を覗いてゐるのを見る。to live is the sole end of man! 少くも子規ならばかうは云はなかつたであらう。

「聞かうとて誰も待たぬに時鳥。」ことによれば漱石はこの兄友が病軀を虐みつゝ敢行した詩歌改革の性急な試みを內心嘲笑してゐたのかも知れぬ。

勿論、子規がこの頃からすでに一家の風をなしてゐたに反し、漱石が小說家として成熟したのはやうやく二十年後である。

だがこゝにすくなくとも病床に自己の血痰を把んで子規と號し、殘る十年間を

日本文學の性格の徹底的糺明に費し、併せてその再建に身心を消磨しつくして倒れた病天才と、我國の近代文學史上、ほとんど異例とも云ふべきほど豐富な教養をつみ、且つその才能を十二分に成熟させ、發揮し得た漱石との相違は尤分表はれてゐるのである。

云ふまでもなく私はこゝで仕事の領野を全く異にした漱石と子規とを比較して作家として何れが優れてゐるか、また人間として何れが幸福であつたかなどを論ずるつもりはない。況んや、強烈な青春時代を持つ多くの天才にあり勝ちな二人の感情の行き違ひの跡を辿つて、そこから何等かの意味あり氣な結論をひき出さうとも思はぬ。

たゞ私は後年の小說にその成熟した姿を見せた漱石の相貌が、すでにこの青春期の短い書簡に表はれてゐることを指摘したいだけだ。そしてこれが如何なる作家的資質であるかを問ふ前に、彼がいかにこの與へられた自己を周密な教養をもつて注意深く育くみ、これを擴大し、成熟させ、遂にその餘す所ない表現を把へ

得たかに驚嘆したいと思ふ。

「牛になる事はどうしても必要です。吾吾はとかく馬になりたがるが、牛には中々なり切れないです」「あせつては不可ません。頭を悪くしては不可ません。根氣づくでお出でなさい。世の中は根氣の前に頭を下げる事を知つてゐますが、火花の前には一瞬の記憶しか與へて呉れません。うん〳〵死ぬ迄押すのです。それ丈です。（略）牛は超然として押して行くのです。何を押すかと聞くなら申します。人間を押すのです。文士を押すのではありません。」（芥川龍之介、久米正雄宛書簡）かうした現實的な覺悟をもつて、自己を世間に強ひるため、彼が實際いかに精進し、「押して」來たか。自己を忘れて己れの才能に醉ひ、または才能すら忘れて、「時世」に醉ひ勝ちな現代作家にとつて、恐らくこの上なく有益な苦がい教訓に滿ちた筈の此の過程に現實に觸れるためには彼の全集を通讀する以外に道はないであらう。たゞ私は後年彼が袛徊趣味と唱へた一種の心理分析の手法がいかに彼にとつて思索の根本形式であつたか、または彼が自己の思索の本質的形

式を如何にその小説手法に生かし得たかの例證を以下にあげたいと思ふ。いはゆる低徊趣味とは彼自身の明瞭な言葉を借りれば次のやうなものである。

「……事件の進行に興味を持つより、事件其物の眞相を露出する。甲なる事と乙なる事と丙なる事とが寄つて、からなつたと云ふ風な所に主として興味を持つて書く。――併して云へば、原因もあり結果もあつて脈絡貫通した一個の事件があるとする然るに私はその原因や結果は餘り考へない。

事件中の一個の眞相、例へばBならBに低徊した趣味を感ずる。從つて書方も、Bといふ眞相の原因結果は顧慮せずに、甲

眞相丙　眞相乙　眞相甲

B（眞相）

A ――――•―――― C

脈絡シタル一事件

乙、丙の三眞相が寄つてBを成してゐる、夫が面白いと書く。即ち同じ低徊してゐても分解的に出來てる所が多い。」（全集第二十卷「坑夫の作意と自然派傳奇派の交渉」）

彼が單にこの手法を事件の構成に用ひたのみでなく、さらに各人物の心理描寫行動の動機の解析にまでこれを適用したことは周知のことである。云ふまでもなく「坑夫」はその極端な例である。そして彼自身も「こんな書方」は例外だと斷つてゐる。だが彼は他人の作品についても、かうした手法のものにしか興味を持たなかつた。（花袋獨步に對する彼の批評を見よ。）そして彼の遺作「明暗」は人間心理に對してかうした低徊趣味を最も果敢に適用した好箇の實例であらう。

しかもこの、現實に關する或る一定の認識を自己の心中に設定し、これをあらゆる可能な推理によつて解析して行く思索の形式は、すでに明治二十三年、子規に與へた手紙に明瞭に語られてゐるのである（全集第十八卷十二―十五頁）。恐らく文學靑年にあり勝ちな文章論を子規と戰はせた彼は、手紙と同封した別紙に四頁にわたつて、當時の文章に關する思索を「數學的」に正確に表現してゐる。勿論當時の彼に文章に關する一家の卓見があつた筈はなく、そこに述べられてゐる思想も、單に穩當といふのみであるが、その思索の（表現の）方法はいかにも彼獨

特のものである。以下特に興味のある箇所を引用すれば、

「僕一己ノ文章ノ定義ハ下ノ如シ

文章 is an idea which is expressed by means of words on paper 故ニ小生ノ考ニテハ idea ガ文章ノ Essence ニテ words ヲ arrange スル方ハ element ニハ相違ナケレド essence ナル idea ホド大切ナラズ（略）是ヨリ best 文章ヲ解セン

Best 文章 is the best idea which is expressed in the best way by means of words on paper. 此 under line ノ處ノ意味ハ idea ヲ其儘ニ紙上ニ現ハシテ讀者ニ己レノ idea ノ Exact ナル處 (no more no less) ヲ感ゼシムルト云フ義ニテ是文ガ即チ Rhetoric ノ treat スル所也（略）是ヨリ嚴粛トカ壯麗トカ云フ文章ヲ analytically ニ御示シ申スベシ

(1) 嚴粛ナル文章＝嚴粛ナル idea expressed by means of words.

(2) 壯麗ナル文章＝壯麗ナル idea expressed by means of words. etcetc.（略）是

ハ ヨ mathematically ニ Idea ト Rethoric ノ combination ヨリ如何ナル文章ガ出來ルカヲ御目ニカケン

1. case	Idea = best Rhetoric = 0	make up no 文章

(略)

2. case	Idea = 0 Rhetoric = best	no 文章 imaginary case
3. case	Idea = best Rhetoric = best	best 文章
4. case	Idea = bad R. = bad	bad 文章
5. case	Idea = best R. = bad	ordinary 文章

e. case ⎧ Idea = bad ⎫ bad 文章
　　　　⎩ R. = best ⎭

此 last two cases ヲ比較セバ Idea ノ R ヨリ要用ナルヲ知ルベシ（以下略）」

この、大した創見もない煩瑣な分析を長々と引用したのは、こゝに彼の思索の根本形態を見るからだ。彼の後年の小説手法はこの思索をもつて「人間を押し」その肉付けを獲得したにすぎない。

　また有名な彼の文學論も、日本語で書かれたこの種の著作としては彼以前にもまた以後にも類例を見ぬほど精緻な藝術感覺で貫かれた、いはば「數學的」正確を眼ざした文學の觀念的解析であるが、これは文學そのものに對する彼の代數趣味の精妙な適用に外なるまい。更に進めて云へば、彼が歩一歩と教養を積み、才能を練磨し遂にその完全な成熟と共に精緻周密な表現を獲得した彼の生涯其者すら、その實生活における處世術の末にいたるまで、この思索を以て貫かれてゐる

と云へないであらうか？

精密な思索をもつて武装された冷靜な現實家、――かういふ言葉は陳腐であるだがかうした言葉を實踐出來る作家は稀れである。漱石の偉大さはかやうな平凡な事柄をたゆまずに實踐した點にあるのだ。彼は眞理は世の始りとともに古いことを知る現實家ではなからうか？ そして現實の世界において、かうした古い眞理が絶えず確められて行くことに、新しい表現を與へるに足る精妙な觀察家ではなかつたか？ 彼の小說は悉くこの場所に築かれてゐる。

そしてその長所も、また云ひ得べくんば、その短所も、すべて此處に根差してゐるのである。

二

長所といひ、缺點といふが、およそ自己表現を完了した作家においては、その資質上の短所は例外なく表現の上に適用された長所と化してゐる。云ひかへれば藝術上の純粹性を守ることによつて、作家の全肉體を恐れることなく讀者に觸れさせ、恰かも彼自身がこの世に存在するとき備へてゐたと同様な客觀性を、卽ち生き物を、讀者に强ひる所にすべての一流作品に共通する性格が存するのである。かゝるとき、彼の作品の長短を論ずることはその性格を語ることに外なるまい。漱石がいかに綿密な愛情をもつて自己の天分を育くみ、その才能を成熟させ、完成し得たかについては既に述べた。

では、彼はその成熟した才能を驅使して如何なる作品を築き得たか、彼の天分の完成したのはいかなる場所においてであるか？　以下私は彼の實際の作品からそれを見たいと思ふ。この「性格」の究明から漱石といふ生き物の秘密に多少とも迫り得るとしたら、それは、上述のごとき一流作品に共通な彼の小說表現の完璧性によるのである。

こゝに私に解析すべき實例として、「それから」をあげる。これは彼の全作中、構造のもつとも單純なものであり、また「三四郎」「行人」「心」などの屈曲を經て「明暗」の爛熟にいたる彼の人間表現の一の頂點をなすものであり、なほ、明治四十年代に生きる一個の知識人を眞正面から描かうと企圖した點で、當時の新作家に本質的な影響を與へ、ひいては現代文學の提出する問題に強ち無關係ではないと信ずるからである。

漱石は冷靜な觀察家であるとともに、その小說の構成にあたつては、周密な計算を怠らぬ人であつた。彼の小說は（「我輩は猫である」を除き）ことごとく、章ごとの連鎖は勿論、各章の描寫の細部にいたるまで綿密な理知的構成の網目によつて統一されてゐる。

この、ヨーロッパの强力な觀念文學を輸入しながら、その技法を實生活表現の場に解消し、遂にいはゆる「無技巧の技巧」に達した當時の文壇の風潮に、恐ら

く意識的に反抗しつつかうした小說構成の手法を採用した漱石の不敵た自信は彼みづからの次の言葉が明瞭に語つてゐよう。

「愚見によると、獨步君の作物は『巡査』を除くの外は悉く拵へものである。(小生の讀んだものに就いて云ふ。)但しズーデルマンのカッツエン・ステッヒより下手な拵へものである。花袋君の『蒲團』も拵へものである。『生』は『蒲團』程拵へて居られない。其代り滿谷國四郎君の『車夫の家』のやうた出來榮えである。

拵へものを苦にせらるゝよりも、活きて居るとしか思へぬ人間や、自然としか思へぬ脚色を拵へる方を苦心したら、どうだらう。拵へた人間が活きてゐるとしか思へなくつて、拵へた脚色が自然としか思へぬならば、拵へた作者は一種のクリエーターである。拵へた事を誇りと心得る方が當然である。……」(「田山花袋君に答ふ」全集第十四卷)

この文章のかゝれたのは明治四十一年秋である。即ち彼が「三四郎」をほとんど

完了し、「それから」にかゝる直前である。

云ふまでもなくこの二作は、當時の代表的知識階級を素材とし、しかも一人の主人公を眞正面から堂々と描くことを企圖した點で（例へば「心」の「先生と私」式な構成と對比せよ）彼の全長篇中で特殊な位置を占めるものである。またこの二作には彼の全作品を通じてもつとも彼自身の影が濃く射してゐることも爭はれない。しかも「それから」は「三四郎」に比し、一段と爛熟した、困難な材料を扱ひ、恐らく彼自身をも豫期せぬ問題に誘ひ、漱石の小說法の一頂點であるとともにその轉廻期を劃するものである。

「色々な意味に於てそれからである、『三四郎』には大學生の事を描いたが、此の小說にはそれから先の事を書いたからそれからである。『三四郎』の主人公はあの通り單純であるが、此主人公はそれから後の男であるから此點に於ても、それからである。此主人公は最後に、妙な運命に陷る。それからさき何うなるかは書いてない。此意味に於ても亦それからである。」（全集第二十卷「それから」豫告）

當然、二百五十頁に餘るこの小說は、場面から場面へ、章から章へと、代助といふ當時の社會にあつては全く新しかつた一人物の創造に、いひかへれば、その人間的建築に、綿密かつ痛烈に集中されてゐる。小綺麗な寢床のなかに悠々と寢そべり、自分の胸に手を當ててその健康な鼓動を樂しむ書き出しから、三千代との戀愛のため、遂に彼をこの世で支へてゐたあらゆる羈絆を斷ち切られ、半狂亂の態で電車にとびのる結果にいたるまで、作者はあくまで忠實に、そして執拗に代助に寄りそひ、「明治四十年代の青年」として周圍の社會のあらゆる良識への服從を拒否し、ひたすらに自己の感受性の成育に餘念のない主人公の姿を描いてゐる。そして作者の分析的な手法の當然の結果として、まづ主人公の肉體に寄り沿ひ、彼の日常生活の觀念を解析し、それによつて彼の觀念の姿を明瞭に示した後この、あらゆる良識を嘲笑する觀念に動かされる彼が現實に社會の良識との交渉に如何に弄ばれるかも描く過程を通じて、彼の觀念の肉化を、即ち主人公の文學上の人間的再建を計つてゐる。

云ひかへれば、この場合漱石に興味のあつたのはたゞ代助といふ明瞭な觀念にすぎないのだ。そしてこの小說全體の機構はたゞその現實における肉化のために彼に必要な道具立てであつたにすぎないのだ。そしてこの道具立ては作者によつて周密に設定され、その精妙な構成を通じて、一歩一歩代助の觀念をその肉體に近づけ、遂に彼と世の良識との現實的な破局の終末にいたつて、その道具立ては肉體に吸收され終り、同時に讀者は彼の肉化した觀念と現實的に接觸し得るといふ仕掛けである。すべての觀念は肉化したとき、云ひかへれば現實的に人間化したとき、その自身の裡には解決を持たぬ。讀者が「それから」といふ疑問を强ひられる所以であり、漱石の問題提出の正確さと、併せてその文學的設定についての周密な計算はこゝにおいて立證されてゐるのである。そしてかうした豫め明瞭に設定された概念を、同じく作者によつて明白に計畫され終つた「現實」のなかに生かすことによつてその肉化を計るといふ手法は、漱石以後我國のいはゆる智的な文學を貫き、今日にいたつても、なほ生き殘つてゐる傳統である。

だがこの意圖の「正確」さにも拘らず、漱石は果して代助の人間的再建に成功してゐるであらうか。なるほど彼の手法は我國の文學の貴重な遺產として今日まで生き殘つてゐる。だが代助そのものは今日もなほ生き永らへてゐるであらうか。現在無意識に彼の手法を踏襲してゐる作家のうちでさへ、果して何人が「それから」をよみ、代助に生き物を、情熱と化した彼の觀念についての明瞭な人間映像を感知し得るのであらうか。代助の友人平岡とその妻三千代に對する彼の交涉が彼の觀念肉化の主要な場である。しかし彼の平岡に對する嫌惡も決して彼の周圍の世相に對する嫌惡輕蔑を出てゐない。いはば平岡は彼にとつて、單なる世の良識の代表者にすぎない。彼と平岡とが過去において持つた人間交涉も思ひ出の霧にぼかされてゐる。しかも作者はこの思ひ出を生々しくは代助の胸に生かしてゐない。作者は（おそらく代助の羞恥心の陰にかくれて）この思ひ出をたんに冷淡な言葉で說明してくれるだけである。

例へば第六章の舊友同志が酒を汲みかはす場面は、二人がもつとも過去に「眞

率な又無邪氣な努力」をもつて歸らうとする場面であるが、こゝにはかつて二人の間に存在した人間的交渉は少しも復活されてゐない。たゞ纖細な神經をもつた遊民と野心家の失業者との間に交はされる抽象的議論があるのみだ。なるほど、そこには「胸毛の奧まで赤くなつた胸を突き出して」代助に管をまく平岡の姿やそれに「一昨日食つたパンを今返せと强請られる樣な氣で」應待する代助の心理の適確な描寫がある。だがこの席に連なる代助と平岡と三千代の三人の間に、かつて存在した友情と、またその友情と虛榮心とから、自分の愛する女を友人に周旋した欺瞞の所産たる現在の苦痛の生々しい影はどこにも漂つてゐないのだ。彼等の論議には各々人生觀、處世術を異にする兩人が必然にもたされる抽象論の一般的な喰違ひがあるのみだ。作者はかうした議論が二人にとつて各々必然であることを示す以外に何の色調陰影もこの會話に與へてゐない。この點で彼等の論議は酒場で偶然出會つた醉漢同志の水掛け論論と何等選ぶ所はない。讀者はたゞ小說の筋にしたがつて、かつて彼等が友人であつたといふ外面的事實を知つてゐる

だけである。
代助はこれを「現代人の踏むべき必然の運命」たる孤獨だと考へる。そして作者は「斯ふ云ふ意味の孤獨の底に陥つて煩悶するには、代助の頭はあまりに判然し過ぎてゐた」と附け加へる。だが頭が「判然し過ぎてゐる」のは果して代助であらうか作者であらうか。人間の孤獨は決して人間を隔離するものではない。むしろ他人との交渉に苦しむ所に、人間孤獨の眞の姿が存するのだ。そして孤獨の「意識」が人間相互の孤獨な交渉においていかに苦しむかは、また別な、複雑な展開を要する問題ではないか。作者は決して代助といふ孤獨な意識を文學的に展開してゐないのだ。云ひかへれば、代助のもつ孤獨な觀念を現實の人間關係の生身に曝すことによつてその肉化を計つてはゐないのだ。彼はむしろ代助の觀念を安全にまもりながら、たゞ彼の感受性を通じて裁斷されたこの世の風景をその周圍に積み上げて行くのみである。平岡も三千代も、兄と嫂もこの風景畫中の人物を出でぬ。しかも代助といふ人物が作家の腦裡に創造された一の觀念にすぎぬと

すれば、その感受性による現實風景の裁斷も單に聯想の作用によるその觀念複雜化の過程にすぎない。したがつてこの小說の讀後に、讀者の受けとるものはたんに代助といふ人間（さらに正しく云へば觀念）の存在のみであり、彼が現實において如何なる人間であるかは知る由もないのである。

こゝに恐らく漱石の周密な計算によつてもなほ理解に絕する文學的リアリティーの問題が存するのだ。理智も教養も、更に極言すれば生活の經驗もその前では力を失ふのだ。たゞ作家の素質のみが、彼の肉體的實踐のみがこの場合ものを云ふのだ。こゝではまことにヴァレリイの云ふごとく「精神にスティールはない」のである。作家はたゞその肉體的實踐によつて把へ得た現實の裡に自己の觀念を叩き込んでこれを肉化し得るのみなのだ。「精神の力によつて、作中人物に自己を乘り移らすべきであつて、彼等を自分の方に惹きよせてはならない。」とフロオベルは云ふ。

しかし恐らく漱石のやうな資質にとつて、かうした言葉は空言にすぎないのだ

それに當時にあつては人間の孤獨といふ單なる事實（觀念）すら新しい興味の對象となり得たのだ。したがつて漱石は孤獨を强ひられた人間の眞の姿より、むしろ人間の孤獨といふ觀念を示したのだ。……彼にとつて何より苦痛だつたのは——それが意識とか理解と言ふよりは、寧ろより多く感覺であつたこと、彼がこれまでの生涯に經驗した有らゆる感覺の中で、最も直接な、最も苦しい感覺だつたことである」といふラスコオリニコフの孤獨ほど代助の孤獨と遠いものはないのだ。彼にとつて、孤獨とは感受性の趣味、またはその處世術にすぎない。かゝるとき、彼の孤獨の意識はそのモオラル・センスの一變形に外ならぬ。

なるほど彼はこの意識を通じてしかも他人と交渉することが出來ない。だがそれは彼がこの意識で現實に對して武裝してゐるからだ。そして彼は決してこの孤獨に苦しんではゐないのだ。むしろこの柵のなかに籠つて、作者が手を觸れないでゐてくれる孤獨の意識を悠々と樂しんでゐるのだ。彼の孤獨を現實化する手段としては作家に採用された三千代との戀愛の交渉の裡にも、人間的な閃めきは何

處にも見られないのだ。勿論代助は洗練された感覺の持主だから、三千代との出會ひに花をかつて來たり、部屋の中に香水を撒いたりする。しかし彼と三千代とはいつも理詰めな會話を交換するのみだ。そして代助はたゞ反省によつてしか戀さない。しかも戀愛によつて反省を强ひられるより、むしろ反省によつて戀愛を見出すのである。これは代助が孤獨なためであらうか。それとも代助がほんたうに三千代に惚れてゐる證據であるか。だが孤獨な人間相互の交渉がいかに生々しいものであるか、また戀愛の情に己れを失つた同志の感受性の場がいかに撥剌たる人間的光彩を放ち得るものであるか、歐洲近代作家の苦鬪は我々にそれを明かにしてくれるではないか。

「さうしませう。二人が平岡を欺いて事をするのは可くない樣だ。無論事實を能く納得出來る樣に話す丈です。さうして、僕の惡い所はちやんと詫る覺悟です其の結果は僕の思ふ樣に行かないかも知れない。けれども何う間違つたつて、そんな無暗な事は起らない樣にする積りです。斯う中途半端にしてゐては、御互に

苦痛だし、平岡君に對しても惡い。たゞ僕が思ひ切つて左樣すると、あなたが嘸平岡君に面目なからうと思つてね。其所が御氣の毒なんだが、然し面目ないと云へば、僕だつて面目ないんだから。自分の所爲に對しては、如何に面目なくつても、德義上の責任を負ふのが當然だとすれば、外に何等の利益がないとしても、御互の間に有つた事だけは平岡君に話さなければならないでせう。其上今の場合では是からの處置を附ける大事の自白なんだから、猶更必要になると思ひます。」（第十六章）これが二人の運命を決する三千代との會見における代助の決定的な言葉である。「明治四十年代の青年」はかうした冷靜な戀愛をしたのであらうか。だが我々は志賀氏の「大津順吉」を、里見氏の「善心惡心」を知つてゐるのである。

　勿論「それから」は單なる戀愛小說ではあるまい。三千代は「三四郎」の美禰子に始まり「明暗」のお延にいたつてほゞ完成する漱石的な女性典型の一人であるが、恐らくその豐富な敎養によつて、古今の戀愛小說のあらゆる技巧に通曉してゐた彼は、いはゆる戀愛小說的な甘さを極力意識して避けてゐる。この小說は

いはば教養ある紳士としての彼の趣味によつて嚴格に統制されてゐるのだ。そして彼の嚴正な趣味は多くの作家が得々として戀愛に醉ふのを事としてゐた當時の文壇においては或る新鮮さを持つてゐたのであらう。だが作家の趣味のために人間を歪めるのは許されぬ事だ。

それに漱石には代助を人間として生かし切る力さへあつたであらうか。云ふまでもなく彼の孤獨がたんなる觀念として周圍の社會と調和してゐる間は、彼は代助の感受性の趣味についていくらでも筆を費すことが出來る。しかし、この小説の結末にいたつて、代助といふ觀念が賴るべきあらゆる社會の良識の支持を失つたとき、彼の「孤獨」がいかなる人間的面貌を呈するか？　漱石は果してそれを正確に想像し得たであらうか？　私は疑ふのである。

周知のごとく、「それから」は現實に「明治四十年代の青年」であつた白樺派の作家に重大な影響を及ぼした。武者小路氏は白樺創刊號で「それから」に對して熱烈な批評を寄せ、代助によつて世の良識を嘲笑する術を學んだ青年達は、たゞ

自己の實生活の感受性を信じて、文學を築き上げることを願つた。そして、この「それから」の實践において彼等は當然漱石の小說を支へた周密な計算はことごとく無視し去つた。しかも漱石とは比較にならぬ素朴な意圖と技法をもつて書かれた「大津順吉」に單に作家の實生活から得た肉體の裏付けがあるといふ事情のみで「それから」にみられぬ主人公の人間的苦痛の明瞭な文學映像を我々が觸知し得るのは何故であらうか。恐らくこゝにはさきに述べた文學的リアリティーの問題の外に、我國獨特の私小說の傳統といふひねくれた事情が横たはるのである。だが、いはゆる白樺派の作家から、新思潮の芥川龍之介、菊池寛に至るまでの、漱石の及ぼした影響といふことは、此處で論及するには厖大すぎる問題であらう。

とまれ、漱石は「それから」以後、この問題からは目をそむけた。彼の主要な關心は人間典型の創造を離れ、人間關係の、といふよりむしろ社會風景の逆說的連鎖の解明にむけられて行つた。前述の如く「心」はその頂點をなすものである。

そして社會關係から生れる人間交渉の逆說的風景描寫に自信を得た彼は、最後にそこから出發して再び人間群像の創造を企圖した。中絶した「明暗」がそれである。「明暗」の津田は恐らく代助の生長したものであらう。お延も三千代に比べれば遙かに成熟した作者の手で易々と操られてゐる。「明暗」は「それから」に較べれば格段に肉付きの豊かな作品だ。だがその肉はあくまで風景畫の肉付きなのだ。從つて「明暗」のリアリティーは「それから」のリアリティーより增しも減りもせぬ。こゝで我々に明かなのはたゞ社會關係の逆說に通達した作者の觀念のみなのである。

漱石は我國の作家には稀に見る豊富な觀念に惠まれた人であつた。だが、彼は觀念相剋の劇は知らなかつた。從つて內奥の劇を知らぬ彼の智性は、たゞ外的風景の解析に向けられて行つたのだ。しかも社會の法則の表裏に通達してゐたが、それに身を曝して對決するほど、法則に追ひ詰められたことはなかつた。云ひかへれば「孤獨」といふ概念はもつてゐたが、その孤獨な人間が互に退つ引きもな

らず强ひられる關係がいかに生々しいかを知る必要をさへ感じなかつたのだ。卽ち社會から强ひられた孤獨の意識に、いかにして人間性を恢復し得るかといふ苦慮の上に鬪はれた近代文學の歷史は彼にとつて無緣な事情であつた。云ふまでもなく彼の豐富な敎養はあらゆる近代文學の技法に通達してゐたであらうが彼自身の文學は芥川龍之介への手紙でみづから云ふごとく「十八世紀派」なのである。恐らく當時の我國においてはさうした文學が存在し得ることを彼は正しく洞見してゐたのだ。我々はこゝに色濃く「明治」といふ時代を感ずる。彼はすべての作家と同じく遂にこれを超え得なかつたのみでない。自ら超えようと努力さへしなかつたのだ。漱石の幸福と共に、併せてその不幸もこゝに存すると私は信ずるのである。

―三五年十月―

二葉亭四迷論

一

今日からみて二葉亭四迷の名が、明治文學史上いはば表玄關の地位をしめることは誰も疑ふまい。

明治二十年から三年間にわたつて書かれた「浮雲」の一作、およびその間に發表した「あひびき」「めぐりあひ」などのツルゲエネフ紹介のみを以つても、彼の業績は文學史上不朽であらう。

事實、彼はおそらく明治文學が我々に傳へた最大の獨創たる言文一致體なる新文章の創始者であり、またある意味で「浮雲」以後十數年にして始めて文壇の主流と化した自然主義運動の先驅者であつた。

我國近代文學最初の、そして決定的な礎石はまづ彼によつておかれたのである。

だが、私は彼が晩年をりにふれて語り殘した談話雜錄の類も、またこれにも增して明治文學中獨自の地位を占めるものだと思ふ。

もちろん「浮雲」の一篇をすら完成し得ずして文學を棄て、半生の放浪を經て「其面影」「平凡」によつて文壇に返り咲いたのちも、機會あるごとに自己をも含めた同時代の文學者を痛罵して止まなかつた彼の言說は、當時の人々にとつてもはや新時代を理解し得ぬ「政治家氣質」の「老いのくりごと」としか取られなかつたであらう。そして今日から讀み返しても、一見、世を拗ねた人にあり勝ちな皮肉や厭味と見られる點がないとは云はれない。

だが、ここに注意すべきことは、彼の言葉には自ら好んで世を白眼視する人の言說に必ずつきまとふ一種輕薄な自己滿足の臭味が決してみられぬといふことである。

自ら世に拗ねた人は必ずその代償として一種安易な自己滿足を得る。いや、むしろ彼等はかうした「自己」を手離したくないために好んで世に拗ねるのだ。そ

してかうした安易な自己滿足こそ、まさしく二葉亭が生涯を通じて唾棄しつづけた所なのだ。（「雜談」參照）したがつて、なるほど彼の晩年の言說は一見したところでは皮肉にみちてゐる。だがかういふ皮肉を弄ぶ自己に對しても彼は決して滿足してゐないのだ。それゆゑに、仔細に讀めば、一見他人に對して放つとみられる皮肉も、實はことごとく彼自身に向けられてゐるのである。そしてこの自己滿足の完全な缺除が、彼の消極的な言葉に一種誠實に貫かれた悲調を與へてゐるのである。

彼の言葉には當時の大多數の作家の言說の根柢を流れる自己の文學活動自體にたいする感傷的な自足は決してみられない。

またそれのみではない。恐らく明治四十年といふ我國の文壇未曾有の轉廻期にすべての作家が外國文學の新意匠の輸入に爪立ちしてゐたとき、自らかつて横切つた道に狂奔する文壇の風潮を餘所に、沈着に何の誇張もなく自己の經て來た二十年の思索の結果を語つた彼の言葉は當時の文學の性格に對する鋭い洞察をも含

んでゐるのではなからうか。
たとへば次の一節などは今日においても全く新しく、豫言的にさへ響くではないか。

「……だから人が文學や哲學を有難がるのは餘程後れてゐやせんかと考へられる。第一其等が有難いとは云ふな、僞の有難なんだ。何となれば、文學哲學の價値を一旦根柢から疑つて掛らんけりや、眞の價値は解らんぢやないか。ところが日本の文學の發達を考へて見るに果してさう云ふモーメントが有つたか、有るまい。今の文學者なざ、殊に西洋の影響を受けていきなり文學を有難いものとして擔ぎ廻つて居る。これぢや未だ未だ途中だ。

何にしても、文學を尊ぶ氣風を一旦毀して見るんだね。すると其敗滅の上に築かれてくる文學に對する態度は『文學も惡くないな！』ぐらゐな處になる。心持ちは第一義で居ても、人間の行爲は第二義になつて現はれるんだから、ま、文學でも仕方がないと云ふやうに價値が定まつて來るんぢやないかと思ふ。

一寸親子の愛情に譬へて見れば、自分の兒は他所の兒より賢くて行儀が可いと云ふ心持ちは、濁つて垢拔けしない心持ちである

然るに垢拔けした精美された心持ちで考へると、自分の兒は可愛いには違ひないが、缺點も仲々ある、どうしても他所の兒の方が可い、併し可愛いとなる。これと同じ事で、文學にしがみ付いて、共でなきや夜も日も明けぬと云ふな、眞に文學を愛するもんぢやないね。今の文學者が文學に對する態度は眞面目になつたと云ふが、眞面目ぢやなくて熱心になつただけだらう。法華信者が偏頗心で法華に執着する熱心、碁客が碁に對する凝り方、那樣のと同樣で、自分の存在の九分九厘は遊んでゐるのさ。眞面目といふならば、今迄の文學を破壞する心が、一度はどうしても出來なくちやならん。」（明治四十一年二月文章世界所載「私は懷疑派だ」）

文學とはかうした「垢拔け」した氣持で携はり得るものか、または二葉亭自身さへ、果して「垢拔けした精美」た生涯を送つたか否かはさておき、當時の自然

主義運動の根柢にたいして同時代人から放たれたこれほど鋭い批評は私は知らないのである。

彼が「浮雲」を中斷し、文學を抛擲したとき、彼の周圍に興つた硯友社文學は明治の社會に於ける、江戸文學の傳統のたんなる返り咲きではなかつた。そしてその文學を單に技法上から否定し、この根強い文學的傳統の基礎には何等の省察をも加へることなく、花袋・藤村、獨歩等によつて築き上げられた我國の自然主義文學は、なるほど大正時代の私小説、心境小説に圓熟して見事に生ひ繁つたが二葉亭の死後二十年ならずして、社會の進展にその存立の根幹を脅かされはしなかつたか。

そして、かうした「ブルヂョア文學」の「價値を一旦根柢から疑つて掛つた」プロレタリア文學によつて口火をきられ、更に前代の私小説を「否定」した新感覺派の登場によつて複雑化した日本文學にとつて、最初の「文學否定のモーメント」は今日にいたるもなほ續いてゐるのではなからうか。そして、この「敗滅」

の上に新たな文學を築かうとする共通の苦慮が、現代の優れた作家を虐んでゐるのではないか。

むろん、かうした事態の凄じい展開を、彼が具體的に豫測し得た譯はない。だが彼は當時の文學の隱れた弱點をもつとも根本的な立場から洞察し、その結果として現代文學の遭遇すべき數々の問題を適確に豫感してゐた唯一の作家なのだ。しかも彼の言說の眞の魅力は、單なる正確な洞見といふ點には存しない。今日からみて、それに獨自な性格を與へるものは、彼がこの正當な自覺のゆゑにいかに苦しんだかといふ事情である。

たんに我國の自然主義運動の「不具の性格」の洞察者といふだけなら、我々は漱石鷗外をその同時代人に、また降つては永井荷風氏をあげ得るであらう。しかし之等の作家はみた當時の文壇の主流と社會との間隙に乘じて、各自の文學を築き得る餘裕をもつてゐた。

それゆゑ、彼等の洞見はいづれも自己の文學的「立場」を擁護すれば足りたの

であり、またそれ以上のものであつてはならなかつた。したがつて今日から見れば、それ等は逆に彼等の「立場」によつて多かれ少なかれ限定されたものである。

そして二葉亭にあつてはこの間の事情はまつたく異なるのだ。勿論、彼は同時代の文學の弱點を明瞭に意識してゐた點ではこれらの作家と變りはない。だが彼は單にこの自覺をはなれて一歩も筆を運びえなかつたのみでない。この自覺そのものに筆を妨げられるのを如何ともなし得なかつたのだ。云ひかへれば、彼の同時代の文學に下した批判は何等の文學的「立場」にもとづくものでなく、むしろ文學そのものにたいする疑惑なのだ。そしてなるほど今日からみれば彼の疑惑は如何にも素朴である。だが重要なのは彼がかうした素朴な疑惑に眞摯に苦しんで來たといふことである。二十四歳の若さで我文壇に劃期的な名作「浮雲」をかき得た彼の文學的才能を誰が疑はう。しかも彼は漱石鷗外が當時の文壇風潮を白眼視しつつ、堂々たる數十卷の制作をのこし得たに反し、わづかに「其面影」「平凡」等、「浮雲」の作者の二十年後の制作にしてはいかにも貧弱な二作をのこし

得たにすぎないのだ。

それのみではない。彼の素朴さはある意味で當時の文學の素朴さである。いかなる作家も眞に同時代の文學精神を超え得ぬとすれば、二葉亭ほど當時の文學精神に素朴に動かされた作家はない。そしてそれを超え得ぬことに苦しんだ作家もないのである。

「二葉亭氏は文學が嫌らひだと言つた。眞劍で文學を遣る氣にはなれないと言つた。それだけ文學を重く見たと言ふよりも、それだけ文學に眞劍であつたと私は言ひたい」（インキ壺）と當時おそらく彼と正反對の立場にあつた田山花袋が云つてゐる。漱石のごとく當代の文學精神から退いて身を守ることは彼の思ひも及ばぬところであつた。

しかも彼が當時の文學に提出した素朴な疑惑は、その眞摯性のゆゑに、あらゆる同時代の作家の冷然たる「洞見」を越えて、その性格の根柢を鋭く貫いてゐるのだ。

そしていかなる「文學的」立場にも拘束されぬ彼の疑惑は當時の文學の「不具な性格」に苦しんで來た人間の聲として今日もなほ人々の心を打つのである。紅葉鷗外、漱石をはじめ。花袋、藤村、獨歩等すべて明治の作家が「文學」について吐いた言葉を我々が理解するためには彼等の作品による註解を必要とするに反し彼の言葉のみは現今のさまざまの文壇的問題に際して無條件に引用されるのはこのゆゑであると私には思はれる。

　だが、我々が今日から彼の言葉を讀むとき注意すべきことは、彼の感想、談話の類には、現代作家には殆んど見られなくなつた一種の羞恥心が根強く働いて、彼の眞實の自己を深く隱してゐる點である。

　なるほどこれらの談話において、彼は自分の經て來た道を僞る所なく語つてゐる。しかし彼はこのさまざまの道程で自己がいかなる形をしてゐたかは決して明らさまには語つてゐない。したがつて、この場合彼が語つてゐるものはいかにも「自己」であるが、その語られた所は決して積極的な自己告白にはなつてゐない

のだ。彼によつて語られた自己はあたかも人中に出された子供のやうに臆病なのだ。かうした彼の羞恥心を我々は内田魯庵氏とともに二葉亭の一生を貫いた「天才肌の『シャイ』即ち俗に云ふ羞恥み屋の面影」をみることも、または正宗白鳥氏とともに彼の一生を支配した封建的武士氣質の潔癖を見ることもできよう。

だが重要なことは、彼の言葉のかうした消極的な性格を無視してはその眞に意味する所は決して把握できぬといふ事情である。

彼はその全作品を通じて遂に眞の自己告白をなし得なかつた人である。したがつて彼の言葉は人々の間を歪められることなく渡り歩く力をもつてゐないのだ。これらの言葉はむしろただ愼ましげに彼自身のために生きてゐるのみである。そしてこれがまた恐らくそれらの言葉を吐いた主人公の意圖なのだ。

勿論我々は今日の立場から、この點について彼を責めることはできる。だがそれは自ら別問題なのだ。自己について、眞に朗々たる告白に堪へ得たる彼は別の人になつてゐたのだ。

そして當時大部分の作家が、熱烈に、そして輕々しく「自己を主張」してゐたなかで唯一人自己を振りかへり、振りかへり語つた彼の、自分なりに誠實た言葉はその彼自身に對して持つ意味を探ることなくして決して理解出來ないのだ。

しかも彼自身に强ひられた退つ引きならぬ不幸を無視すれば、彼の言葉はその消極的な性格のゆゑに矛盾にみちてをり、したがつて各自がいかやうにも勝手な解釋の下せるものなのだ。

今日文壇に、事あるごとに彼の名を引き合ひに出す人は果して彼の言葉のこの性格を深く顧みたであらうか。

ことによると、二葉亭が今日の文壇に對して持つてゐる「新しさ」の大部分は彼の言葉の意味の曖昧さによるものではなからうか。

だが彼の言葉が今日もなほ生き殘つてゐる所以が、その消極的な性格に、さらに附け加へられた消極的な事情にあるとは情ない話だ。かうした精神の吝嗇を必要とするほど、果して我が明治文學史は貧儉なのか。

さなきだに貧弱な明治文學をかうした吝嗇な精神で處理したところで、我々は何を生み得るのか。一人の人間を一個の概念で代位し得ぬと同じく、或る種の作家に我々の好んで貼りつけるレッテルは決してその本質を明かしてはくれないのだ。

たとへば「文學は男子一生の事業ならず」とは二葉亭の面上に貼られたレッテルである。

恐らく二葉亭の作品を一行も讀まぬ人も彼についてこれだけは知つてゐるであらう。そしてこの通念は例へば久米正雄氏がその純文學餘技説で「明治以來、優れた文學を考へ見るも『浮雲』が男子一生の餘技になつたのは言ふ迄もなく」とまで、これを彼の代名詞に斷定しても誰も怪しまぬ程今日では一般化してゐる。

だが二葉亭が「浮雲」を書いたのは果して「餘技」としてであつたか　云ひかへれば、「浮雲」執筆當時の彼が文學以外にいかなる「生活者」としての「存在理由」を持つてゐたか、といふ問題はさておき、二葉亭が「文學は男子一生の事業

ならず」などと一體どこで云つたのか。私の讀み得た限り、彼は少くとも公衆の面前では、どこでもこんな斷定的な言葉を吐いてはゐないのである。

今日一般にその根據として流布してゐるのは、彼の次の言葉であらう。

「私は筆を執つても一向氣乘りがせぬ。どうもくだらなくて仕方がない。（略）子供が戰爭ごつこをやつたり、飯事をやる。丁度さう云つた心持だ。そりや私の技倆が不足な故もあらうが、併しどんなに技倆が優れてゐたからつて、眞實の事は書ける筈がないよ。

よし自分の頭には解つてゐても、夫を口にし文にする時にはどうしても間違つて來る、眞實の事はなかなか出ない。髣髴として解るのは、各自の一生涯を見たらばその上に幾らか現はれて來るので、小說の上ぢや到底僞つぱちより外書けんと斯う頭から極めて掛つてゐる所があるから、私にや彌々眞劍にやなれない。

併しながら、斯う云ふと、私一人を以て凡ての人を律するやうに取られるかも知らんが、さう云ふ心持でもないんだ。私一人がいけないんだね。ただ自分がさ

ういふ心持で、筆を持つちやどうしても眞劍になれんからなれるといふ人の心持が想像されない。眞の文學者の心持が解らん。だから、眞劍になれるといふ人があれば私は疑ふ。が、單に疑ふだけで、決してその心持にやなれぬと斷定するまでの信念を持つてゐる譯ではない」(私は懷疑派だ)

いかにも遠慮がちな言葉である。彼がここに語つてゐるものは決して一般に流通する公式ではない。文中で繰り返し斷つてゐるやうに、それはただ彼自身にのみ妥當する個人的感慨なのだ。そしてこの感懷すら、果して文學否定の言葉であらうか。

むろん、「文學」にたいしてかうした暴言を吐いた作家は明治文學を通じて彼一人である。したがつて、これと、そのあとに續く、文學では「直接の實感」が得られぬといふ彼の言葉から性急に彼を文學否定者に仕立てるのは容易であらう。だが「よし自分の頭には解つてゐても、夫を口にし、文にする時にはどうしても間違つて來る。…… 髣髴として解るのは、各自の一生涯を見たらば……」とい

ふ彼の言葉と、左のドルゴオルキイの感懐とどこが違ふのか。

「わたしはいま自分の書いた事を讀み返して見て、自分自身の方が書いたものよりよつぽど利口だといふ事を發見した。どうしてこんな事になるのだらう？ある人間の言つた事が、その人自身の中に殘つてゐるものより、ずつと馬鹿げてゐるといふのは、どうした譯だらう？」と。

また、

「私は一體自分の主題を見出すことができるでせうか。いつかは自分の天性に適つた思想が天から降つて來ることがあるでせうか。私の全存在が注ぎ込める本を一體かくことができるでせうか。私もときどきは思ひ上つて、小說とは如何なるものかが少しは解りかけたやうな氣がすることがあります。

しかしそれを書く前に私は三つか四つの小說をかゝねばなりません。（しかもその眞の小說といふのは極めて漠然たるものです。）

そして今の調子で行つたら、精々この三つか四つが書けるにすぎないでせう。」

とは五十歳のフロオベルの言葉である。

そしてフロオベルが、ドストエフスキイが文學否定者だとは誰もいひ得まい。しかも、表現の様式こそ違へ、この三者の言葉はみな同じことを云つてゐるのである。

人間の生活感情の總和に、完璧な文學表現がいかに與へ難いかといふ絶望的認識文學上の安易な自己表現に對する痛烈な嫌惡といふ點では變りないのである。

そしてこの疑惑はすべて誠實な近代作家にあつては正當な、むしろ必須なものでさへあるのだ。したがつて二葉亭をこれらの「眞の文學者」から分つたものは斷じて文學に對する懷疑の有無ではない。それはいはば彼の懷疑の消極的な性格に存するのだ。

云ひかへれば、これらの大作家が上述の疑惑を眞正面から直視し、これを逆用し、これを超えたところに堂々たる文學表現を築き得たに反し、二葉亭は最初からかうした疑惑に堪へて文學を築くことを放棄してゐたといふ點である。彼はた

んにこの疑惑を文學上に生かして行く道を發見し得なかつたのみではない。作家としてかうした疑惑を抱くことの正當さについての確信さへ抱けなかつたのだ。

　おそらく彼は明治文學において、これらの眞の近代作家と同じ場所で闘ふことを強ひられた、唯一の作家なのだ。けだし彼の強烈な觀念的資質と、それに伴つた外國文學の廣いとは云へぬにしろ、他に比類を見ぬ深い教養が彼をこの地點に導いたのだ。

　だが彼はそこに勝利への道はおろか、戰ひの可能性をすら見出し得なかつたのだ。かうした彼がしばしば文學嫌惡の言辭を弄したとて、それはむしろ當然なのだ。だがそのために彼が作家でなかつたと云へまい。彼は單に花袋のいふごとく文學にたいして「眞劍」であつたのみでない。同時代の作家がいづれも文學を悠悠たる安易な自己表現の場所としてゐたときただ一人その可能性の喪失に苦惱した彼が他のいかなる作家より熱烈な作家的資質の持主でなかつたと誰が保證し得ようか。

「二葉亭は青年時代ゴンチヤーロフやドストエフスキイに傾倒して志を文學に立てながら、其の後文學に慊らなくなつたのは文學の避くべからざる遊戯氣分に堪へられなかつたからである。文學は果して二葉亭の信ずる如く遊戯氣分を避けられない乎、假に避けられないとしてもそれ程忌むべきものであらう乎は攻究すべき餘地があるが、それは別問題として文學に對して二葉亭ほど眞劍なのは無い。二葉亭の人生に對するや實驗室に於ける科學者と等しく一々精密なる實驗をして數學的に發明しなければ納得しなかつた。

「『浮雲』第二篇は卽ち其の實驗報告で、當時或人が恰も地層の斷面を見るやうだと評した。(略)『其面影』や『平凡』や後期の作には酸いも甘いも嚙分けた二葉亭の苦勞人振描寫は窺へるが、前期の眞劍な科學者的人生報告は却つて見られない。藝術的効果はドチラに軍配を擧げて可なるかは人によつて各々說はあらうが二葉亭が日本の創作界に新たに開拓しようとした、新しい嚴肅な人生觀照は『浮雲』第二篇以後の誰の作にも、二葉亭自身の作だにも見られなくなつた。」と、彼

の友人であり、またおそらくその唯一の理解者であつた内田魯庵氏が彼の作品集の冒頭に序してゐるのはこの間の消息を語るものであらう。彼のかうした不幸を社會學的にまたは心理學的に說明することも、今日からはおそらく容易である。だが近代文學に携はる者が例外なく强ひられる上述の戰ひが如何に困難であり、少數の表現上の天才の陰にいかに多數のものが斃れるかを思ふとき、彼の不幸がやがて我々の不幸でないと誰か云ひ得よう。

そしてこの場合、問題は彼の（または我々の）個人的不幸を越えてゐるのである。我國においては、眞の近代文學はいまだ生れ得ないのだ。そして、我々は明治文學はひとりのプーシュキンをさへ持たぬのだ。

かかるとき、二葉亭の强ひられた不幸は、いかに貧弱であらうと、必ず何等かの敎訓を與へる筈である。

我々はすでに現代文學の提出するさまざまの問題が、いづれも萠芽の形が彼を虐んだのを見た。そして彼はこれに處するに當つて或ひは素朴かつ幼稚であつた

かも知れぬ。だが少くも、卑怯な回避を潔しとはしなかつたのだ。

「二葉亭は小説家で終るを喜ばなかつたが、終生志を得ないで、自ら屑しとしない小説家として終に最後の幕を閉ぢたのは生活それ自身が一生の使命の顛み悶えた小説であつた」と内田氏はいふ。だが我々は彼の生涯をたんなる「小說」としてみてよいのか。明治といふ若くそして古臭い社會において彼の演じた悲劇は今日我々にとつてもなほ「現實」なのでなからうか。

二

「浮雲」は未完成の小說である。未完成といふことを忘れてはならない。この單純な事實を無視してこの小說は決して理解出來ないのである。何故なら、それは單に中絶したのみではない。この未完成といふ性格によつて全部にわたつて鋭

く歪められた小説なのだ。

むろん、かういふ事情は作家にとつて何等の辯解にもならぬ。そして二葉亭自身も「浮雲」について語る際に決してこの點に觸れたことはなかつた。したがつて當時の批評家はことごとくこの點を見逃してゐる。だがこの作者の意圖と世評との食ひ違ひこそ「浮雲」のもつ歪みの證左ではなからうか。

「例へば『浮雲』に對する世評の如き、皆口を揃へて喋々稱讃したが、渠等の稱讃は皆見當違ひ或は枝葉末梢であつて、凡近卑小の材を捉へて以て人生の葛藤を描かうとした作者の觀照的態度に想到して批判を加へた者は殆んど一人も無かつた。勿論此目的は失敗に歸したが、其の失敗を認めて考察の足りないのを痛切に感じたのは作者自身であつて、世間の讀者は（文壇の審判官たる批評家さへも）作者が油汗を流した人生觀照には全く無關心沒交渉であつたから、如何に感嘆されても見當違ひの感嘆では甘受することが出來ないで、先づ出發の門出からして不滿足を感ぜざるを得なかつた。」（二葉亭四迷の一生）と、内田魯庵氏は書いてゐ

る。勿論この場合罪は單に批評家にあるのみではない。作者は「失敗」に終つた目的を讀者に强ひる權利は持たないのである。だが作者の意圖が全く失敗に終つた小說が讀者の稱讚を博する筈もないことを思へば、我々はこの內田氏の一見明白な矛盾を含んだ言葉に二葉亭の作品の强ひられた異樣な歪みの端的た表現をみるべきであらう。

そしてこの歪みは制作の進行とともに益々甚だしくなつたのだ。

たとへば、當時「浮雲」を喝采した人々は果してこの華やかな成功の裏に次の血を吐くやうな作者の言葉の潜むのを想像し得たであらうか。

「『浮雲』第三篇は『都の花』に載することに定めて、其草稿を編輯所に送りたるは、去る六月の事なりき。其後書肆の手代來りし時、談話の序に『浮雲』は來月の七日發刊の『都の花』に載する筈に候といひしが……果して送り越したり。乃ち取る手わななくばかり急ぎて開き、他人の作には眼を留めず、先づ我が作を求め出だせり。其時は爲す事の善惡をほとほと考ふる遑はなく、只インスチンク

トに働かされて、知らず識らざるうちに然かせしなり。

わが作を求め出だせしかば、先づ之を手に持ちて、歩みながらに讀みもてゆくほどに、手先をのゝき出だせり。其前より戰きをりしや否やは知らず、ただ其時になりて心附きしなり。次いで忽然として顏を眞紅に染めたり。「かほどまで拙しとは思はざりしが、印刷して見れば殆ど讀むに堪へぬまでなり」と心のうちに思へり。

讀み終りても、心落ちゐず、ちぎれちぎれの獨語をわれにもなく言ひつゝ、間斷なく躍るやうに部屋の内を歩みめぐり、つひに堪へかねて、兩手にわが頭を×りつけり。

されど我に返りて思へば、かかることに精神を惱亂するは甚だ拙しと恥かしくなりしほどに、ふとまた雜誌を受取らざる前、氣結ぼれて心地死ぬべくおぼえし時、遙かに空を見上げたるに、やや心のどやかになりたるを憶ひいだし、と同時にわが顏はおのづから擧りて、眼は蒼空に注げり。此時蒼空は余のために唯一の

解毒薬の如くに思はれしなり。されば精神の惱亂は甚だしくして、さることにては收まらず。つと起き上りて、また部屋のうちを歩きながら獨語をいふ。何か急ぎたる用ありて何處かへ行く必要を感ずれども何處へ行くべきか、其處を知らぬやうなる心地なり。……尙ほ落ちつかんものといろいろの書など讀めど、目に文字を誦するも、心に其意義を解さず、且つさう安然と讀書してゐられぬために、書物を擲ちて、また歩きいだせり。『今まで某々らの作る小説は拙くして讀むに堪へずと思ひつるが、余の作に比ぶれば彼等の作は遙かに優れり。余は原來小説家ならず。また小説家ならんとも思はず。（雜誌を讀まざる前までは小説家とならんと思ひし事は此時打忘れたるなり。）かかる事に拘ひをる人は愚の至りなり。若し幸ひにして×××事ならば、余は精神の力を盡して哲學を修め、再び小説などは作るまじ』と思ふ下よりまた若し××の事成就せば、一年間筆を馴らさんがため走り書きにのみ書くべし。草稿を起して漸く小説を綴るほどにては傑作などといふものは出來得べくもあらず。余が筆はいぢけたるがわるしなど思ひ、或は

或人が曾て言ひたる語に、余は不才にして小說家となること能はじといひたるを看出して嘆息し、或は尙ほ力めはげめば、たとひ文章は拙くとも理想をもて勝るほどの物は作り得べきかと思ひて、更に心定まらず。されど就中余の筆はいぢける癖あるを深く感じたれば、之を矯むるの念頻りにて、遂に筆を執り、此一節を走り書きにす。」（未發表遺稿、坪內氏肺の帶より引用）

或る人はこゝに單なる作家として自信の極端な缺乏を見るかも知れぬ。だが彼の苦惱は明かに自作の價値の判定を他人に俟つほかはない作家尋常の苦しみを越えてゐるのである。

事實彼は「浮雲」第三篇を最後とし約二十年間にわたつて創作の筆を絕つたのだ。

そして、云ふまでもないことだが、「浮雲」第三篇はその前年に發表した第二篇と同じく、充分好評であつたのだ。

しかも、それが作者にこれほどの惱亂を強ひるのだ。「浮雲」がその成立にあ

たつて蒙つた歪みがどれほど甚だしいか我々は知るべきなのだ。そしてこの歪みがほとんど半狂亂の發作のなかでさへ、以上の短文を小說修業のために誌した彼の文學的熱情を殺して行つたのだ。おそらく彼の熱烈な筆は、これ以上歪み「いぢける」に堪へなかつたのだ。

ではこの歪みとは一體何なのか。これを解く前に我々はまづ彼の實生活について知らねばならぬ。何故ならばこの「浮雲」の遭遇した運命は、ある意味で彼自身の生活の不幸の象徵であるからだ。

二葉亭の生涯を知るためには、內田魯庵氏の「二葉亭四迷の一生」に優る文献はない。氏は單に二葉亭生前の友人として彼に關する豐富、正確な資料を驅使してゐるのみでない。この思ひ出は故人に對する著者の愛情が、濃やかにかつ自然に織り込まれてゐる點で、はるかにこの後に書かれた坪內氏の「柿の蔕」に優るものである。坪內氏は單にこれに若干の資料を附け加へ得たにすぎぬ。以下私は

大體内田氏の記するところに從つて、彼の生涯の輪廓を辿らうと思ふ。

二葉亭四迷、すなはち長谷川辰之助は、元治元年二月、尾州の藩士であつた長谷川吉數の嫡子として江戸市ケ谷に生れた。そして五歳のとき明治維新に際會し母に伴はれて名古屋に行き、十歳まで其處に止まり、明治五年に歸京。さらに同八年には官吏となつた父に伴はれて松江に赴き、同十一年にふたゝび東京に戻るまで三年餘の歳月を此地に過した。そして彼の教育も、明治四年八歳のとき名古屋學校に入學して佛語を修めたのを最初に、松江の相長舍で漢學、同時に松江變則中學校で普通學、さらに歸京してからは森川塾で代數學を半年ほど學び、後芝の濟美黌で漢學と數學といふ順で不規則極まるものであつた。

これは云ふまでもなく、維新の變動に遭つて祿を離れた武士階級の不安定な生活と、明治政府の政策によつて生れつゝあつた新社會の未熟な慌だしい世相との反映であらうが、この目眩ましい環境の變轉と、送迎の暇なく注入される新知識とが、鋭敏な彼の青年期に影響し、その晩年にいたるまでの彷徨癖の素地を作つ

たことは爭はれない。

少年のころ彼を捕へた情熱は政治であつた。これは明治初年といふ我國未曾有の激烈な過渡期に成長し、しかもそのために生ずる社會的動搖の直接に犧牲となつた家庭からこれに面接せねばならなかつた舊藩士の子弟には共通の運命であつたらう。

內田魯庵氏は彼の東方問題に對する興味が西鄕の征韓論に胚胎するといひ、早熟な彼が西鄕隆盛の肩を持ち、西南戰爭に際して大浦兼武の部下であつた伯父にしばしば議論を挑んだといふ挿話を擧げてゐる。

明治十一年には彼の在學した濟美黌の塾生杉村文一が大久保利道暗殺に加擔したため、塾生一同家宅搜査を受けるといふ事件が突發した。

かうした環境にあつて、彼が當時勃興した自由民權の運動に敏感でなかつた筈はなく、おそらく吉田松蔭とともにルソーの民約論を耽讀し「板垣さんは自分の叔父さんか何ぞのやうに思つてゐた」自由黨ファンであつたことと思はれる。し

かしこの頃三たび陸軍士官學校に入學を志願してゐる所をみれば、彼の主要の關心は矢張り國際問題にあつたのであらう。彼自身も當時を追想して次のやうに云つてゐる。

「何でも露國との間に、かの樺太千島交換事件といふ奴が起つて、だいぶ世間がやかましくなつてから後、『内外交際雜誌』なんてのでは、盛んに敵愾心を鼓吹する。從つて世間の輿論は沸騰するといふ時代があつた。すると、私がずつと子供の時分からもつてゐた思想の傾向――維新の志士肌ともいふべき傾向が、頭を擡げ出して來て、即ち、慷慨愛國といふやうな輿論と、私のそんな思想とがぶつかり合つて、其の結果將來日本の深憂大患となるのはロシヤに極つてる。こいつ今の間にどうにか禦いで置かなきやいかんわい――それにはロシヤ語が一番に必要だ。と、まあ、こんな考からして外國學校の露語科に入學することとなつた。」

(予が半生の懺悔)

陸軍士官學校は近視眼のため、三度とも不合格になつたので、彼は「右のやう

な一種の帝國主義(インペリアリズム)に浮かされて」明治十四年五月外國語學校露語科に入學した。
　そしてこの「帝國主義」はある意味では晩年のロシヤ行きにいたるまで彼の生涯を通じて失はれなかつたものである。そしてこれが二葉亭を論ずるに當つて、「政治家」としての彼と「文學者」としての彼を對立させ、彼がその「政治的情熱」のために文學を捨てたとする、今日もなほ根深い俗說の起つた所以であらう。
　しかし彼には「維新の志士肌」こそあつたかも知れぬが、政治家としての素質も才能も全く缺けてゐたことは、彼を識るすべての人が等しく認めるところである。なるほど彼の國際問題にたいする興味は晩年にいたるまで衰へず、彼自身もみづからこれに手を染めたことも屢々あつたが、一度もその抱負を實現し得たことはなかつた。そして恐らくこの絕好の機會であつた北京の京師警務學堂提調の職をさへ半年たらずで「腹を立てるほどの事でもなかつたのを少し早まり過ぎて」（內田氏への直話）抛つてしまつてゐる。
　この北京の學堂提調時代は、彼が最期に中途で斃れたロシア行きを除けば、彼

の「政治的」活動の頂點であるが、彼の非政治家的天性がこれほど美しく露はれた事件もないのであり、また彼がまつたく文學に對する關心を棄ててゐたこの前後の數年間ほど、彼の作家的資質が傷ましく曝け出された期間もないのである。そして全然文學活動を休止してゐたこの時代の彼に再び觸れる機會もないと思はれるので、以下少しく詳述することにする。

彼がハルビンを經て、北京に赴いたのは、明治三十五年春であるから、「浮雲」の完成を斷念し、文學を抛つてから十餘年のちである。その間彼は約八年間內閣官報局の屬僚として、內田氏の言葉をかりれば、

「其時分、文壇の機運は愈々爛熟し、紅露は相對壘して互に覇を稱し、鷗外は千朶山房に獅子吼し、逍遙は英髦を率ゐて早稻田に威武を張り、樗牛は新たに起つて旗幟を振るふ」のを全く餘所目にみて暮してゐた。

彼はこの地位を、かつて外語時代の恩師であり、現在官報局の一員であつた古川常一郎の推擧によつて得た。そして當時の官報局は局長に「自恃庵主人」高橋

健三をいただき、「吏臭紛々たる明治官吏に在つて、蓋し類を絶するほど、自由の空氣の通つてゐる」例外的な棲み心地のよい役所であつた。
「當時の官報局は頗る異彩があつた。局長が官界の逸民たる高橋健三で、飜譯課長が學界の隱者たる濱田健次郎、其下に古川常一郎、陸實等、何れも聞ゆる曲者が顔を列べ、而して表玄關の受付には明治の初年に海外旅行免狀を二番目に詩取つて露國の腦脊髓系を縱斷した大旅行家嵯峨壽安が控へてゐた」。局長と云ひ課長と云ひ屬官と云ふは職員錄の空名であつて、堂々たる公衙は恰も互に相下らざる書生放談の下宿屋の如く、局長閣下の左右一人として吏臭ある者なく、煩瑣なる吏務を取るよりは寧ろ詩を品し畫を評し道德を說き政治を談じ、大は世界の形勢より小は折花攀柳の韻事を語るに日も足らずであつた」と内田氏は書いてゐる。
かうした「官廳」がいかなるものか、恐らく今日からは我々の想像の外であるが、この「意外な自由の空氣」の御蔭で、彼は「浮雲」の文三の運命を免かれて八年の長きにわたつて勤め得たのだ。

そして文壇を韜晦し切つた彼にはもはや「浮雲」執筆當時の苦惱もなく、同時に衣食の道も立つた彼は「局長閣下と盛んに人生問題を論ずる」かたはら恣いままに「哲學」を渉獵してコント、スペンサア、モーズレーを耽讀し、さらに「下層社會研究」に「人生を味つて」ゐた。

「奇妙な風をして――例へば洋服の上に羽織を引掛けて肩から瓢箪を下げるといふやうな變挺な扮裝をして田舎の達磨茶屋を遊び廻つたり、印絆纏に彌藏をきめ込んで職人の仲間へ入つて見たり、かと思ふと洋服に高帽子で居酒屋に飛込んで見たり、垢染みた綿服の尻からげか何かで立派な料理屋へ澄まして入つて見たり、大袈裟に威張散らして一文も祝儀をやらなかつたり、態と思ひ切つて吝つたれな眞似をした揚句に過分な祝儀を氣張つて見たり、シンネリムツツリと佛頂面をして置いて急に噪ぎ出して騒いで見たり、種々雑多な眞似をして一々經驗を味つて見て之が人生(ジーズニ)だよと喜んでゐた」と内田氏は、彼の當時の奇行の一端を叙してゐる。むろん、これらの行動は彼にとつて主觀的には一々眞面目な動機があつたの

であらうが、かういふ氣紛れが何等の「人生」を明かにした筈はなく、彼の「下層研究」も遂に實を結ばず失敗に終つたが、彼が內的にも外的にもかうした餘裕を持ち得たのは、生涯を通じて、ただこの時期のみであつた。「當時、其俸祿は薄く其家庭は圓滿を缺いてゐたが、猶且二葉亭の一生中其位置に滿足して矻々として其職を樂んでゐたは官報局の雌伏時代あつた。」と內田氏も云つてゐる。

だが、いかに明治初年であらうと、かうした官廳の例外的存在が何時までも許される筈はなく、官報局長が更迭して、高橋健三に代つて奧田義人が就任するや陸、濱田、古川はことごとくその手から追はれ、二葉亭もまたその「吏臭」に堪へず古川に殉じて退官した。

だが彼が官報局を罷めた原因としてはこれ以外に「何時かは俗吏の圈內を脫して自由の天地に翺翔せんとする豫ての志望が幇助つてゐた。元來二葉亭は軍事であれ、外交であれ、左に右く何であらうとも東亞の舞臺に立つて活動したいのが

夙昔の志であつた」と内田氏は附け加へてゐる。

そして「此野心を滿たすために」必要な金を調達すべく實業に身を投じようとした、と書いてゐる。だが彼が自らこの間の消息を語つた「予が半生の懺悔」によると、これはそれ程空想的なものではなく以上の順序は逆になつてゐる。勿論内田氏の言葉が傍觀者の觀察の結果であるとすれば、二葉亭が晩年に語つた所は無意識にせよ自己辯護の意圖を含んでゐよう。

だが、それは少くとも友人の冷徹な觀察に對する彼自身の辯解として引用する價値はあらう。

彼の言葉は官報局時代の思想的彷徨に始まる。

「…だから思想上人生問題の解決が付くか否かは解らんが、一方で人間に『仁』の氣象を養つたり、何となく人生を超絶して、一段上へ出る鹽梅で、苦痛にも何にも捉へられん、佛者の所謂自在天に入りはしまいかと考へた。そこで心理學の研究に入つた。古人は精神的に『仁』を養つたが、我々新時代の人は物理的に養

ふべきではなからうかといふ考になつた。心理學、醫學に次いで、生理心理學を研究し始めた。是等に關する英書は隨分蒐めたもので、殆んど十何年間、三十歳を越すまで研究した。吳博士と往復したのも、參考書類を讀破しようといふ熱心から、獨逸語を獨修したのも此時だ。けれども其結果、どうも個人の力ぢや到底やり切れんと悟つた。ヴントの實驗室（ラボラトリー）、ヂエームスの實驗室（ラボフトリー）、其等が無ければ、何時迄經つても眞の研究は覺束ないと思ひ出した。そんなら錢の費らん研究法をしなくてはならんが、其には自分を犧牲にして解剖壇上に乘せて、解剖學を研究するより外仕方がない。當時は醫學上の大發見の爲に毒藥を仰いだりした人の話が頭にあつたから、そんな犧牲心も起したんだ。卽ち私の心的要素（マインドスタッフ）を種々の下に置いて、揉み散らし、苦め散らし、散々な實驗を加へてやらう。そしたら學術的に心持（メンタルトーン）を培養する學理は解らんでも、その技術（アート）を護ることは出來やせんかと云ふので、最初は方面を擇んで、實業が最も良からうと見當を付けた。それで實業家と成らうと大分焦つた。が併し私の露語を離れ離れにしては實業に入れぬから

露國貿易と云ふやうな所から段々入らうと思つた。そして國際的關係に首を突込んで、志士肌と商賣肌を混ぜてそれにまた道德的の事も加へたり何かして見るとかのセシルローヅなぞが面白い人物と思はれるやうになつた。」云ふまでもなく彼のこの言葉が僞りである筈はない。またここに衒學的な誇張がある筈もないのだ。『仁』のメンタルトーンを養ふために實業に從はうと決心した彼の論理がいかに突飛であらうと、また四十歳に近い身でセシルローズを夢見る彼がいかに子供らしからうと、彼の思索そのものは飽くまで眞摯なのだ、なるほど右いやうなる。だが私はこの短い言葉に二葉亭の思索の根本形式を見る思ひがするのだ。眞彼の結論は、內田氏の觀察が彼について語るところと同じく非實際的なものであ摯な思索も、時としては滑稽な行爲を生む。だがそのために思索そのものの眞摯性を嘲笑することは許されない。そしてドンキホーテを讀まずに、これを嗤ふのは我我日本人に根深い惡癖なのだ。

かういふ彼の言動を、單にその觀念的頭腦の生んだ欺瞞として笑ふことは容易

である。だがここで問題なのは彼の生活を引摺つて止まなかつた、彼の觀念の强さである。

またはは四十歳にして單なる一觀念の命令の故に己れの實生活の規範を破り得る彼の精神の素朴さである。

彼は單なる道德的判斷から（云ひかへれば自己の優越を自分自身に納得させたいために）己れの思索の結論に「誠實」であつたのではない。彼の思索そのものが否應なし彼を行動に驅つたのだ。

なるほど彼の思索はすべての明治時代の文人思想家のそれと同じく倫理の――そしてしばしば東洋倫理の――影を帶びてゐる。

だがその思索を行動に移すに際しては、彼は處世的な「反省」はいささかも行はないのである。その必要を認めないのではない。自己の强力な觀念に引き摺られる彼にはその餘裕がないのである。そして東洋倫理とは究極するところ一種の處世術であるとすれば、ここに彼をあらゆる明治の思想家作家から分つ西歐的性

格が存するのである。

勿論、生涯何の秩序ある體系にも達し得なかつた彼は思想家としては薄弱な頭腦の持主であつたかも知れぬ。だが、その獨自の思索の經過において得た結論に彼ほど素朴に動かされた精神の持主は明治の一思想家一中絶無なのである。彼の觀念はその强力さの故にその命ずる所を行爲に移すに當つていささかの氣取りをも彼自身に許さなかつた。彼はきつたく當り前な顔をしてまつしぐらにさまざまな愚行（といふのは處世術を無視した行爲である）に飛び込むのだ。しかも、その「愚行」は例外なく彼を傷け、彼を新しい觀念に投げ返すのだ。

彼を苦しめたものが常に「人生問題」であつたのも、また彼が幼時に受けた激しい儒教の感化から次第に蟬脫して、スペンサア、モーズレー、コントの實證主義哲學を彷徨したのもみなこの故なのだ。

むろん、この彷徨は單なる彷徨に止まつた。「人生」に關する何等かの解決を哲學に求めて安住し得るためには、彼の感受性にはあまりに銳く、その造りあげる

諸觀念もまたあまりに豐饒すぎたのだ。ここに哲學書をよむと同じ氣構へで、遊廓茶屋に遊ぶといふ彼の奇行が生じたのであらうが、それでは兩方とも彼に何の「解決」も與へなかつたことは、先に誌した通りである。内田魯庵氏はその「思ひ出」のなかで彼のこの時代の「奇行」をこのほか無數にあげてゐる。そして彼が晩年にそれを追想して、「あの時代には……矢張露國の小説に誤まられたので……」と述懷したと付け加へてゐる。

勿論二葉亭を「誤つた」のは單に露國小説のみであるまい。ロンブロオゾオもスペンサア、コントも、そして結果から見れば儒教倫理さへ彼を「誤つた」のであらう。

だが重要なのはこれらの思想にそれぞれ眞摯に生き得た彼の、ほとんどプラトン風の自己の思索に對する信念の素朴さである。そして彼の奇怪な行動はみなこの信念から直接に流れ出た結果であるとすれば、彼もまたバルザックの所謂「作家をして政治家と同等にまたはその優位に列せしめるもの」の一つである「原理

への絕對獻身」を持ち得た人だつたのだ。そして同じく人間喜劇序文中の言葉を引いて、彼をソクラテス、キリストの種族に加へたら、おそらく「平凡を棲家とする」彼は苦笑するであらう。

だが彼はルーテルやカルヴインには絕對になり得なかつた人なのだ。」

觀念に對しても、このやうに素朴であつた彼は、自己の周圍の人間に對してはいふまでもなく更に素朴であつた。

勿論、二十餘歲の若手ですでに文學史上一流品として殘る「浮雲」を書き得た彼が銳い人間觀察を持たなかつた筈はない。むしろ彼の感受性は周圍の人々と交はるに際して、後世自然主義の作家によつて提唱され、今日なほ彼等の悪しき遺產として我々を毒してゐる意識的な「人間觀察」を必要とせぬくらゐ銳敏だつたのであらう。そして彼がすべての友人から「狷介」のそしりを受けたのはこの故であらう。

だが傍観者の立場からは狷介不羈と形容するほかはない彼の生涯のさまざまの行動が、いづれもみな根本においては殆んど無垢といひたいほどの素朴な信他癖に貫かれてゐることもまた爭はれぬ事實であり、坪内、内田の兩氏をはじめ、彼の親炙した人々の例外なく認める所である。

すでに内田氏によつて記録された彼の「奇行」さへこれを證して餘りあるものであらう。いかに哲學的情熱に煽られたにせよ心底に燃える素朴な人間信頼なくして、誰が「人生問題の研究」のためかうした突飛な愚行を敢へてなし得るであらうか。

彼の「人生問題」の研究がそのままいはゆる「下層研究」に移つたのも、それらがおそらく常人の持ち得る人懐つこさをはるかに超えた、彼の生得の資質たる純潔な信他心に貫かれてゐたからだ。いやこれは根本においては彼の心底に潛む素朴な人間信頼の二つの面にすぎなかつたのであらう。そしてこの二つの面の調和が彼の生涯を貫いた希ひであつたのだ。

勿論、この調和の試みは周知のごとく慘憺たる失敗に終つた。だが重要なことは、彼が「人生」に對する自己の信念は社會を素材として築き上げられる外はなく、また彼にとつて「社會問題」の解決とは自己の「人生」に對する信念の成熟なくして有り得ないことを本能的に自覺してゐたといふことである。むしろ彼はかうした自覺を強ひられて生きたのだ。この自覺は、或る種の人々には矛盾を含んだ空想としかみえぬであらう。だがそれは彼等がこの自覺の實踐的な性格を見落してゐるからなのだ。

二葉亭にとつて、この自覺は何等の「理論」に基くものではない。云はば彼の生得のテムペラメントから直接に流れ出たものなのだ。したがつて、その根柢を貫く素朴な愛情を糧として、この自覺を試して行くほか彼には生きる道は存在しなかつたのだ。

社會とは、かかるとき、彼にとつて一の巨大な人間の集合に外ならない。そして人間とは先づ何より彼の自覺の試金石なのだ。すなはち、彼にあつては熱烈な

觀念的傾向が無垢な人間信頼を少しも傷けず、それらが相並んで彼の裡に生きる場所を見出したのだ。といふよりこれらはむしろ彼の生活の相扶け合ふ二つの面であつた。

彼の思索はたんに人間的な問題を離れ得なかつたのみではない、彼にとつて觀念とは常に人間と同じ大きさしか持ち得なかつたのだ。したがつてかうした觀念に苦しむ彼自身は周圍の人々より大きくも小さくもないのである。

これは偉大な、といつて惡ければ稀有な作家的資質である。彼ほど思想的教養をつみながら、それを踏臺にして人間を高所から見下さなかつた人を私は我國の文學史上に知らないのである。僅かに晩年の芥川龍之介が彼より遙かに豐富な教養をもつてこの場所に近づいた。

しかも彼がいかにここに生きるに堪へなかつたかは人の知る所である。

「……思想を追究する恰も餓ゆるが如き二葉亭は盛んに讀書に沒頭して造詣を貪つた。殊にダーウヰン、スペンサー等の英國進化論を專ら研究したが、本來へー

ゲルの流れを汲む露國の思想に養はれてゐたから、何分是等の唯物論だけでは滿足出來ないで、終にコントに走つて爰に初めて一道の曙光に接する感があつた。恐らく二葉亭の思想の基礎を作つてその終生を支配したのはコントのポジテイヴイズムであらう」と彼の思想上の刻苦精進を述べる内田氏が直ちに語をついで、「が、二葉亭は如何なる場合にも批評家であつて、純科學を除いては總ての研究は不備であると云ひつつも科學にも亦不滿足であつて、科學に偏するスペンサーの哲學の如きも或る程度以上は決して推服してゐなかつた。且常に曰く『科學となると全然無謬だから、勢ひ兜を脫いで降參しなければならぬが、例へば2 2が4といふのは欺くべからざる確實の數理であつても、科學者が天體を觀測するに方つて毫釐の違算が屢々何千里の錯覺を來すと同樣に、此眼前の研究にも亦同じ違算が無いとは限らない。數其物は確實であつても、其數を算出する運算の方式が必ずしも正しいとは信じられない』と。此理由からして科學者の說でさへも有力な參考としてゐても、或る程度以上に矢張り餘り信仰しなかつた。『科學者の

說は枝振や花ばかりを氣にして根を枯らすを忘れる素人植木屋のやうなものだ』と云つてゐた。」

と誌してゐるのもこの故なのだ。人々はこれと同じ意味の言葉を、ゲエテに、フロオベルに、またはドストエフスキイに見出すであらう。むろん、かうした言葉は彼等にあつては遙かに精妙に、かつ逞ましい確信に貫かれて語られてゐるであらう。私は何も二葉亭がこれらの巨人と比肩し得る最高の作家であつたと强辯するつもりはない。

ただ私は彼が我國においてこれらの歐洲文學の生んだ最高の作家と同じ場所で苦しんだ最初の（そして恐らく唯一の）人であることに注意したいのである。

彼はこれらの作家と少なくも同質の天性をもつて、この世に生れて來た人なのだ。

ただ此等の大作家がいづれも思想上、生活上の苦鬪を經て、つひにバルザックのいはゆる「人間事象に加へられた何らかの處斷、原理への絕對的獻身」をも持

ち得るまでに成熟し得たに反し、二葉亭は終生かうしたものを見出し得たかつたのだ。人間事象はさまざまの觀念とともに彼の腑髓を虐んで止まぬ。だが彼はここに何の「處斷」も加へるべき確信がなかつた。彼は一原理への絕對的獻身」をなし得る資質を賦與されてはゐた。しかし彼にはその對象となるべき一原理」をば持ち得ないのだ。

すなはち彼は、稀有の作家的素質をもちながら、バルザックの無繫悲にもいふ「作家をして作家たらしむるもの」を缺いてゐたのだ。だがそのために彼が作家以外の何者にもなり得ぬ資質を持つてゐることに變りはないのである。

文學以外には解決の得られぬ問題を抱きつつ、しかも文學をその解決の場となし得なかつた點に彼の生涯を貫く悲劇の素因が橫たはるのである。

したがつて彼が政治に惹かれたのも或意味では當然なのだ。

「文學は人間性の機構に觸れることによつて人間を動かす術である。政治は人間

を動かすことによつて人間性の機構に觸れる術である。」と河上徹太郎はいふ。
「その本質が荒々しく交錯してゐる」場所で彼は苦しんだのだ。
だがかうした彼が政治家としていかなる才能を持ち得るのか。すでに我々には明瞭であらう。
彼が自分の「心的要素」を修練するために飛び込んだ實業界において、右の手に算盤を持つて、左の手に劍を把り、背ろの壁に東洋の圖を掛けて、懷ろには刑事人類學を入れて置く、之でなければ不可ん」といふ彼の空想的な事業熱が「語學校の舊友」にさへ相手にされなかつたのはもとより當然であらうが、偶然の機會からハルビンに渡り、さらに志を得ずして北京に赴き、偶然にも「表面は清國の一學堂なれど裏面は日本の勢力扶殖の一機關たる」(内田氏宛書簡)京師警務學堂に提調の職を得て、その志を延べる絕好の機會に惠まれたとき、彼は如何に振舞つたか。

二葉亭が明治三十五年五月、當時恩師古川の推擧によつて得てゐた東京外國語學校露語科の主任敎授の職を辭し、德永商店の招聘に應じてハルビンに出發したのはただ東方問題に關する彼の「豫々の志望を貫くための足掛り」としてであつた。稀に見る名敎授として全學生の崇敬を集めてゐた當時の彼に語學校敎授を止めねばならぬ事情がある筈はなかつた。もつとも內田氏は彼がそのころ語學校の校長高楠と衝突して心中不愉快であつたといつてゐるがもとよりこれが辭職原因となるほど重大なものではなかつた。內田氏もすでに筆をついで、「多くの友人中には折角足場の固くなりかけた語學校の椅子を棄てるのを惜んで忠告する者もあつた。家族は前途を危んで餘り進まなかつた。加之ならず語學校の僚友及び學生は切に留任を希望して歎願した。」とその辭職前後の消息を語つてゐる。

それに彼はハルビンへ行き、おそらく彼を滿足させる筈のない、一個人商店顧問の職以外に何をするといふ具體的な目算は少しも立つてゐなかつた。勿論彼の

突飛な行動はさまざまの傳說を生んだ。しかし內田氏はこれを否定し「唯德永商店の招聘に應じたばかりでなく、別に或筋から使命を受けてゐたといふ說もあるが、恐らく一箇の想像說であらう。二葉亭は早くから國際的興味を有して或る場合には隨分熱狂してゐたが、祕密の使命を托すに適當な人物では決してなかつた。二葉亭の人物を見立ててそんな使命を托する人もあるまいが、托せられて應ずる二葉亭でも無かつた。且若しそんな使命を受けてゐたなら、二葉亭の財政は最少豐かであるべき筈であつたが、哈爾賓到着後は萬事が所志と背いて思ふやうに行かなかつたのみならず、財政も亦頗る窮乏して當人は勿論、留守宅も亦送金の豫期の如くならざるに困迫してゐた。」と甚だ尤もな斷案を下してゐる。だが彼は長年抱き續けた夢想實現の緒を把んだと信じたとき、自己の利害を衡りにかけて行動を決することは出來なかつたのだ。安固な語學校の職を棄て、將來に對しては何等確たる計畫すらなく、內田氏に暇乞に來たときの彼自身の言葉を借りれば、「何にも特別の用事は無いので、唯來て與れさへすれば宜いといふのだ。露西亞

では官憲の交渉が七面倒臭いから、多分そんな方面に向ける意だらう。左に右く來いといふから行つて見るので、其中に面白い仕事が見付かつたら其方へ行つて了ふのサ」といふ漠とした目算あるのみで、しかも「寶の山に入る如き希望を抱いて……東京を出發した」と内田氏は傷ましげに誌してゐる。我々はここに彼の政治的情熱の強さとともにその素朴さを見れば足りるのだ。

だが勿論、日露戰爭直前のハルビンにおいて一個人商店の力で何をなし得た筈はなく、手を拱かれ、足を拱かれるやうな官憲の彈壓に德永商店の事業は閉塞し二葉亭もまた何等手腕をのべるべき機會もなく、遂に同年十月にはハルビンを離れて南滿各地を遍歷して北京に這入つた。事志と違ふことと餘りに甚だしかつた彼は、この時おそらく内的にも外的にも失意のどん底にゐたことと察せられる。彼が舊語學校で同窓の警務學堂監督の川崎浪速に會遇したのはこのときであつた。

當時彼の陷つてゐた狀態ならびに川島との交渉については次の坪内氏宛の書簡が明瞭に示してゐる。

「……北京へ參りたるは十月七日の夕刻に候ひき、北京にては舊友川島浪速方に厄介に相成り居り、近衛公より紹介狀を貰ひおき候ゆえ、先づ以て內田公使に面會致候、公使はさる筋より豫て小生の事を聞きをられたる由にて、思ひの外、快く談話を致してくれ、且つ公使の問ひに答へて小生が申し述べる對滿政策は暗に公使の意見に吻合致す點少からざりしより、最初の會見は至極都合よく參り、其時の公使の心中に、此男を利用して一仕事やるべし位ゐは萠したるらしく見受けられ候ひき、然るに小生より見る時は、公使は少しく形勢を看誤りたる點あるやう思はれ、その滿洲經營策も一々は首肯し致しかね候ゆえ、公使の意氣込存外に盛んなるに滿足致し候ものの、政界の前途は甚だ覺束なく存ぜられ候ゆえ、公使の氣受けやや宜しきを賴みにして、再びハルビンに引返す勇氣も出でず、大いに躊躇致し候ゆえ、退いて川島に萬事を打開け相談致候。」 もはやこゝには東京出發に際して內田氏に語つたやうな呑氣な樂天主義は見られない。ハルビン行きといふ大事をいかにも氣輕に決行した半年前に比べて何のいふ自信のない躊躇逡巡

であるか。彼の最初の行動が如何に無計畫であつたか、また滿洲を經巡つた半年の經驗がいかに彼を虐んだか伺はれるのである。しかも何のいふ狷介さであるか。公使の方では「此男を利用して一仕事やるべし位ゐに蔑したる」を見拔きながら彼には「少しく形勢を看誤りたる」公使を利用する決心はつかないのである。かうした彼の潔癖が彼を生涯苦しめたのだ。彼が川島から警務學堂提調の椅子を提供されたのは右のやうな事情のもとであつた。この時彼の喜びは勿論想像に餘りある。だが同じ坪内氏宛の書簡に洩らされた彼の川島觀は少し誇張すぎはしないであらうか。「元來此川島といふは……」と彼は說き起し、川島が舊外語清語科の出身で、科のちがひから、單なる面識にすぎなかつたが、先方が常に彼を推重してゐたことなどを述べ、

「同人は學校退校後、非常な逆境を經、遍く人生の悲慘を嘗め盡し、尋常の者ならば、疾くに俗了するか、又は喪心の人と成り了るかしてしまふ所なるを一種の强情と禪學にて養ひたる觀念とにて、少しも屈せず、理想を貫き來りたるに、圖

らずも日清戰爭に陸軍通譯となりたるが好機會となりて、夜光の玉が光りを放ち日本人側よりは寧ろ支那人側に非常の信用を博し、殊に慶親王に知られたるが出世の緒となりて、一躍して清國政府の依頼を受け、北京の警務學堂監督として、學堂を經營するの一切の權能を一手に握り、當北京に於ては、公使山根將軍に次ぎての顏となりたる、小生の眼より觀るも、一個の傑物に候。」

むろん、かういふ彼の言葉の眞摯性は誰も疑ふまい。自己に恩惠を施してくれる人の美點を彼が故意に書き連ねる筈もないのである。いやむしろ彼は心底から川島の人物に推服しなかつたら、いかなる有利な地位といへども甘んじては受けなかつたであらう。

そして川島浪速が「今の時勢には珍らしい三國志や水滸傳から生れ變つて來たやうな東洋豪傑風の人物」であつたことは內田氏も認めてゐる。だがこれに續く次の言葉に現はれてゐるものは川島の好意よりむしろ彼に傾倒しきつた二葉亭の愛情ではないのか。

「只今は肅親王と深く結托し、特に大いに爲すあらんとする場合にて、頻りに相語る相手が欲しき最中に候ゆゑ、又一つには多少の値打しゐる小生が不遇の境に沈淪しゐる事に非常に同情を寄せるといふ事情もありて、さる面白からぬ境涯にをるならば、我輩の下風に立たせるは氣の毒ながら、幸ひ學堂の提調とて、先づ反譯せば、幹事ともいふべき地位空位となりをるゆゑ、暫く提調となりて我輩を補佐すると同時に一面、支那政府を助けて露國南下の勢ひを挫く手段を廻らして見ては如何、支那政府要路の官吏は交際に厚薄の差別こそあれ、皆相識の間柄ゆゑ、折を見てそれぞれ紹介すべく、要するに、支那政府側に於ける我輩の信用は君の利用するに任ずべければ、それを利器として一飛躍を試むべし、若し試みて意の如くならず、いつまでをりても宿志を達する見込みの立たざる場合には、決して留めはせぬゆゑ、いつにても袖を拂うて去るべし……」（椿の葉）

ここでも彼の言葉に僞りのある筈はない。實際川島はかういふ風に云つたのであらう。だが注意すべきことは、二葉亭が相手の言葉を少しも割引きして聞かな

かつたといふ事情である。

川島に心底からの尊敬の情を献げ切つた彼にはその提言の裏を探るのは相手に對することの上ない侮辱として自分に許さなかつたのであらう。そしてすべての素朴な心と同じく、「尊敬するものは愛したかつた」彼はその愛情に賴つて、彼が川島の一下風」に立つたとき、二人の關係がいかなるか、ものになるか、またそれをいかに處理して行くべきかなどを思ひ巡らす必要を認めなかつたに違ひない。だがこの場合にも、その愛情が彼を誤つたのだ。すべては川島の提言通りに運んだ。しかもそのために二葉亭は提調の地位を去らねばならなかつたのである。

彼は川島の「好意」を感激をもつて受け入れ、欣然とその職に從つた。生涯に初めて彼はその〈素志〉を延べるべき、云ひかへれば、自らかくありたき自己を實現する機會に惠まれたのである。坪內、內田の兩氏が異口同背にこの一時期を彼の唯一の得意時代としてゐるのも偶然ではないのだ。次の內田氏宛書簡はこれを躍如として語つてゐる。

「……小生の職務は學堂庶務會計一切の事宜を辨理するに在りと支那流にては申す職掌ゆえ日曜も祭日も滅茶苦茶に忙がしく、一昨夜なども徹夜して所謂事宜を辨理候姿末ほとほと閉口致候うちに自ら一種のおもしろみ流石になきにしもあらず、このおもしろみ讀書の面白味にもあらず、談理のおもしろみにもあらで一種變挺なおもしろみに候。小生惟ふに學者の樂しむ所は理のおもしろみ、詩人の樂しむ所は情のおもしろみ、事務家の樂しむ所は action のおもしろみ、事の趣にあらんか、元來當學堂は表面は清國の一學堂なれど裏面は日本の勢力扶植の一機關たれば自ら志士集合所の如き趣ありて公使館あたりの純然たる官吏社會より觀れば頗る危險の分子を含みたる一團體の如く目さるる傾有之、爲に隨分迷惑を感じ候事も有之候へど、そこが卽ち一種の面白味の存する所にて、學堂の仕事常に必しも學堂らしからず、時ありては梁山伯の豪傑連が額を鳩めて密かに勢力擴張策を講ずるなど隨分變挺來た事ありて、其都度提調先生私かに自ら當代の蕭何を以て處るといふ、こんな學堂が世間にまたと有るべくも覺えず候」

彼がいかにその職に樂しんでゐたかはこの斷簡にも歷々としてゐる。
むろん、賀狀はこの舊友への手紙の文面のやうな呑氣なものでなく、彼は單に「私かに自ら當代の蕭何」を氣取つて「アクションの面白味」に浸つてゐたのみでなく、さらに重要な樞機に參劃してゐたのであらう。「細大の事務盡く其掌裡に歸して裁斷を待ち、監督川島不在の時は其處務を代理し、隱然副監督として仰がれてゐた。」と內田氏もそれに續いて書いてゐる。
そして彼が北支に「日本の勢力扶植」のためいかなる具體的な事業に手を染めたのか、今日もなほ明かではないが、とにかくこの年來の宿志を遂げるべき絕好の職務に自己の才幹と精力を傾け盡してゐたことは、この地位のもたらす「一種いふべからざる苦痛」に打ち克つため「死力を盡して奮鬪の覺悟に候」といふ內田氏宛の文言を徵しても明かである。
だがかうした熱烈な、いはば傍若無人の奮鬪が彼に災ひしたのだ。おそらく彼は「日本を去りたる當初の旨意」である「露國南下の勢ひを阻止」するに急で、

そのための「日本の勢力」が彼の周圍にあつては川島個人によつて代表されてゐることを忘れたのだ。しかも彼の偽るべからざる才幹と努力とが學内に二頭政治の危機を孕むに至つては、「東洋豪傑」と彼との衝突はもはや避け難いのである。そしてこの自ら扶植し得た「隱然」たる勢力を背後にして川島と折衝して行くことは彼の堪へ得ぬ所なのだ。といふよりこれは彼には全く缺けた能力なのである。その「下風」にたつてから數ケ月を經ずして、彼に傾倒した舊友の新しい面に觸れねばならなかつた。すでに翌三十六年一月すぎの手紙で彼は次のやうな嘆息をもらしてゐる。

「あまり厭な事はお聴かせ申したくなけれど……此北京もどうやら久戀の地にあらぬやうの形勢今からはや眼にとまり申し候といふのは、つまり、御大將の川島と斯く申す小生との性情投合せるやうにて投合せぬ處あるがため、意見往々衝突し、仕事が非常に仕難きからに候……漢學で固まつた貴族主義と洋學まじりの平民主義の衝突とも見るべく……到底破裂は免るべきにあらず。」

おそらくここで問題は「洋學」と「漢學」との對立ではないのだ。苟も「性情投合一せぬ者とは事を共にするに堪へぬ二葉亭の純潔た狷介さである。または事をたすに當つて必ず相手に「性情投合一を强ひる彼の貪婪な無垢である。さらにこれらから結果する無益な愛情の傷ましい浪費である。

北京から坪内氏にかうした手紙をかいたとき、彼はかつて氏との交渉の始つた明治二十二年のころ、日記に次のやうな言葉を誌したのを記憶してゐたであらうか。

「若冠なりしころは、氣を使ひて人を輕しめしたるに似ず、人を信ずる心もありたればにや、親しき者には何事も打明けて、心隈なく語り合ひき、同感を求めて自ら慰さむと思ひしゆえなり、されど人は純全ならぬが多ければ、いかに親しく語らふ友なりとも、尙ほ心の合はぬ節多きに、ましてわれがわれを愛するが如く人のわれを愛する者は至りて稀なれば、同感を求めても、求め得で、失望したる事しばしばありたれば、今は人間といふ者は頼もしからぬものたりと思へるに至

れり。これによりて、わが心中の祕を發きて、窃りに人にも告げず。されど賴もしからぬが人の常態なりと思へばあながちに怨めしとも思はず。」(柿の帶)

彼がこのとき自己の十餘年前に記した言葉をよみ返したら、恐らく羞かしさに赤面したであらう。「人間といふ者は賴もしからぬものに思ひ一ながら「東洋豪傑」に無邪氣に傾倒したとは笑止ではないか。彼は川島に投合したとき、「同感を求めて自ら慰さめ」はしなかつたか。「賴もしからぬが人の常態」ならば彼等が貴族主義であらうと平民主義であらうと何事であらうか。何故彼等を利用して自己の地位を築くまへに「性情投合」することなどを求めるのか。

勿論「其面影」の葉村を創造した二葉亭がかうした理窟を知らなかつた筈はない。またこのやうな自覺なくしては彼は「浮雲」の本田さへ創り得なかつたらう。この日記に語られてゐるものは若年の二葉亭の苦しんだ生々しい孤獨の意識である。だが、この孤獨の意識はあらゆる近代作家の孤獨の意識と同じく彼の實生活において何物も改變しないのだ。云ひかへれば己れの苦しむ孤獨を意識すること

は、彼の心にいかなる冷酷さをも附加し得ないのだ。

「それにつけても經驗はおろそかに思ふべからず。省察は心を養ふ所以なり、ゆめ怠るべからずと也。」と彼は日記の同じ頁に誌してゐるが、いかたる經驗も省察も、彼の生得の無垢な愛情の貪婪性に矯正を加へることは不可能なのである。

したがつて彼のかうした誠實な「省察」の記錄も少くともその實生活の處理に當つては、全くの空言にすぎない。

彼は「實社會」においては葉村の正しいことは知つてゐる。だがどうしても葉村にはなり得ないのだ。彼はその實生活において自己の「純全」な愛情のいかに無能力かは明瞭に意識してゐる。だがふと興味を惹かれる人物に出合へば、必ずその愛情を相手に强ひるのだ。

かうした心を我々はもつとも消極的な意味で作家の心と呼ぶのである。卽ち文學といふ架空の世界に賴らねば何物をも實現し得ぬ心の謂である。二葉亭は正しくかうした心の持主であつた。すなはち、實生活の提出する問題解決の手段を、

その内部に發見する能力を缺いた人であつた。川島浪速との交渉は單にその顯著な一例にすぎぬ。

坪内氏はさきに引用した書簡に語を繼いで、「右に類した悲觀的文言は、其後のどの通信にも見えてゐる。或時は職員間に監督派と提調派が對立するに至つた事を是非なき行き懸りである、と歎息して、警務學堂維持のためには、早晩自分が身を退くより外に仕方がないと思ふ、といつてゐる」といふ。

だが彼の辭任に際してたとへ表面だけにせよ、「監督川島及び友僚が頻に留任を勸告」した（内田氏による）のを見ればこの對立が果してどれほど險惡なものであつたか頗る疑はしいのである。自己の宿志をとげるべき場所に留まるためにかうした單純な一情勢」をさへ捌き得ぬ彼がいかなる政治家であり得たか。しかも日露の風雲が現實に急を告げつつあつた當時の滿支で、彼の「理想」を行ふべき餘地が何處にあつたのか。

しかも彼を虐むものは單に環境のみでない。それに伴ふ、といふよりむしろそ

れに先立つ彼の苦しげな自己省察であつた。

「現に只今滿洲問題に附き、極內々のお噂なれど、分を踰えたる運動を試みをり候が、小生のやり方は餘りに用心過ぎて迂遠に陷り、他人がやつたらちよくらちよいとやつてのける事が小生の手にかけては中々埒が明かず、これでは時機を失する虞れありと心ばかりはあせれども、實際どうも劍呑で手が著けられぬ場合多く、往々おれは迚ぬ駄目だとの歎を發するを免れず候　小生も駄目なれど、公使の連中も駄目に候。」

「……浮雲の文三、まだ御記憶に留まりあるや否やを知らず、あの文三が今の小生に候。かなり自分の性質の或點を Develop して作り出した人物ゆえ、似たとて不思議はなけれど、あれが自分かと思ふと、いやになつてしまひ申し候……」

これは恐らく當時の彼が自己に加へ得た一最大の侮辱にであらう。文學をすててから十餘年、しかも更に文學を逃れるための刻苦が、全く異なつた環境において彼の裡にうごめく作中人物の存在を證かしたにすぎぬとしたら、この時、彼の嫌

惡を混へた驚きは如何ばかりであらう。

だが、反かれた自然は常にもつとも殘忍な方法で人間の上に復讐するものなのだ。

そして明治三十六年七月、急迫する東亞の風雲を餘所に二葉亭が北京から歸つたとき、彼が現實なしとげた唯一の事業は、云ひかへれば彼が持ちかへつた唯一つの土産物は、この發見によつて更に奇怪な複雜さを增した一種出口のない自己嫌惡の情のみであらう。

「自己は絕對に失はれることはない。」とヴアレリイは冷やかに云ふ「ただその時間を失ふだけだ。」

三

「文學の毒に中てられた者は必ず終に自分も指を文學に染めねば止まぬ。」と、

平凡」の主人公は口惜しげに述懷する。では二葉亭はいつ文學に「毒された」のか。いふまでもなく、外國語學校露語科に在學した時代であらう。

「予が半生の懺悔」のなかで彼は次のやうに言つてゐる。「で、文學物を見るやうになつたのは、語學校に入つて、右のやうな一種の帝國主義（イムペリアリズム）に浮かれて、語學を研究してゐる内に自らその必要が起つて來たので、といふのは當時の語學校はロシアの中等學校同樣の課目で、物理、化學、數學などの普通學を露語で敎へる傍、修辭學や露文學史などもやる。所が、この文學史の敎授が露國の代表的作物を讀まねばならぬやうな組織であつたからである。

する中に、知らず識らず文學の影響を受けて來た。尤もそれには無論下地があつたので、いはゞ子供の時からある一種の藝術上の趣味が、露文學に依つて油をさされて自然に發展して來たので、それと一方、志士肌の癖した慷慨熱――この二つの傾向が、當初のうちはどちらに傾くともなく、殆ど平行して進んでゐた。が、漸く帝國主義の熱が醒めて、文學熱のみ獨り熾んになつて來た。」

これだけでは、なんの奇もない過程である。彼も通當の青年文學成熟の道程を順當に踏んだに過ぎぬかに見える。

だがこの間の事情は彼が續けて云ふやうに「少しく說明を要する」のである。

明治初年の世相には、しばしばほとんど今日からは想像もつかぬ異樣な現象が見出される。二葉亭の在學中、明治十八年をもつて廢止された舊外國語學校露語科のごときも正しくこの過渡期の變態現象の一つであらう。

「ロシアの中等學校同樣の課目で、物理・化學、數學などの普通學を露語で敎へる」といふおそらく現代の學生には思ひも及ばぬ困難な課程も當時の高等程度の學校としてはむしろ通例だつたのであらうが、二葉亭の級友の回想によると、彼等のうけた授業は當時の學校としてさへ例外的に異樣なものである。

「當時の語學校といふのは、今日のやうに單に語學ばかり敎へたものでなく、高等普通學を原書で敎へてゐたから、級が進むにつれて、後には文學書ばかり讀む

やうになつた。あんな風の教へ方をしてゐた學校は他に無かつたでせうが、其頃の露語科の教科書として用ひたのは有名な文學書だ。處が名高い文學書は一册しかないので、グレーと云ふ教師がそれを讀んで聞かせて、學生は手ぶらで聽いてゐるのだ。此グレーといふ人の朗讀が頗る名人で、調子も面白い、節も面白い、眞に妙を極めたものだ。誰でも聞惚れないものはない。自づと文學の感興が湧いて來る。で、讀終るとハラクタレスチカ(Characterization)即ち性格批評、作中の主人公または女主人公の批評を作らせて、之で文章の練習をさせた。毎日之を行やつたもんです。最初の中は露西亞の文學のセレクションから始めて追々と各大家の名作に及んだもので、何でもレルモントフ、ツルゲーネフ、ゴーゴリ・カラムジン、カラゾコフなどで、トルストイの『戰爭と平和』など讀みました。毎日々々讀んだのだから、隨分澤山な數で、小說もあれば脚本もあり、コミツクの物トラジツクの物種々雜多な物があつた。上の級になつてからは語學の力も大分付いて來たし、鑑賞力も次第に增して來たし、朗讀上手の先生が世界の名著を讀んで聞

かせるんだから、學生達も日本の小說同樣に面白がつて一心に聞いてゐる。其中で長谷川君は元來文學の素質があつたから一層シミジミ聞惚れて、知らず識らず文學に深入りしてしまつた。」（坪内、内田兩氏編「二葉亭四迷」）と太田黑重五郎氏が云つてゐる。

かうした敎授法は、おそらく大多數は少年期の二葉亭と同じく「將來日本の深憂大患となる」ロシア語を勉强するつもりで入學した當時の學生にとつてむしろ迷惑なものだつたかも知れぬ。そして彼等の養つた「鑑賞力」もその將來に何の實益をも齎さなかつたであらう。だが問題はかうした過渡期の授業法の可否ではない。こゝで我々に必要なのはかうして培はれた二葉亭のロシア文學の敎養の深さ、またはその自然さである。

まづこゝで明らかなことは、彼が決して「文學者」としてロシア文學を修めたのではない、といふ事情である。內田氏のいふごとく、そのころ彼が「ゴンチヤロフやゴーゴリやレルモントフやドストエフスキー等の大文學を硏究し……且

進んでビエリンスキー、ドブロリユーボフ、ヘルチェン等の論文集を耽讀し殊に深くビエリンスキーに心醉してゐた」のは、いづれもみな單に「語學校の課目として」または「語學研究の必要の爲め」であり、當時の彼には、「勿論自ら進んで專門文人となる意は少しも無く」たゞ「知らず識らず偶然文人の素地を作つてゐた」にすぎなかつたのだ。

　彼のロシア文學教養の素地はまづかうして他の何等文學を專門とせぬ學生と伍して、「手ぶら」でグレーの講義を聞くことによつて築かれたのだ。云ひかへれば彼はかうした文學の世界を離れた公衆の一人としてロシア文學に觸れたのだ。彼がそれから蒙つた感化はあくまで素朴な讀者としてのものなのだ。

　そしてこの一見些細な事情に、彼を外國文學の教養において、他の大多數の明治の作家から根本的に分つ一線が横たはるのだ。

　すなはち彼を除く明治文學史上の作家はほとんど例外なく、外國文學研究にまで手を延ばす以前に――少なくもその決定的影響を蒙るに足るほど成熟する以前

に、――例外なく自國の文學傳統に從つて一應完成された自己の文學映像を持ち得たのだ。そしておそらく彼等が書齋に引き籠つて「研究」した外國文學はたんに彼等の觀察と技法を豊かにしたにすぎないのだ。むろんこれによつて彼等の技法に變革を加へた作家はゐる。だがそれは彼等の「文學」そのものの像を決して破らなかつたのだ。

しかるに、全く素朴な讀者としてロシア文學に觸れ、若年の頭腦にその强烈な注入を受けたとき、二葉亭は何等これを自己の技法に解消すべき文學の像を持たなかつた。云ふまでもなく「子供の時から……一種の藝術上の趣味」をもつてゐた彼は江戸文學等の古典を一通りは讀破してゐたであらう。だが「專門文人となる意は少しも無かつた」當時の彼の漫然たる讀書がかうしたロシア文學の影響を解消化するに足る强靱な文學像を造り得た筈はないのである。彼にあつては、ロシア文學はいはば全く白紙の頭腦にその根を下したのだ。

だが大切なのはたんにかうした事實の消極的反面のみではない。

ロシア文學の激烈な感化を蒙つたとき、これを自國の文學傳統に解消すべき何物をも持たずあくまで素朴な讀者としてロシア文學に接した彼にロシア文學は、——その素朴さのゆゑに——自國の公衆に對すると同じ作用を及ぼしたのではなからうか。云ひかへれば彼は明治の作家中ただ獨りロシア文學を正當に鑑賞し得た人ではないのか。このことは少くとも可能性としては直ちに上述の事情に含まれてゐるのだ。そしておそらくグレーといふ「一種天才ある」ロシア人はこの可能性をあますところなく實現し得たのではなからうか。

人々はこゝでロシア文學を「讀んだ」のではない。「聽いた」のである。そしておそらく文學の技法については何等心を勞したことのない彼等は、聽き終るとその場で作中人物の「性格批評」をやつたのだ。云ひかへればこのささやかな、全く文學臭を脫した一社會に、ロシア文學は「眞に妙を極めた」グレーの朗讀を通じて、直接に「作中の主人公または女主人公」として働きかけたのだ。なによりまづ鮮明な人間映像として彼等を動かしたのだ。さもなければおそらく後年我

國の自然主義者がロシア文學から抽出した描寫技法や「人生問題」にまつたく無關心であつた彼等が「自づと文學感興を湧かして」一日本の小說同樣に面白がつて一心に聞いた」筈はないのである。そしてこれが文學のもつとも初步的な、だがあくまで正當な理解の仕方なのだ。あらゆる國々の文學はかうした素朴な、しかし同時に强靱な鑑賞によつて周圍の讀者に生かされるのだ。內田氏も、二葉亭の直話にもとづくのであらうが、グレーの講義ぶりについて、次のやうに言つてゐる。

「其の露文學を講ずるや微に入り細に涉つて解說し、極めて巧妙なエロキューシヨンもてゴンチヤロフやドストエフスキーの大作を朗讀し、身振聲色交りに手を振り足を動かし、眼を剝き首を掉つて其脚色の光景を髣髴せしめたさうで、一度グレーの講義を聞くものは皆語學の範圍を超えて其妙趣を味得し、露西亞文學の信者とならずにはゐられなかつた。」おそらく、自ら一八八〇年代のロシア文學の熱烈な讀者であつた彼は、感動の赴くまま、自己を動かした人間映像を肉化し

て演ずることによつて、その妙趣を東洋の素朴な讀者に傳へたのであらう。人間の肉體はいかなる場合にも藝術の基本的素材である。かくして彼は周圍の學生にロシア文學を生きた人間の像として、誤ることなく傳へたのだ。いはばこのとき語學校の教室は小さなロシア文學の殖民地であつた。といふより本國の社會の延長であつた。ロシア文學はたんなる文章上の技法としてではなく、自國においてもつたと同質な社會性をもつて、この小社會を動かしたのだ。「元來文學の素質があつた長谷川君」が「シミジミ聞惚れた」のはかうした文學であつた。

十九世紀のロシア文學そのものがすでに廣大な處女地に撒かれた歐州ロマン派文學の胚子から成育したのは人々の知るところであらう。だが混亂を重ねて生長したこの若い文學が我國に渡來したとき、幸か不幸かそこに見出したのは文學の處女地でなかつたことは周知の事情である。したがつてそれは何等著るしい混亂を惹き起すことなく、秩序ある新しい技法として強靱な文學傳統に吸收され終つたのだ。

しかるに、作家的資質こそもつてゐたが我國の文學傳統に對してはまつたく白紙であつた二葉亭の頭腦には、ロシア文學はその本國におけると同じ姿で輸入されたのだ。即ちそれは未開の處女地の荒々しい社會的動搖の嵐に混亂しつつ、性急に生ひ茂り、傷いたままの全貌を以て彼の頭腦を占據したのだ。ゴンチヤロフ、ゴーゴリ等の小說から這入つた彼が、進んでベリンスキー、ヘルツェンを耽讀したのもこの故なのだ。彼はかうした讀書からは今日ただベリンスキーの美學の短い飜譯を遺してゐるにすぎぬ。だが當時のベリンスキーへの傾倒がいかに熱烈であつたかは、坪内内田の兩氏が口を極めて語つてゐる。おそらくベリンスキーは當時の二葉亭に彼が生前ロシアの作家――讀者――に振つたと同じ權威を振つたのであらう。そして周知のごとく彼よりはるか後に、ロシア文學の影響をうけたと稱する自然主義者さへ、トルストイ、ツルゲエネフを學ぶにあたつて、ベリンスキーもヘルツェンも必要としなかつたのだ。すなはちそのころ二葉亭を捕へたものは、ロシア文學より、むしろそのなかに扱はれた人間の問題であつた。彼は

たんにロシア文學の「影響」をうけたのみでない。いはばその全精神をあげてロシア文學化されてゐたのだ。「オブローモフ」のオリガはおそらくあらゆる日本の女性より彼には現實的であつたのだ。

「私のは、普通の文學者的に文學を愛好したといふんぢやない。寧ろロシアの文學者が取扱ふ問題、卽ち社會現象——これに對しては東洋豪傑流の肌ではまるで頭に無かつたことなんだが——を文學上から觀察し、解剖し、豫見したりするのが非常に趣味のあることとなつたのである。で、面白いといふことは唯だ趣味の話に止まるが、その趣味が思想となつて來たのが卽ち社會主義である。」

「で、社會主義といふことは、實社會に對する態度をいふのだが、同時にまた、一方において、人生に對する態度、乃至は人間の運命とか何とかいふ哲學的趣味も起つて來た。」

「ツルゲーネフの作物、就中『フアーザース・エンド・チルドレン』中のバザーロフなんて男の性格は、今でも頭に染み込んでゐる。」(予が半生の懺悔)

かゝるとき彼の受けたロシア文學の教養とはいかなるものか。もはやそれは單なる教養とは云ひがたいのだ。いはゞこれは彼がその全生涯をあげて血肉化すべき宿命の線であつた。「文學の毒」は、すでに彼の全身に充分廻つてゐた。その一專門文人となる意は少しも無かつた」のは彼が當時我國に行はれた文人の通念を自己に宛てはめるのを潔しとしなかつたにすぎぬ。もはやその「毒」に堪へるために彼はやがて自ら「指を文學に染める」ほかはなかつたのだ。しかもいかなる文學であるか。

「卽ちビエリンスキーの文學、ゴンチヤローフの文學、ドストエスフスキの文學、ツルゲーネフの文學であつて、京傳の文學、春水の文學、三馬の文學では無かつた」と內田氏はいふ。だが當時の彼が生きた明治二十年の社會はかうした文學にいかなる素材を提供し得たのか。そして彼の周圍に形骸と化しつつなほ强靱な傳統の尾をひいてゐた江戸文學は、そのためになんの手掛りを與へたのか。おそらく「浮雲」の中絕も彼の生涯の彷徨も、すでにこのとき約束されてゐたのだ。

しかも、不幸にして、彼が「指を文學に染める」機會は思ひがけなく早く到來した。

まづ明治十八年の九月、彼が在學した舊外國語學校が廢止され、露淸韓語科の學生は全部東京商業學校に編入されてしまつた。この、亂暴極まる學校の改廢がいかなる必要があつて行はれたかは詳かでない。だがそれは恐らく大部分の學生にとつて寢耳に水の事件であつた。そして假りにかうした無暴な改革を學校行政上必要と認めるにしろ、露語科その他の學生の編入された「當時の商業學校はもと商法講習所と稱し、專ら商家の子弟を集めた今の乙種商業學校程度の頗る低級な學校」であつたから、これを高等中學校に編入された佛獨語科學生に較べると當局の處置はなんとしても片手落を免れなかつた。

「今なら恁んな專制的命令が行はれる筈もなく、然ういふ場合學生は聯合して示威運動でもする處だが、當時の學生は尙だ然ういふ政治運動をする考がなく、硬骨

達が各自に思ひ思ひに退校届を學校に投込んで飛出してしまつた。二葉亭も亦其一人で、一時は商業學校に學籍を轉じたが、翌十九年一月到頭辛抱が仕切れないで、怫然袂を拂つて退學して了つた。最う二三ケ月辛抱すれば卒業出來るのだし二葉亭は同學中の秀才であつたから、縱令其儘缺席して試驗を受けないでも特に免狀を與へようといふ校長の内諭もあつたが氣に喰ない學校の卒業證書を特恵的に貰ふ必要は無いと、キビ／＼跳付けてプイと退學して了つた」と内田氏は、舊友の行動をいかにも小氣味よげに敍し「が、此頓挫が二葉亭に若干の精神的影響を與へて生涯の行程をこじらす基となつたは爭はれ無い。」とつけ加へてゐる。

だが、この「頓挫」は決してたんなる偶然の事件ではないのだ。彼の生得たる純潔な狷介癖がこゝで大きな役割りを演じてゐるのは見逃せぬところであるが、さらに根本的な事情は彼が語學校在學中に蒙つた思想的變化であつた。「其の露語科に入つた抑もの初めの志望こそ外交官であつたが、語學の研究の必要上頻に露文學を涉獵するや、何時の間にか露國思想の感化を受けると同時に夫迄潜在し

てゐた文學的興味、藝術的美意識が俄かに頭を打上げて來て、當初の外交官熱が次第に冷め、其時分は最早純然たる東方策士でなくなつてゐた。」と內田氏も當時彼の心內に起つた變化を語つてゐる。そして彼自身の言によればこの「露國思想の感化」はまづ「文學趣味を激成された社會主義」となつて現はれたのだ。「社會主義を抱かせるに關係のあつた露國の作家は、それは幾つもあつた。ツルゲーネフの作物、就中『フアーザース・エンド・チルドレン』中のバザーロフなんて男の性格は、今でも頭に染み込んでゐる。その他チエルヌイシエフスキー、ヘルツエン、それから露國の作家ぢやないがラッサール、これはよく讀んだものだ。」(予が半生の懺悔)

むろん、バザーロフが今日からみて社會主義者とはいへぬやうに、彼のいふ社會主義と現代におけるこの言葉の意味とは幾多の逕庭があらう。そして當時の彼の思想狀態については「元來が軍人志願の漢學仕込で、武岳穆や陸宣公に鍛へられてゐた上に、ヘルチエンや、ビエリンスキーの自由思想に傾倒して意氣欝勃と

してゐた」といふ内田氏の言葉がおそらく正しいのであらう。だが重要なのは、彼がかうした儒教倫理の素地に注入された「露國思想」にいかに素朴に動かされたかといふことである。なるほど彼の「社會主義」は、その生涯を貫いた「帝國主義」といささかも矛盾しなかつた點から推せば、今日からみて、むしろ自由主義、乃至はたんなる東洋思想の變形であつたかも知れぬ。だがとにかくその「社會主義」のために彼は「最う二三ケ月辛抱すれば缺席して試驗を受けないでも」卒業できる學業を拋つてしまつたのだ。

「勿論、社會主義といつたところで、當時は大眞面目であつたのだが、今考へると、頗る幼稚なものだつたのだ。例へば政府の施政が氣に喰はなんだり、親達の干渉をうるさがつたり、無暗に自由々々と絶叫したり――まあすべての調子がこんな風であつたから、無論官立の學校は虫が好かん。處へ、語學校が廢されて商業學校の語學部になる、それも僅かの間で、語學部もなくなつて、その生徒は全然商業學校の生徒にされてしまふ。と、私はぷいと飛出して了つた。その時、親

達は大學に入れと頻りに勸めたが、官立の商業學校に止まらなかつたと同樣に、官立の大學にも入らなかつた。で、終には親の世話になるのも自由を拘束されるんだといふので、全く其の手を離れて獨立獨行で勉强しようといふつもりになつた。」（同前）

かうした時たとへ「商業學校の校長矢野次郎が二葉亭の才能を惜しんで度々校長室に招いて慰諭し、愈々學校を退學して了つてからも身分上の心配をしてやらうとまで厚意を持つて吳れた」にせよ、彼が「矢野が世話を燒けば燒くほど、世話になるが利益と思へば思ふほど益々反抗して、折角の矢野の厚意をピタリと跳付けて後足で蹴つて了つた」のはむしろ當然なのだ。「無論、學校を飛出してから何をするといふ恃は無かつたが、此場合是非分別をする遑もなく、一圖に血氣に任して意地を貫いて了つた。」といふ內田氏の言葉は當時の彼の心情を適確に貫いてゐるのであらう。あらゆる激しい資質をうけた作家と同じく、彼は未だ誰ひとりとして認める者のない自己の才能以外、なんの頼りもなく世間に投げ出さ

れたのだ。
そして二葉亭が文學で身を立てる決心をしたのもまさしくこのときなのだ。

だが我々はここで彼と坪内逍遙氏との交渉を語らねばならない。「浮雲」の第一篇が坪内氏の名を冠して出版されたのは周知のことである。

そして、當時の氏が二葉亭にいかなる文學的影響を及ぼし得たかといふ問題はさておき、氏はたんに、當時の文人とはなんの緣故もなく、ただ獨りロシア文學に心醉してゐた無名の青年を文壇に送りだしたのみでない、「浮雲」の制作に缺くべからざる新たな機運をも自ら作り出した人なのだ。

「恰も共時分であつた。春廼舍の處女作『書生氣質』が發行されて、文學士春廼舍朧の名が俄かに隆々として高くなつた。……丁度政治が國會開設の發表で落付いて、世間が新しい文學に渴してゐた時だつたから、忽ち空前の人氣を集めて洛陽の紙價を騰貴した……當時は小說を戲作と稱して賤み、多少の社會的位置ある

のは多くは覆の下に窃に述作するを例としてゐた故、其頃今の博士よりも遙に重視された文學士　堂々と學位を冠して小説を作るといふは意表に出でて世間の好奇心を喚起した。」「夫でも初めは矢張り一時の戯れで……堂々たる文學士のマジメな仕事とは誰も思はなかつたが續いて高田半峰が長々しい批評を書き、春廼舍も亦矢繼早に『小説神髓』と『妹と春鏡』とを發表し、スモーレット、フキールディング、デイケンス、サツカレーなどといふ英國小説家の名が紹介されるに及んで、從來戯作と賤んでた小説が一足飛に天下の人文に貢獻する大文學、堂々たる學者の事業としても耻かしくない立派な仕事となつて了つた。……山田美妙や尾崎紅葉等が文學を以て生命とする志を立てたのも、其動機は春廼舍の活動に萌したのだ。」　と内田氏は坪内氏の初期の文學活動が社會に及ぼした影響を述べてゐる。云ふまでもなく、この言葉には多少の誇張は含まれてゐよう。いかに明治初年であるにせよ、内容よりも「肩書」によつて世間に歡迎された書物が繼續的な意義を文學上にもつ筈はないのである。（坪内氏自身も「『書生氣質』は私の處

女作であるが、其書名を思ひ出すだけでも冷汗を催す惡作！」（柿の蔕）と云つてゐる）そして「小說神髓」に擧げられたフールデイング、デイケンス等の「英國小說家」もただその「名」を傳へられたにすぎなかつたのであらう。「書生氣質」にしろ「妹の春鏡」にしろ、どこにこれらの「近代名家」の影響があるのかと疑はれるほど「戲作」に近い作品である。だがさうしたことはこれによつて我國の文學者が始めて三馬、京傳、馬琴らの「戲作」以外の文學の存在を示されたといふ事實の意義に較べれば何事でもないのだ。「小說神髓」の內容が今日からみていかに幼稚であらうと、それが當時の作家に歐州文學の存在を始めて彼等の問題として突き付けたといふことが重要なのだ。いはば歐洲近代文學移入といふ問題が始めて氏によつて我國の文學に――しかも日本文學の問題として――提出されたのだ。ただ不幸なことに、それは單に提出されるに止まつたのだ。我國の作家にとつてヨーロツパ文學が現實に文學環境とし作用するに至つたのは自然主義以後である。（しかも彼等にとつてさへ、問題はたんに歐洲文學の存在であり、歐洲

文學がその社會に生きるに當つて遭遇した數々の文學的問題は我國の自然主義作家にはまつたく沒交渉であつた。そしてこゝに、まづロシア文學の苦しんだ諸問題に全身をあげて鬪ふことを强ひられた二葉亭と、後年露佛の文學技法をその私小說に解消し得た自然主義者とを別つ、決定的な差異が存するのだが、それについては後に詳述する。）當時にあつては江戸文學はなほ充分社會に生き延びる力をもつて居り、「小說神髓」もまたこの强い「傳統の惰力」を打ち破るに足る力を備へてはゐなかつたのだ。したがつて、その生み出したものは新たなる現實的文學環境でなくたんに新しい文學を指示し、要望する漠とした機運にすぎなかつた。だが、かうした機運こそ、まさしく當時、二葉亭の必要としたところであつた。それのみではない。おそらくこの未だ形をなさぬ新しい時流が、彼には絕好の機會として映つたのだ。云ひかへれば彼が「浮雲」を書くためには、この漠然たる機運に「誤まられる」を要したのだ。

「……世間が『書生氣質』や『妹と春鏡』や『小說神髓』に歎賞するを聞いて其

眼識の低いのを呆れると同時に、文學上の野心が俄かにムヅムヅとして堪へられなかつた。」と內田氏も書いてゐる。こしてつひに「春廼舍の技巧及び思想の齒痒さに堪へられないで、到頭堪らたくなつた果が『小說神髓』の疑問の箇處々々に不審紙を貼つたのを携へて突然春廼舍の門を叩いた。」これは明治十九年一月二十五日、すなはち彼が廢學したと同じ月の末であつた。

「此日、逆上頗る甚し、此夜長谷川來訪、大いに美術及び小說を論じ、小說の文章論に及ぶ。同子が『書生氣質』の批評もつとも奇妙なり。此夜一事も成し得ずして寢に就く。逆上の爲の故なり」といふ坪內氏みづから「柿の蔕」に引用してゐる同年三月の日記は當時彼等の交した話題を物語るものであらう。

ここで、坪內氏と二葉亭の交渉について多少筆を費しておくのは無駄であるまい。云ふまでもなく、氏は二葉亭に較べれば、少なくも作家的資質のはるかに薄弱た常識人であつた。そして文學的教養に關しても「ビエリンスキー」に心醉し、

ゴンチヤローフ、ツルゲーネフ、ドストエフスキ等に飽滿し傾倒してゐた二葉亭が、「書生氣質」の著者たる當時の春廼舍に教へられる事が餘り多く無かつたのも亦明かに想像し得られる。」といふ内田氏の言葉がおそらく正しいのだ。

だが氏はそのころすでに「凱旋將軍」のごとき名聲の絕頂に立ちながら、突然なんの紹介もなく訪れた無名の靑年の狷介な論議を、虛心に受け入れたのみならず、それと同等の交りを訂し、時には自ら進んで教へを乞ふ態度にさへ出、相手の己れより優る文學的才能を見拔きながら、自ら進んでその原稿の出版に盡力しまた彼が文學を放棄した後まで、その世故には暗かつた生涯を通じて、家庭上の相談にいたるまで、なにくれと勞をとるを厭はなかつた、二葉亭にとつて眞に得がたい文學上の先輩であつた。

「元來二葉亭は極めて狷介な負け嫌ひであると同時に又極めて謙遜であつて、如何なる人に對しても必ず先づ謙虛して己れの不足を補ふを怠らなかつたから、春廼舍を慊らなく思つてゐたにしても、先輩を折伏して快を取るよりは疑問を晴ら

して教を乞はんとする念の方が强かつたは、明かである。」と內田氏は云つてゐるが、かうした彼の一謙遜」を坪內氏が快く受け入れなかつたら、一浮雲」はおそらく世に現はれなかつたのだ。むろん、このとき氏は誠實な文學者として當然爲すべきことをしたにすぎぬのであらう。そして生涯を溫厚な常識人として終つた氏はある意味で二葉亭とは全然沒交渉な世界に生きた人である。だが、彼の死後その遺族、全集にまで心を配つた先輩として、また彼が生涯心おきなく交つた數少ない友人の一人として、氏が遺した資料は、すくなくも彼の一面には鮮やかな光を投げてゐる。

「愼嚴な、精緻な、深刻な、一動はおろか、一言、一字をさへも苟もしない、眞摯な、鯁直な、どことなし陰欝な、それでゐて不思議に懷しみのある二葉亭の態度、性格は、平明で、著實で、健全な代り、とかく安易、淺薄に流れ易い、常識本位のイギリス學風に教養されて來た私に取つては、全く他山の石であつた。彼れに接觸する度數の加增と共に、私は自分の態度の非を覺つた。作家としての不

眞摯を、處世人としての輕薄を自然に反省せしめられたのである。」（柿の蔕）と氏は「私と彼れ」と題して當時を述懷する。むろん、當時二十八歳の若さであつた氏が始めからここに誌されたごとき淡々たる謙抑さで彼に接したかは疑はしい。だがとにかく氏はまづ二葉亭の價値を認め、その性格天分を能ふ限り理解し受け入れようとして最初の人なのだ。敏感な二葉亭がそれに動かされぬ筈はない。內田氏の言によれば「春廼舍を訪問したは、昔しの武者修行者が道場破りをするツモリで他流試合を申込むと多少似通つた意氣込が無いでは無かつた」彼が以後長くその門に出入したのはこの故なのだ。「彼れの來訪は少くも十日に一度といふ割で、二十二三年まで續いた。其間は、初めは主として文學、藝術の內容や形式を論じたり評したりする程度の交際であつたが、『浮雲』出版の前後から、一段親密さが加はつたので、話題も漸く變り、文藝論をするにしても人生問題に觸れることが主になつた。」作中の人物評論から一轉して古今の實在人物の評論に移り作家としての又個人としての理想的資格論が結局は、互ひの性格評に終るのが例

であつた。」(同前)と氏は二人の交渉を語つてゐる。そしてさらに進んで「性格、態度、主張の、彼れと私とが恰も眞反對であつた事が、私に取つては自己の缺陷を照らす明鏡ともなつた。私に切に自己改造の必要を感じはじめた。主義なき理想なき自分を愧ぢた。で、廿二年度に於ける二人の話柄は、主として互ひの性格論、修養論で終始するのが例であつたが、謙抑な彼れは私の慚愧を聽くと、いつにそれを遮つて、君には云々の美德があり、長所があるが、自分には悉くそれが缺けてゐる。自分には云々の短所があり、云々の惡癖がある、と得意の自己批判を始めるのが常であつた。私はそれを私を慰藉する爲の例の謙抑とばかり其頃は思つてゐたが、後に彼れの內生活を熟知する間柄となつてからは、やはりそれが正直な告白であつたことを知つた。」と氏が二葉亭から受けた影響を包まずに語つてゐる。二人の交友が尋常な先輩對後輩の關係を越えてゐたのはこの一文からも明かにうかがはれる。殊にこの節の後段はおそらく二葉亭が多くの人には明かさなかつたその「內生活」の一面を露はに見せてゐる點で興味深い。

だがいかに二葉亭でも坪内氏と會ふたびに年中かうした堅苦しい性格論ばかりやつてゐたわけではあるまい。（明治二十二年は彼が文學を放棄した年である）最初はやはり「屢々往來して文學上の思想を交換すると同時に文壇の野心を鼓吹された事は決して尋常でなかつた」といふ内田氏の言葉が正しいのであらう。また當時の彼等の交友はあくまで文學を通じたものであつた。云ひかへればそれは主として「浮雲」の制作をめぐつて展開して行つたのだ。

二葉亭が坪内氏に最初にみせた勞作はゴーゴリの小説の飜譯であり、次いでツルゲエネフの「父の子」を飜譯した「虚無黨形氣」であつた。これについて坪内氏は「外國小説を言文一致でと主張もし試みて見ようとして、其第一稿を私に初めて見せた男は二葉亭であつた。それは明治十九年三月十七日のことである。」『「虚無黨形氣』は例の『父の子』の譯だが、……其譯は私の知る限り最初の口語體の小説譯文であつた。」といつてゐる。この譯は不幸にして今日殘つてゐない。

だがこれと殆んど同時に彼は「浮雲」の制作に着手してゐる。「『浮雲』の第一稿を私に見せたのが十九年の夏か秋の頃であり、私の再三の勸告に動かされて、いよいよ發表しようとなつて、更に稿を改めたのが其冬頃、それから更に改稿して私に最後の相談に及んだのが二十年の春の末であつたかと思ふ。」（柿の蔕）すなはち彼は原稿紙にして百枚あまりの「浮雲」第一篇を完成するに一年を要してゐる。そして翌二十一年二月第二篇を出版し、さらに二十二年十月に第三篇を「都の花」に發表するにいたるまで、彼の三年間にわたる文學生活の精進と心勞とはほとんど大部分「浮雲」の制作に集中され盡したのだ。したがつてこの時代の彼について語ることは「浮雲」を語ることにほかならない。また逆に「浮雲」中絶の事情も彼の「内生活」の苦悩を辿ることなくして、決して明かされ得ないのだ。

四

普通、文學史の上では「浮雲」は口語體小説の先驅といはれてゐる。そして作者がこの新文章の創始に費した苦慮は今日ではほとんど傳説的である。だがここで注意すべきことはそれが何よりまづ本格な小説であつたといふ事情である。それが世を動かしたのは、たんなる文章上の新意匠としてではなく、あくまでその新文章によつて築かれた人間映像の鮮かさにあつたといふ點である。云ひかへれば「浮雲」のあげた第一の功績は言文一致體なる新文章を以つても文學を築くに足ることを世に示したたに存するのだ。

今日でこそ、口語體小説はもはや一派の意匠の域を脱してゐる。現代の作家は口語體以外の小説制作を夢想することとさへできぬ。いはばこの形式は現代文學に共通する性格なのだ。

だが、明治の初年には、口語文はまさしく文章上の新章匠であつた。しかも多くの人々の追從するを欲せぬ新意匠であつたのだ。

當時、言文一致體の見本として通用してゐた山田美妙の「夏木立」が文學的に

みていかに取るに足らぬかは、具眼者の目を逃れるべくもなかつたのだ。
　そして二葉亭自身にとつても、言文一致體はむろん文章の新意匠であつた。だが彼の偉大さは「浮雲」を斷じてたんなる文章上の手法に止まらせなかつた點に存するのだ。事實、「浮雲」の文章は今日からみてもなほ生硬を免れない。したがつて、この、美妙と異なつて何等時流に媚びる所のない新文章が江戸文學の長い爛熟した傳統に洗練され切つてゐた當時の讀者の纖細な文章感覺にどれほど訴へるものを持つたか甚だ疑はしいのである。彼等は「浮雲」と相前後して現はれた紅葉の「色懺悔」を「浮雲」以上に喝采する趣味の持主であつたのだ。
　だが彼等は作者がこの文章を驅使して造型し得た人間の鮮明な像だけは否應なく強ひられたのだ。そしてこの人間映像はそれと比較するとき、たんなる才氣あを感受性の戯れにすぎぬ美妙の「武藏野」などほとんど兒戯に類する底の強烈かつ精緻なものであつたのだ。おそらくこれを強ひられたとき、いかなる保守的な讀者もこの作品において示された新たな文章による人間造型の豐饒な可能性だけ

は承認せざるを得なかつたであらう。すなはちそれはもはや新しい文章ではなく新たな文學であつたのだ。そして「浮雲」が明治文學にもたらした眞に劃期的な意義はここに存するのだ。

したがつて「浮雲」執筆に當つて二葉亭の嘗めた苦惱はなるほど修辭上の問題に始まつた。だがそれは決して修辭の苦惱には終らなかつたのだ。

「二葉亭が種々の意味で明治文學の眞の先驅であつた事を明かにするためには、明治廿年前後は、新文學の劃期的産苦時代、就中表現苦の時代であつたことを知らねばならぬ。」といふ坪内氏はさらに語を進めて、「二葉亭のは其著眼が、其思想が、いはば急にロシア式に化せられたにも拘らず、それを言ひ現す文章としては、漢文くづしか、和文くづしか、戯作文かしか無く、而も其三つとても、あんまり自由には使ひこなせないといふ苦しみがあつた。」といつてゐる。

しかし當時の彼はなるほど文章こそ「自由に使ひこなせなかつた」かも知れぬが、小説「浮雲」は彼にとつてはいかにも自然に構想され、著手されたものなの

だ。二葉亭が「浮雲」の文章に苦吟し、幾度となく稿を改めたのはすでに周知のことであらう。だがこの制作の構想は少なくとも自然に得られたのだ。彼の次の言葉がそれを證してゐる。

――……餘程前のことだ。何か一つ書いて見たいとは思つたが、元來文章下手で皆目方角が分らぬ。そこで、坪内先生の許へ行つて、何うしたらよからうかと話して見ると、君は圓朝の落語を知つてゐるう、あの圓朝の落語通りに書いて見たら何うかといふ。

で、仰せの儘にやつて見た。所が自分は東京者であるからいふ迄もなく東京辯だ。即ち東京辯の作物が一つ出來た譯だ。早速、先生の許へ持つて行くと、篤と目を通して居られたが、忽ち礑と膝を打つて、これでいい、その儘でいい、生じつか直したりなんぞせぬ方がいい、とかう仰有る。

自分は少し氣味が悪かつたが、いいと云ふのを怒る譯にも行かず、と云ふものの、內心は嬉しくもあつたさ。」(余が言文一致の由來)

ここで明かたごとく彼が坪内氏に仰いだのはたんなる文章上の指示にすぎぬ。文三もお勢もこのときすでに彼の腦裡にうごめいてゐたのだ。彼の三年間の苦慮はただこれらの人間を「具體化して行くには、どういふ風の形を取つたらよからうか」といろいろ工夫」することに費されたのだ。

しかもその作中人物は「具體化」するに際して前人の試みなかつた新文章の素材たるに堪へるほど强靱な鮮やかさで彼の身内に生き得たのだ。

二葉亭氏の物を見る力は早く發達したらしい。『浮雲』がこれを證してゐる。彼樣に又客觀性に富んだ作物が明治二十年頃に――紅葉氏の『色懺悔』や、露伴氏の『風流佛』より二三年前に――早く世に公にされたといふことは、驚かれる。私は斯の物を客觀する力を――吾が國の作家としてはおそらく稀に見るの洞察力――は氏の露西亞文學の影響に歸したくない。私はこれを氏の天性と云ひたい。斯の天性を備へた人が、偶然にも、ゴゴル、ガンチヤロフ等の文學の感化の上に置かれたと考へたい」―(坪内、内田氏編「二葉亭四迷」)といふ島崎藤村氏が彼の死に

際して寄せた言葉は、この意味で果斷な卓見なのだ。云ひかへれば、當時の二葉亭はもはやたんにロシア文學の素朴な愛讀者ではなく、「吾が國の作家としてはおそらく稀に見るの洞察力」を、自己の制作に表現し得る一個の作家であつたのだ。しかもこの熱烈な作家は江戸文化の臭味をなほ充分に止めて當時の社會にあつて、獨り「其著眼が、其思想が、いはば急にロシア式に化せられた」頭腦を抱いて生きてゐたのだ。

「物を客觀する力」と藤村氏はいふ。この「力」とはいふまでもなく作家にとつて人間觀察の能力に外ならない。二葉亭は、ことに「浮雲」第二篇においてこれを鮮かに驅使してゐる。そして「浮雲」全篇を通じても、そこに定着された强烈な人間映像は、すでに文學史を動かすに足る力感を持つたのだ。

だが問題は――すくなくとも作者にとつて――ここに止まらなかつたのだ。おそらく彼の意圖したところはたんに新しい文章をもつて人間を描くことにあつたのみでない。更は一歩すゝめて、新文章による新たな人間の創造にこそ作者の希

ひが存したのだ。そして文章史上彼の功績に歸せられた新文章のごときは――たとへそのためにいかなる苦慮を費したにしろ――彼にとつてはたんにこの新たな酒を盛るに必要な新しい皮囊にすぎなかつたのだ。

彼が熱烈な影響をうけたロシア文學が――すべての歐洲文學と同じく――プーシュキンのオネーギン、レルモントフのペチョーリン等不朽の人間典型に礎石を置く、强烈な人間文學であつたことはすでに云ふまでもあるまい。

だが、二葉亭の周圍には、これと全く異質な、しかも三馬、一九、京傳等によつて一應完成された人間文學の强い傳統が存したことは注意すべき事情である。云ひかへれば、當時二葉亭の頭腦にロシア文學の人間像が生きてゐたと同じ鮮やかさで、これらの化政期の作者によつて創造された人間映像はその周圍の社會に潑剌と生きてゐたのだ。むろん、今日から「オネーギン」を「膝栗毛」に「現代のヒーロー」を「浮世風呂」に比較するのは愚かであらう。だが重要なのは當時の文學傳統に身を以て觸れてゐた二葉亭はその創作に際してかうした比較を强

ひられてゐたといふ事情である。

云ふまでもなく、近代ロシア文學の遭遇した問題を自己の問題として苦しんでゐた彼にこれらの「戲作者」の作品が滿足を與へた筈はない。おそらくかうした戲作のうち一つとして彼の理智の批判に堪へるものはなかつたであらう。

だがそれは人間映像なことはいかにも鮮やかな人間映像なのだ。彼等の作品はなるほど素朴である。そして今日からみてその素朴を嗤ふことは容易であらう。だが彼等がその素朴のゆゑに獲得した人間表現は、彼等にかうした素朴な文學態度を許した社會條件の破れ去つた後世からは容易に到達しがたい完璧性を備へてゐるのだ。

たとへば「東海道膝栗毛」ほど纖細な人間的陰影に富んだ會話を今いかなる作家が書き得るのか。また「浮世風呂」の式亭三馬のごとく多數の登場人物を苦もなく取り捌き、しかも一人々々を人間として生かし切る果敢な、そして冷酷な作業に明治のどの作家が成功したであらうか。

「浮雲」の執筆に際し在來のあらゆる古典のなかからわづかに「式亭三馬の作中にある所謂深川言葉」を參考とし、これを「いかにも下品であるが、併しポエチカルだ。俗語の精神は玆に存すると信じた」(余が言文一致の由來)二葉亭が、この事に氣付かなかつた筈はない。しかも江戸時代の餘影のなほ濃厚な當時に社會にはこれらの作中人物は今日よりはるかに强烈な現實性をもつて人々の間に生きてゐたのだ。

したがつて自己の創作行爲をかうした文學傳統相剋の場と化した、といふよりもむしろ化せざるを得なかつた彼が、たんなる新文章の驅使による人間造型に滿足した筈はないのである。おそらく彼はかうした單純な作業によつて在來の文學傳統の强靱性を破り得ぬことを明瞭に意識してゐたのであらう。

かうした激烈な文學傳統に堪へ、しかもそこに新たな歐洲的文學を生かすためには、まづそれが新しい人間として登場することを要するのだ。「文學とは常に新しい人間の發見、再發見である。」とジイドは云ふ。いかなる時代にも文學の眞

の進歩は新たな人間の發見によつてもたらされる外はないのだ。云ひかへれば、いかに形體と化した文學傳統にせよ、新たな人間發見なくして、その重壓は決して覆されないのである。かくて、身內に夢見る淸新な文學映像とその實現を阻む周圍の環境との相剋を意識したとき、二葉亭の野心は新文章の創始ではなく、新たな人間の發見にあつたのだ。すなはち彼の生きる環境に新たな人間典型を見出すことであつた。そしてこれ以外には自己の文學を生かして行く道はどこにも存在しなかつたのだ。

だが、人間はいつの時代にも同じ人間である。彼等は何によつて新しいのか？云ふまでもなく思想によつて——と二葉亭は答へたであらう。當時は明治維新後はじめてヨーロッパ思想の第一波が、我國の社會を洗つた時代であつたのみでない。彼自身が心底から思想に憑かれた新たな人間であつたのだ。

「明治十九年の一月に私が初めて知り合ひになつた頃の彼れは、多分、其頃に於

けるロシア文學通の第一人者であつたらう。（略）で、彼れの性格までが、其時は氣が附かなかつたが、等しくロシヤ文學の感化を受けてゐた。見聞が淺い上に、修養としては、大學時代には一通りクラシックスを讀まされてゐたが、自分の座右の書としては、主として十九世紀中葉のイギリス文學、スコツトやリツトンやヂツケンス程度乃至マリヤツトやヂューマ風の大衆物が關の山の私は、彼れにぶつかつて、全く別種の文學論を聽き、別種の人格を見た。怖ろしく內省的で、何事に對しても緻密で、精刻で、批判的なのだが、決して容易に斷定しない。常に疑問的で、じれつたい程に愼重な態度であつて、さうして共深沈な態度に一種不思議な魅力があつた。（此魅力が所謂デモニック・インフルエンスといふやつで、二葉亭に會つた者は擧つてそれに中てられたものだ。）彼れのやうな性格がわが同胞中にあらうとは豫想してゐなかつた私は、彼れの議論に驚くよりも、彼れの性格の特殊なのに驚かされた。『民約論』を漢譯して日本のルーソーと異名された中江篤介は、卓犖不羈の奇人であつたには相違ないが、わがルーソーとするに

は餘りに東洋式であつた。で、嘗て私は二葉亭を以てわがルーソーに擬して見た。もつとも、二葉亭は、幼時の教養、漢學塾の感化もあつて、決してルーソーのやうな自己崇拜の病癖はなかつたが、尙ほ種々の點に於て多少彼れと共通する特質があり、ともかくもわが我國に於けるルーソーであつたと言へる。ヨーロッパでは、ロマンチシズム勃興以後にはルーソー型の人物は全く掃く程に輩出したのだがわが國では二葉亭以前には其例が絕無である。文學の感化は實に怖ろしいものだ」(柿の蔕)と坪內氏は當時の彼について語つてゐる。この銳敏な常識家の言葉はおそらくその意圖せぬところに深い正確な洞見を含んでゐるのだ。二十年近い交友を通じ少なくも友人として親しく彼の性格に觸れ、「或時代には、二葉亭がまるでオブローモフの再現かと感ぜられたこともあつた。內々ルーディン風の小ハムレットであるのを得意がつてゐるのではないかと邪推された時代もあつた。」といふ氏が彼とルーソーとを比較してゐるのは、たとへそれが「新時代精神」の先驅新文學の創始者といふ大まかな立場からなされたにしろ、必ずしも皮相の見

とはいへぬのだ。云ふまでもなく、文學者としての規模の大小はさておき、二葉亭とルソーの文學はたとへ同じ場所で闘はれたにせよ、すくなくも全く反對の方向に導かれたものである。そして社會における個人の價値といふ未だ何人の認容をも經ぬ熱烈な思想を唯一の依據とし、自己の生身の慘めさを人々の面前に曝けだすことにより、「自然の帝座の下にその心をむき出す」といふ未開の事業を敢行したルソー的な果敢さこそまさしく二葉亭に缺けたものであつた。だが坪内のこゝで語つてゐるのは決してかうした文學史上の常識ではないのだ。氏をして二葉亭をルソーに比較せしめたものは「わが同胞中にあらうとは豫想しなかつた」彼の性格であつたのだ。

氏が驚嘆したのは當時二葉亭が感化をうけた西歐の思想がいかに彼を一別種の人格一につくりあげてゐたかといふ事情なのだ。或ひはすでに彼の性格化したその近代思想について語りたかつたのだ。明治以來の知識人で何等かの意味で外國の「思想」に觸れなかつた者はあるまい。だが思想の性格化といふことは自ら別

問題なのだ。「確かに思想を捕へるのは人間だが、思想は常に人間より現實的だ」とドストエフスキーはいつた。だが、たんに書物をよみ「教養」として思想に戯れる人には思想は決してかうした現實な姿を證さぬのである。あらゆる思想體系は例外なく、その表現に生涯を賭けた個人の潑剌とした思索である。したがつてそれを眞に理解するためには、まづその書かれた場所に自己を置くことを要するのだ。己れの生活を、その理解に賭してかかるのが必要なのだ。むろんかうした「態度」をとつたにしろすべての人が思想を理解し得るわけはない。だがすべての思想はかくしてのみ人々の間に生きるのだ。云ひかへれば、思想は現實に生きるには、人間化される外はなく、また人間化されたときにのみ、思想はその現實的な姿を現はすのだ。すなはちこの意味で「思想の自然狀態は情熱なのだ。」むろんこれは思想の持つあらゆる性格のうちでもつとも素朴なものであらう。だがこの素朴な性格を忘れたあらゆる思想の「理解」はたんなる註釋にすぎぬ。かうした「理解」は何ほど積まれようと人間生活の何物をも動かすことはできぬのだ。

それはただ學者を造りあげるにすぎない。したがつてこれは思想とは云へぬのだ。そして思想と文學とが眞に交渉をもつ場所も、此以外にはあり得ないのだ。このほかの場所から文學に附加された思想性とは必ず僞物である。文學も僞物なら思想も僞物なのだ。何故ならこの兩者はともに人を動かす力をもち得ないからである。すなはち、此の場所は思想と文學との實踐性がもつとも荒々しく嚙み合ふ場所なのだ。

二葉亭はまさしくかうした素朴さを以て思想を受け入れた人であつた。當然思想は彼を把へ「人格化」した。彼はかうした「性格」を抱いてここに新たな文學を生まうと苦慮したのだ。かかるとき、彼の創造すべき新しい人間とはいかなる人物か。また彼はこれを生かして行く環境を當時彼の周圍のどこに見出し得るのか。

ここに恐らく彼が「浮雲」制作にあたつて遭遇した最大の困難が存するのだ。そしてまた「浮雲」が今日我々に提出するもつとも根本的な問題もここに横たは

るのではなからうか。

作家にとつて自己の思想の表現とは、新たな人間典型の創造にほかならぬ。なぜならば、彼にとつては、いかなる思想も、――自己の思想をも含めて――人間化した、いはば、その自然狀態における姿でしか存在しないのだ。すなはちいかに熱烈な思想を抱いた作家にしろ、彼が作家である限り、かうした荒々しい思想の自然狀態を强制されず生きられぬのだ。云ひかへれば彼の思想の文學的表現は此の場所以外には築かれないのだ。「人間は思想に捉へられた時にはじめて眞に具體的に生き、思想は人間に捉へられた時に眞に現實的な姿を現はす……」（「未成年」の獨創性に就いて）と小林秀雄氏は云ふ。だが彼の眼に入るものはたんに思想がかうした姿で他人の裡に生きる風景のみでない。彼自身の思想さへ、かうした他人のあひだに浮沈する自己の具體的な姿としてしか映じぬのだ。かくて彼の思想は一個の人間として、彼より純粹な、したがつて新たな人間として表現されるほかはない。いはば女が男性に接して赤兒を生むやうに彼は思想との接觸から

新たな人間を生む。そしてこの過程は人間の生殖よりむしろ蛇の脱皮に似てゐるのだ。おそらく蛇がはじめて己れの姿を了解するのはその脱ぎ棄てた殼を振り返るときであらう。これと同樣にあらゆる作家が眞に自己の思想を見極め得るのはかうした文字に定着された表現を自ら眺め返したときだ。そして彼は脱皮した殼をすてて再び成長する。だが蛇は依然としてもとと同じ蛇なのだ。

むろん、蛇が己れ一個の力をもつて脱皮を完成し得るに反し、作家は他人のなかを引き廻ずことなくして自己の姿をも見究めることはできぬ、だがそのために彼の脱ぎすてた殼は、蛇のそれと異なり、多少の社會性を得て人々の間に生き殘るのだ。

すでに熱烈な露文學の思想に生きながら、自己の裡に何等他人に說敎すべきものを抱かず、「何事に對しても緻密で、精刻で、批判的なのだが、決して容易に斷定はしない、常に疑問的で、じれつたい程に愼重な態度」を持してゐた二葉亭の希ひは當然、その抱く思想にこの人間化した狀態のままで過不足ない文學表現を

與へることであつた。云ひかへれば彼が「自分の頭に……ぼんやりと抽象的に有つてゐた」「當時の日本の青年男女の傾向」のうちに自己の思想を完璧な人間典型として生かし切りたかつたのだ。

無謀な願ひだ、と人々は云ふかも知れぬ。だが眞に獨創的な作家にとつて着實た希ひとは何物であらうか。いかにも彼の希ひは無謀であつた。だがそれは決して不可能な事ではないのだ。人々は溌剌たる人間典型創造にあたつて、必ずしも常に「信念更生」を必要としないのだ。ゲエテのウエルテルの例などをことさらあげるまでもない。我々はただおそらく彼の愛讀した「現代のヒーロー」が二十六歳のレルモントフの手に成つたことを知れば足りるのである。

そして彼の「浮雲」はかうした希ひ　誠實な實踐の場所であつた。「浮雲」を貫く作者の企圖があらゆる方面からこの一點に集中されてゐるのみでない。彼が作家として全才能を傾け盡して唯一の作品たる「浮雲」制作も、この希願の實現なくしては、彼にとつては無意味と化すほかはないのだ。次の何氣ない言葉は彼が

この意圖を誠實に實現するに際して拂つた精緻な、そして苦惱にみちた作業の、少なくも一端を洩らしたものであらう。「『浮雲』にはモデルがあつたかといふのか？　それは無いぢやないが、モデルはほんの參考で、引寫しにはせん。いきなりモデルを見附けてこいつは面白いといふやうなのでは勿論無い。さうぢやなくて、自分の頭に、當時の日本の青年男女の傾向をぼんやりと抽象的に有つてゐて、それを具體化して行くには、どういふ風の形を取つたらよからうか、といろいろ工夫をする場合に、誰か餘所で會つた人とか、自分の豫て知つてる者とかの中で、稍々自分の有つてゐる抽象的觀念に脈の通ふやうな人のあるものだ。するとその人を先づ土臺にしてタイプに仕上げる。

勿論、その人の個性（インディビジュアリティー）はあるが、それを捨てて了つて、その人を純化してタイプにして行くと、タイプはノーションぢやなくて、具體的のものだから、それ、最初の目的が達せられるといふ譯だ。」（予が半生の懺悔）

「浮雲」制作の當時、彼が「日本の青年男女についてぼんやり……持つてゐた」

観念が、抽象的とよび得るほど明確た、そして清純なものであつたか否かはさておき、ここで明かなのは、彼の「浮雲」制作のモチイフは、といふよりむしろその眞實の主人公はこの「抽象的観念」にあつたといふことである。そしてそこに登場する人物は（主人公の文三をも含めて）いづれもみなその観念肉化のための道具にすぎぬといふことである。いひかへれば作者の意圖は各人物の「個性」を描くことにあつたのではない。作者の手腕が示すこれらの人間映像がいかに鮮やかであらうと彼等はただ「具體的」なタイプとして作者の思想表現のためここに招集されたにすぎないのだ。すなはち作者は彼等をまづ人間として設定し、これに自己の――または他人の――思想を語らせてゐるのではない。彼等は作者の思想によつて始めて人間と化したのだ。彼等が人間として作者の思想を支へてゐるのではなく、むしろ作者の思想が彼等を人間として支へてゐるのだ。したがつて作者の思想は彼等の間では語られない。それはむしろ彼等の行動の總和に存するのだ。そしてあらゆる思想は、明瞭な文學的リアリテイをもつためには、かうし

て人間化される外はないのだ。
　かうした微妙な事情に關して徒らに言葉を費すより、一つの具體的な例をあげる方が早道であらう。私は思想小說として「浮雲」のもつおそらく我が文學史上類例のない獨自な性格を明かにするために、これを同じく明治文學の生んだ注目すべき思想小說である永井荷風氏の「冷笑」と讀み較べてみたいと思ふ。
「兎に角、作の上の思想に、露文學の影響を受けた事は拒まれん。ベリンスキーの批評文などを愛讀してゐた時代だから、日本文明の裏面を描き出してやらうと云ふ樣な意氣込もあつたので、あの作が、議論が土臺になつてゐるのも、つまりそんな譯からである。」と二葉亭はいふ。だが永井氏の「冷笑」も同じく佛文學の影響を受け、明治四十年代の日本文明の裏面を描く意圖の下に制作された作品である。そして「議論が土臺になつてゐる」點でも兩者はその軌を一にしてゐる。
　だが、永井氏がここで犯した第一の過誤は、氏がまづ作中に人間を設定して、これに氏の審美觀、社會觀を語らせることによつて、氏の思想表現を計つた點で

ある。したがつて氏の思想には彼等を動かす力はない。彼等はただ最初に設定されたままの「個性」に從つて行動し、作者に口を開かせられるや否や各自の趣味の饒舌漢と化してしまふ。趣味は人間の生活を改變する力を持つことはできない。かくて最初に設定された人間の影は薄れ、殘るものは作者の獨り相撲の——または自己陶醉の——「議論」のみである。彼等の行動から作者の思想に何物をも危くしない。かかるとき作者の「思想」はただ文學を裝飾する役目しか果さない。すなはちかうした文學の思想性とはその裝飾性の一變種にすぎないのだ。そしてなるほどこゝに盛られた氏の審美觀は、鋭敏な、そして當時にあつておそらく最上の洗煉を經たものであり、またここに披瀝された氏の社會觀は、深い正確な洞見を含むと同時に氏の全作品を通じてその例を見ぬほど直截な率直さを以て語られてゐる。したがつてそれが當時の讀書階級に異常な反響を與へたのはむしろ當然であつた。

　だが趣味上の著るしい變遷を經た今日の讀者からは——そしておそらく作者の

眼にも――ここに語られた言葉はかつて華やかなだけ一入に惨めな趣味の形骸を止めてゐるにすぎないのだ。

「浮雲」の思想性がまさしくこれと正反對のものであることはすでにのべた所である。そしてこの本質的な思想性は何よりまづ作者にとつて「人間よりも現實的な思想」が作中に設定されてゐることによるのだ。かうした思想は作中人物によつて語られることを要しない。なぜならばそれは彼等によつて人間のあひだに持ち込まれる前に、まづ人間化した形で作者の裡に存するからだ。したがつて各々の人物は作者の思想の發現、といふよりむしろその精神の相貌の異つた面なのだ。むろん彼は自己の思想を最初から肯定もしなければ否定もしない、彼はただ作品といふ實生活にない純粋な場に、自己の實生活におけると同じ素朴な思想の姿を置いてみるだけだ。

　だがこの制作といふ脱皮作用によつて彼の思想はその實生活において持つた素朴性を失ふのだ。彼にここでおそらく自己の思想に對しては他人になるのだ。少

なくも彼の素朴な思想が實生活において演ずる愚行の對象と化するのだ。云ふまでもなくこの自己の生活のいはば二重像の一致は彼の希願である。だが、この希願が果されるか否か、彼は制作に際しては豫知し得ないのだ。ただ彼はかうした制作といふ行爲を通じて、彼の思想が實生活においては得られぬ展開を遂げることを可能性として知るのみだ。だがこのとき彼の思想そのものはこの過程を通じて實生活を離れることにより、そこではみられなかつた廣大な一般性を人間として獲得するのだ。すなはちここに造り出されたものは一個の人間典型なのだ。

　かうした、すべての本格な思想小説に必須の作業こそ、二葉亭が誠實に精進した道であつた。だが「浮雲」の遭遇した奇怪な不幸もまた此處に横たはるのだ。

　そして永井氏の後年强ひられた不幸が、「冷笑」の當時誤つた道を通じて堂々たる「思想小説」を完成し得たことに根ざすとすれば、二葉亭の不幸は正しい方法を採りながら、まさしくその故に、その思想表現を阻まれて終つた點に存するのだ。

五

今日「浮雲」の價値、主としてその「客觀性」に、いひかへれば、作者が「自分の性質の或點をデヱヴロップして作りだした」文三の主人公としながら、たんに彼の主觀を表白するに止まらず、これを冷靜に客視し得た點に認められてゐる。

事實、「浮雲」を讀み返すものは誰しも作中の各人物が――お勢、本田は云ふまでなく、お政や下女に至るまで――いづれもみた主人公とは獨立に、むしろ文三を犧牲にして潑剌と生きる異樣な風景に驚嘆するであらう。

そして多くの作家はこの點に關して彼に最大の讃辭を惜しまない。彼が自然主義の先驅者と見られるのもこの點においてである。

たとへば島崎藤村氏の「二葉亭氏の物を見る力は早く發達したらしい。『浮雲』

がこれを證してゐる。彼様いふ客觀性に富んだ作物が明治二十年頃に早く世に公にされたといふことは驚かれる……」といふ言葉はこゝに繰り返すまでもない。「明治二十年代の作家のうちでは最も二葉亭に敬意を寄せ」ながらその創作を多く價値しがたいとする正宗白鳥氏さへ次のやうに云つてゐる。

「長谷川二葉亭の『浮雲』を通讀した。第一篇を讀進むとこれが明治二十年頃に現はれたのかと驚かされた。これは單なる青春詠嘆の書ではない。悠々たる人生がそこに現はれてゐる」（文壇人物評論）

だが氏等はこゝに表はれた「客觀性」に「驚かされた」とき、果して「浮雲」のもつ「客觀性」の獨自な性格を深く省みたであらうか。氏等は「浮雲」を自然主義の先驅と認めると同時に、その「客觀性」をも氏等によつて築かれた我國の自然主義文學の到達した作者の日常生活の素朴な客觀化と同一視したのではなからうか。

そしてこれはたんに氏等の批評のみに限らない。花袋にしろ、獨歩にしろ、彼

等が二葉亭に拂つた尊敬がいかに厚からうと、その「浮雲」の評價は根本においてこの點に限られてゐるのだ。硯友社作家の「主觀」による恣まな構想を非難したとき彼等は「浮雲」に對しては唯その「客觀性」を素朴に嘆賞すれば足りたのだ。そしてその制作において日常生活を素朴に客觀化し得たとき、彼等は「浮雲」の問題を越えたと自信し得たのだ。いはゞ、彼等のかうした「浮雲」評價の背後には當時の自然主義文學そのものの性格が横たはつてゐるのだ。そしてこれはたんなる個人の嗜好ではなく一箇の時代精神たる故をもつて、二葉亭に對するゆるあら同時代人の批評の限界を爲してゐるのである。

たとへば、當時の文人中おそらくもつとも深く二葉亭を理解した內田魯庵氏さへ次のやうに云つてゐる。

「……『浮雲』を評するものは今より殆ど三十年前の作、僅に二十四歳の青年の作たる事を記憶せねばならない。之より以後幾多の秀才が頻々輩出し、代る〲に文壇を開拓して終に佛露の文學的傾向に倣ふ今日の自然主義まで漕付けるに凡

その二十年の費してゐる事實から推しても、其當時既に露國の大作を踏まへてゐた『浮雲』の作者は少なくとも二十年、時代に先んじた先驅者であると云はねばなるまい。單に文章だけを云ふも、今日行はれてゐる小説文體の基礎を築いた功勞者であると云はねばなるまい。何の道、春廼舍の『書生氣質』や硯友社連の諸作と比べて『浮雲』が一頭地を擢んづる傑作であつて、今日の新興文藝の第一の曙光たるは當然爭ふ事は出來ない。」

すなはち氏の見解すら――少なくも文字の上では――當時の自然主義者の評價を一歩も出てゐないのだ。そして時に同時代の作家の冷笑を招くほど二葉亭に深い好意を寄せ、「世間には往々當時の著名な傑作が時代の背景を除いては價値の乏しきより推して『浮雲』をも亦價値なき作の如く輕視するものもあるが、外國の名著と比べたなら或ひは餘り多くを價値する事が出來ないかも知れぬが、日本のとなら其の同時代のものは扨置き、現に嘖々される今日の諸作と比べても決して軒輊する處がない。（略）未成品であつても、明治の傑作として稱せられる他の諸

篇と比較して嶄然一頭地を挺んづるは後世の文學史家必ず認めるであらう」と確信する內田氏すら「浮雲の價値」を語るに際して右のやうな曖昧かつ薄弱な言葉しか持ち得なかつたとすれば、我々はこゝに自然主義といふ當時我國の文學の經過した一性格が、いかに廣汎な爭ひ難い力をもつて同時代人の精神を支配したかを見るべきなのだ。この時代精神は前述の正宗氏等の批評の基底をなしたのみでない。ある意味で二葉亭自身すらその影響を免れなかつたのだ。

云ふまでもなくこれらの批評は必ずしも全部が誤まつてゐるわけではない。逆に「浮雲」制作に際して作者の費した苦慮とは全く無緣な、したがつて「兎に角、『浮雲』は明治文學中の不思議な現物である」（正宗氏）といふ以上にこれを理解することを欲せぬ。後年の自然主義者に前述のごとき評價を强ひたものこそ正しく小說「浮雲」の持つ力であらう。おそらくこゝに定着された人間映像は「人生のありのまゝ」を描くことを希つた彼等をも推服させるに足るほど精緻な鮮明さをもつて彼等に迫つたのだ。

だが我々は『浮雲』に現はれた「悠々たる人生」に驚嘆するまへに、まづその「客觀性」の負はされた特異な性格に注意すべきではなからうか。それは「僅に二十四歳」といふ作者の年齒のみから推しても、後年の自然主義者がその文學的年輪とともに自己の日常生活に成熟することによつて到達し得た「客觀性」とは斷じて異なる筈ではないか。

「悠々たる人生」の表現はまた我國の自然主義作家の等しく希つたところであつた。硯友社文學の基底をなした「作者の想像」を遊戯として斥けたとき彼等の希ひはひたすら「眞の人間」を、「ありのまゝの人生」を描くことに存したのだ。そしてこのとき日常生活の諸現象を、すべて「自然のあらはれ」として、云ひかへれば自己の文學表現の到達すべき最高のそして不動の規範として素朴に信じ得た彼等はまづ自己の生活感情の「小主觀」を殺して行くことにより、作品の上に獲得される「客觀性」をもつてこの表現を圖つたのだ。いふまでもなく、如何なる「人生」も文學表現に客觀化されたとき、例外なく一箇の思想である。したがつ

て人生表現とは作家の思想表現にほかならない。だが幸か不幸か彼等にとつてはこの思想すら日常生活の規範に從屬すべきものであつたのだ。何故なら彼等はここに人間を見るよりむしろ自然を見たからだ。いはば彼等は自己の思想をすら、何の矛盾もなく、その日常生活に解消し得たのだ。彼等にとつては「人生」といふ思想は日常生活の感受性の總和以外の意味を持たなかつたのだ。したがつて彼等の「人生表現」とはまづ日常生活にこの思想をも含めた「小我」を客觀化すればたりたのであり、この作業は同時にそこに見出された自然といふ不動の規範の裡に、着實にかつ安全に遂行されたのだ。そしてこゝに、ある作品の持つ客觀性が直接にその作者の人間的成熟の尺度に通ずる我國自然主義文學に獨自な性格を生じたのだ。したがつて今日この立場から、「浮雲」の「客觀性」に驚嘆し、併せてこの中絕の事情を直ちに作者の「才能の息切れ」またはその人間的未熟に歸することはもとより容易であらう。だがかうした見解は「浮雲」の性格に關してたんにそれが「不思議な現物」といふ以外何事も明かさぬのだ。何故ならば「浮

雲」の客觀性はこれと全く別箇の作業を經て獲得されたものであるからだ。前述した我國の自然主義の經た、獨自な、悠々たる人間的成熟の過程がたんに彼にとつた無縁な事情であつたのみでない。彼等にとつて素朴な日常生活の總和を意味した人生そのものが彼にとつてはまづ自己の抱懷する思想によつて究めらるべき敵であつたのだ。

「……彼は『人生とは何ぞや』といふことを頻りに考へてゐたらしい。これに、ロシア文學の感化でもあらうが、空漠たる懷疑は絶えず彼れの心に宿つてゐた。」と正宗氏は云ふ。すなはち人生とはたえず思想化した形で、いひかへれば思想によつて究めらるべき對象として彼の腦裡に宿つてゐたのだ。生活に懷疑はない。自己の實生活を「人生」と信じ得る者に人生に對する根深い懷疑が育つ筈はないのである。

「人生人生といふが人生とは一體何だ、一箇の想念ぢやないか」(私は懷疑派だ)とは彼自身の言葉である。彼は人生といふ思想が實生活を離れた「一箇の想念」

であることを明瞭に意識した人であつた。そしてこの「想念」こそ彼にとつて自己の生涯を賭して追求すべき敵であつたのだ。いふまでもなくこの思想は最初は彼の所謂「若冠なりしころ」の「經驗と省察」とから生れたものであらう。だがこの「想念」は一たび彼の胸裡に根を下すや、忽ちその無垢な資質を絶好の肥料として、「人間を犧牲にして育つ植物のやうに」生長したのだ。

「『人生』とか『死生』とか、さういふことを『眞正直』に考へてゐた」と正宗氏はいふ。すなはち生活とは彼にとつてこれから何等かの思想を歸納する以外、いかなる意味をも持たなかつたのだ。そして彼が自己の生涯の生活をこの「想念」のため、いひかへればその正しさを試みる實驗の場として如何に浪費しつくしたかはすでに述べたところである。

いはゞ彼は決してたんなる「人生探究」にその生涯を費したのでない。むしろ「人生」の思想に憑かれてその生涯を滅ぼしたのだ。

彼の人生に求めたものは決して人生そのものではなく、人生に關する「眞理」

なのだ。彼はかつて人生の岐路に迷つたとき次のやうに日記に書いた。「しかく道を異にすれども、到り着く處は眞理に外ならねば、いづれの道を踏むとも、わが生涯の目的に於て分毫も損益なし」と。すなはち彼が人生に對して求めたものはただその思想のみであつた。おそらく彼はもしこれについて何事かを確實に知り得るとしたら、實生活における死をすら辭さなかつたであらう。「醫學上の大發見のために毒藥を仰いだりした人の話」が常に彼の腦裡を去らず、或る意味でその行動の規範になつたのもこの故なのだ。

だが同時に――そしてこれが彼の思想に眞に二葉亭的な性格を與へるものであるが――彼はその「人生の思想」によつて人生をいかなる意味においても限定することを欲しなかつた。

逆に彼は人生とは、まさしくこの「一箇の想念」のほかの存在であることを知り絶えずこれとの接觸を通じて自己の思想の正しさの證かされることを希つたのだ。そしてこれが彼自身を「生活」に支へた唯一の希望であつたことは前述した

ところである。

云ふまでもなくこの性向はすべての「思想家」多少とも共通したものであらう。だがこの生活に面接するに際して彼ほど謙虚であつた人はない。いひかへれば彼ほど自己の思想實驗の場として何等思想の制約を經ぬ生のまゝの生活を選んだ「思想家」はゐないのだ。彼はこの生活を享受するためには、自己の思想を殺してかかることさへ敢へて辭さなかつたのだ。

「議論から考へて見ると、人生といふものが何も具體的にそこに轉がつてゐる譯ぢやない。斯うやつてお互に坐つて居るのも亦人生に漬かつてゐるのだ」（私は懷疑派だ）この謙虚な自覺は人生探究の熱烈な「想念」とともにつねに彼の胸裡に並び存したのだ。

彼が「そこらに轉つてゐる」「思想」の「尺度」を以つて人生を圖る「思想家」輩をいかに嫌惡したかはその「雜談」に明かである。

したがつて彼の「人生の思想」を抱いて人生に挑戰したとき、この思想にあら

かじめ何等の「具體的」内容を與へなかつたのだ。彼の生涯を賭した熱烈な思想が、傍人の眼に「空漠たる懐疑」に見えたのもこの故なのだ。當然、彼は生涯を通じていかなる固定した思想をも持たなかつた。そして彼は自己の思想をあらゆる生活に開放し、その内部を生活の横行するに任せたのだ。いひかへれば、彼の思想は、常に自己を否定することによつて自ら富ませて行つたのだ。

すでに述べたごとく、生活とは彼にとつて「私の心的要素を種々の事情の下に置いて、揉み散らし苦しめ散ちし、散々な實驗を加へる」ことにほかならなかつた。

しかもこの「實驗」ができ得る限り純粹性を保ち正確に行はれるために、彼は自己にとつて可能なかぎり峻嚴な「事情」を、云ひかへれば何等思想の要約を經ぬ現實を必要としたのだ。

かくてこの「實驗」において彼の思想はその抽象性をもつて人生を裁斷する力を失ひ、逆に彼の「心的要素」はその追求する思想の純潔な抽象性のゆゑに絶え

す生活の呈出する荒々しい特殊な局面に虐まれたのだ。なぜならば「數學的」正確を眼差す彼の抽象思想にとつては、いかなる例外も許されず、同時にすべての生活はその例外であつたのだ。いはゞ彼の抱いた思想はその抽象性のゆゑに彼以外の如何なる「人生」をも律し得ず、たゞ彼自身をのみその生活において苦しめたのだ。

そして、この苦惱こそ彼にとつて生きて行く上に唯一の現實の糧であり、彼の思想はたゞこの自己否定の苦痛を通してのみ生長し得たのだ。云ひかへればこれは彼の抱く思想の「人生」といふ對象から生れた當然の矛盾であつたのだ。

そして二葉亭の生活とはこの「體踐」にほかならなかつた。かゝるとき「浮雲」の「客觀性」とは如何なるものか。すでに自ら明かであらう。

「二葉亭の人生に對するや實驗室に於ける科學者と等しく一々精密な實驗をして數學的に證明しなければ納得しなかつた。『浮雲』第二篇は卽ち其の實驗報告で」と内田氏はいふ。だがその「實驗」がいかなる性格のものかすでに我々の語つた

ところである。彼はこの「實驗に」おいて自己の思想を「證明」したのではない。自己の思想そのものを客觀化したのだ。いひかへれば彼がこゝに描いたものは實生活における彼自身の思想の位置、またはこれに對決し、破れて行く彼の思想そのものの姿である。何故なら自己否定こそ彼の思想の第一の屬性であるからだ。

正宗氏のいふ「悠々たる人生」はたんにこの思想の破れ目に「現はれた」にすぎぬ。そして我々が「浮雲」において何より「驚歎」すべきはこの「客觀化」が後年の自然主義者におけるがごとく文學的技法の禮節としてではなく、まづ自己の抱懷する思想そのものの性格によつて作者に强ひられたといふ點である。

云ふまでもなく作者は「浮雲」以後、この否定によつて自ら富ませた筈の思想については、何も語つてくなかつた。そして「浮雲」すらこの思想の振幅に堪へず、中絕して終つたことは周知の事情であらう。

だがこゝに我國において最初に思想の重荷を正當に負つた作品の遭遇した奇怪な運命があるとすれば我々はこの中絕の原因をたんに作者二十四歳の人間的未熟

といふ消極的事由にのみ歸し得ぬ筈である。

そしてこゝに彼の演じた悲劇は、自己の文學的才能の破綻を賭しつつ、なほ自ら抱懷する思想の性格を貫き得た作者の異常な眞摯性のみを以つてさへ今日我々をも動かすのではなかからうか。

「小說、殊に輸入小說には人生の眞相が活字の面に浮いてゐるやうに思つてゐた」と「平凡」の主人公はいふ。若年にして二葉亭が文學に求めたものはまさしく「人生の眞相」であつた。そして彼はすでにその「迷妄」から醒めた晚年にいたるまで、少なくも自己の文學表現には「人生」を「活字の面に浮かす」ことを希つて止まなかつたのだ。云ふまでもなく前述した「平凡」の主人公の感慨は作者によつて苦が苦がしい陰影を附されてゐる。だがこの「平凡」そのものにおいてさへ作者の企圖は「……色々の人が人生に對する態度……人間そのものでなくて、人間が人生に對する態度……」といふと何だか言葉を弄するやうな嫌ひがあ

るが、つまり具體的の一個の人ぢやなくて、ある一種の人が人生に對する態度」（私は懷疑派だ）を表現することに存したのだ。すなはち彼はその生涯の終りには或ひは自己の抱懷する「人生の思想」を憎んだかも知れぬ。それはすでに充分憎惡に値する害惡を彼の實生活に與へたのだ。だがいかに嫌惡しようと、「人生の思想」から脫却することは、彼に許されてゐなかつたのだ。

彼は「平凡」においてしばしばこの嫌惡を破裂させてゐる。したがつて、こゝに語られた主人公の獨白が「思ひ切つて自分を投げだした」「作者の感想」であるとする正宗氏の言葉はこの意味で正しいのであらう。

だが彼はこゝでその主人公に「私は自然だ人生だと口には言つてゐたけれど、唯書物で其樣な言葉を覺えただけで、意味が能く分つてゐるのではなかつた。意味も分らぬ言葉を弄んで、いや、言葉に弄ばれて、可惜浮世を夢にして渡つた」といふ言葉を吐かせるに際してさへ、これを「ある一種の人が人生に對する態度」と意識しつゝ書いたのだ。そしてこの意識によつて彼はこの「人間」を自己の「人

生の思想」の裡に設定することを强ひられたのだ。何故ならば「具體的の一個の人ぢやなくて、ある一種の人が人生に對する態度」を描くことは少なくも「人生」に關する一個の思想を前提せずしては不可能であるからだ。

云ひかへれば彼にとつてはその「人生の思想」嫌惡さへ、その思想の內部で、しかもその思想の形式を取つて行はれざるを得なかつたのだ。そしてこゝに、彼の思想嫌惡すらその思想表現と化せざるを得なかつた點に、私は彼の思想の、すべて眞に「人間を捕へた」思想と同じく、その生涯を貫く宿命的な性格を見るのだ。

「何故人間の捕へた思想は空しいか、それは人間精神の戲れであるからだ。何故人間を捕へた思想は正しいか、自然の理法は人間精神より沈着であるからだ」と小林秀雄氏はいふ。「人生の思想」の追求こそ彼の生涯に渡つて引かれた宿命の線であつた。云ひかへればこの「思想」こそ彼にとつて「人生」そのものであつたのだ。

彼の思想表現といふより、むしろそれを否定する企圖の下に書かれた「平凡」さへ、この思想なくしては成立し得なかつたことは前述したごとくである。

では彼がその青春の心を傾けて制作した「浮雲」において彼の思想はいかなる表現を獲得したか。いはゞ彼の思想の一實驗報告」たるこの制作において彼の思想はいかなる人間的面貌を呈したか。云ひかへれば彼は「人生」に對する自己の思想の位置にいかなる計量を加へたのか。以下私は章を改めて述べたいと思ふ。

六

云ふまでもなく二十四歳の二葉亭は人生の戸口に立つてゐた。したがつて彼の思想はまづ何より彼にとつて倫理であつた。むろん當時といへども、彼は自己の思想の生涯を貫いた性格に忠實であつたには相違ない。云ひかへれば彼は、その

「思想」をもつて何人の「生活」をも律することを欲しなかつたであらう。
だがすべての實践的思想と同じく、彼の思想は、少なくとも自己の生活のみはこれによつて律することを望んだのだ。人々は二十歳において、自己の叡智を信ずる。しかも生涯を通じて類例ない素朴さでその思想に動かされ得た彼が、この無垢の門出に際して、同じ素朴さをもつて體践を志したのはむしろ當然なのだ。
人生とは、すべての人生の入口におけるがごとく彼には單純に見えたのだ。いひかへれば彼は自己の人生探究の思想がいかなる倫理であり得るかを省察する暇を持たなかつたのだ。またはその必要を感じなかつたのだ。前述したごとく、彼の「人生」に對する思想は、いかなる固定した內容をも持ち得ぬものであつた。そして何等固定した內容を持たぬ點にこそその本質的な性格が存したのだ。だが倫理とは少なくとも人間の二つの行動を繋ぐために何等かの固定した內容を必要とするのだ。したがつて彼の思想はそのまゝ倫理と化すことは不可能な思想なのだ。強ひて化すれば、それは絕えず自ら否定して行く倫理となるほかはない。だ

がかうした倫理は、倫理としては意味をなさぬのだ。

しかしこゝで忘れてはならぬことは、彼の思想のかうした性格を彼に發かすのはたゞ生活のみだといふ事情である。したがつて彼が當時自己の倫理に含まれる矛盾を意識しなかつたことは、彼の抱懷する思想が彼にとつてまさしく倫理に見えたほど強い實踐的性格をもつて彼に働きかけたといふ事情に比べれば何事でもないのだ。

こゝで我々に重要なのは、彼の思想がまづ彼に對して採つた倫理といふ相貌を以つて、いかに強烈にかつ素朴に彼を動かしたかといふ點である。彼の次の言葉はこれを證するものであらう。

「私は當時『正直』の二字を理想として俯仰天地に愧ぢざる生活をしたいといふ考へを持つてゐた。この『正直』なる思想は露文學から養はれた點もあるが、もつと大關係のあるのは、私の受けた儒教の感化である。話は少し以前に遡るが、私は帝國主義の感化を受けたと同時に、儒教の感化をも餘程蒙つた。だから一方

に於ては、孔子の實踐躬行といふ思想がなか〳〵深く頭に這入つてる。……いはばまあ、上つ面の浮れに過ぎないのだけれど、兎に角上つ面で熱心になつてゐた。一寸、一例を擧げれば、先生の講義を聽く時に私は兩手を突かないぢや聽かなんだものだ。これは先生の人格より『道』その物に對して敬意を拂つたので。かういふ宗教的傾向、哲學的傾向は私には早くからあつた。つまり東洋の儒教的感化と、露文學やら西洋哲學やらの感化とが結合つて、それに社會主義の影響もあつてこゝに私の道德的の中心觀念、卽ち俯仰天地に恥ぢざる『正直』が形づくられたのだ。」（予が半生の懺悔）

今日彼の言葉を讀み返す人は、その幼稚さを、云ひかへれば、かうした單純な「理想」が小說制作に堪へ得ると信じた彼の迂愚を嗤ふであらう。だが少なくとも彼自身はこの「理想」に對して全く眞摯であつたのだ。右の短文を注意深く讀む者は誰しもその眞摯性が文面に溢れるのを見るであらう。「正直」といひ「俯仰天地に愧ぢざる生活」といひ、いかにも平凡な、「東洋の儒教的感化」を思はせる陳

腐な言葉である。そして多くの道徳家によつて濫用され、擦り減らされたこれらの言葉は、現代においては殆んどその本來の意味を失つてゐる。だが現代に生きる者にとつて果して眞に「俯仰天地に愧ぢざる生活」が可能か否かはさておき、これらの言葉は少なくも當時の二葉亭にとつては、決して單なる道徳家の形容詞ではなかつたのだ。云ひかへれば彼は自己の「正直の理想」に對してまつたく「眞正直」であつたのだ。そしてこの自己の抱く思想に對する無類の「眞正直」さ或ひは素朴さにこそ、彼の生涯を貫く性格が存するのは前述したところである。「彼れはその小説の主人公の如く少し愚圖で頭が冴えなかつたらしいが、正直であつた。今日のある種の青年のやうに狡猾なところ、輕薄なところは少しもなかつた。あの三つの小説は、藝術として幼稚ではあるが、人間の正直さに現はれてゐる」と辛辣な正宗氏も云ふ。

すなはち、彼の「正直の理想」とは彼の生涯を貫いた人間としての正直さのもつとも單純にそしてもつとも直接に思想化した形式であつたのだ。この「理想」

が彼の裡にまづ素朴に「人格化」し、その全生活を律する力を振ひ得たのもその故なのだ。そしてこの「正直の理想」の實現こそ青年期の二葉亭にとつて自己の全生活を賭した問題であつたのだ。かくて「浮雲」において彼が强ひられたものは當然この問題にほかならぬ。云ひかへれば、この一篇の小說は彼にとつて文學を場としたこの問題解決の試みであつたのだ。

「かういふ宗教的哲學的傾向は私は早くからあつた」と「予が半生の懺悔」は云ふ彼が文三において「デヴロップした」「自分の性質の或點」とはこの生得の「傾向」にほかならない。しかもこの「傾向」のみを純粹に「デヴロップした」ものである。すなはち「正直の理想」はたんに文三の性格の根柢を貫いてゐるのみではない。この「理想」を離れて彼にとつて生きる道は存在しないのだ。云ひかへれば彼はこの理想以外に彼を支へる何等の「性格」をも賦與されてゐない。彼はたゞ作者の「正直の理想」の體現として、「開豁」なお勢に對しては「朴茂」であり、「卑屈」な本田に對しては「高潔」であり、「我慢勝他が性質の叔母のお政」に對して

「篤實溫厚」であるにすぎないのだ。したがつてかうした人物は作中に人間として現はれて他の人物と交渉するとき、當然「正直」なる理想に浮かされて自己の性格を紛失した性格破産者として行動するほかはない。文三を「愚鬪々々した煮え切らない男」と評した正宗氏の言葉はこの間の消息を語るものであらう。そして「浮雲」第三篇において作者の陷つた奇怪な混亂もまたこの點に根ざすのだ。すなはち文三はこゝではたんにその性格を紛失したのみでない。彼の人間としての存在をさへ失つて終つてしまふのだ。

だが、私はこの「浮雲」の主人公の持つ一見奇怪な「性格」にこの作品の帶びる我國の文學に類例のない獨自な思想性をみるのである。云ひかへれば作者はここにおいて決してまづ一個の「具體的な」人間を描くことを企圖したのではない。彼の企圖にまづ自己の思想の出來得る限り純粹な場を作中に設定することに存したのだ。

そして作者の希ひは、この自己の思想の純粹な場に、あらゆる作中人物を通行

させることによつて、自己の思想の客觀性を、或ひはこの人間的な正しさを計畫することにあつたのだ。むろん、こゝで作者の思想は作中人物との交渉を通じて人間化する。といふよりむしろそれは人間化した形で以外彼等と交渉することは許されないのだ。だが同時にそれは人間化するに際して、その思想としての純粹性を失ふことも許されぬのだ。いひかへれば、彼は人間として思想の外部から附加されたいかなる性格をも持ち得ないのだ。すべてかうした「性格」とは思想にとつて偶然なものであるほかはない。したがつてかうした性格の附加は思想その者の一般性の喪失を意味し、換言すればその客觀化を妨げるものなのだ。かくてすべての作家の思想は思想としての客觀性を保たうと欲する限り、それ自身の性格化した姿で、作中に生きるほかはないのだ。そしてこれはたんなる文學技法上の約束ではない。逆にこれこそ現實そのものの姿なのだ。現實において、ある思想が人間を把へるときその思想が彼の「性格化」することは周知の事情であらう。だがこゝで思想が人間の性格化するとは、同時に彼がその生のまゝの「性格」を

失ふことを意味するのだ。そして人々はみな多少とも性格化した思想なくして生きられぬとすれば、「生のまゝの」性格こそ現實においては一個の假構物にすぎないのだ。

二葉亭が「日本の創作界に新しく開拓しようとした、新しい嚴肅な人生觀照」はこの現實の率直な認識にほかならないのだ。すなはち彼はこの制作に際して多くの作家のごとくそこに設定した自己の思想をもつて人生を包まうと企圖したのではない。逆にこの作中に何等の假構物を加へず設定された自己の思想の裡に人生を招集することによつて、その思想が現實に生きる儘の姿を表現することを希つたのだ。いはゞ彼の思想はこゝでは單に外部から人生に包まれてゐるのみでない。むしろ「人生」とはその内部から彼の思想に働きかけ、その形成に參與し、或ひはこれを破壞するものなのだ。かくてのみ彼の思想は常に現實におけると同じく荒々しい生成の過程におかれるのだ。おそらく現實において思想とはかうした姿以外で存在しないことを彼は知つてゐたのだ。

かくて彼にとつて自己の思想表現とは直ちに「眞劍な科學者的人生報告」と化したのだ。云ひかへれば彼はこゝに自己の「理想」を說いたのではない。たゞ彼はその「理想」が現實に生きるまゝの姿を「浮雲」といふ實生活にない純粹な「實驗の場」を通じて見究めたかつたにすぎぬ。文三はいはゞこの「實驗の場」に設定された彼自身の倫理思想にほかならない。かゝるとき文三がこゝに呈する人間的面貌とはいかなるものか。云ふまでもなくそれは、作者の倫理がその實生活に對する姿に、またはこれに對決する實生活が彼に呈示する相貌に等しい筈である。そしてこれを究めることによつてのみ、我々は「浮雲」がその主人公文三にとつて如何なる「實驗の場」であつたかを、また作者がこの「實驗」において强ひられたものが如何なる「人生」であつたを知り得るのである。

前述したごとく、彼はたんに自己の思想表現に何物をも假構しなかつたのみでない。この小說制作に際して、當時の文學傳統上許されたあらゆる「小說的」假

構をもその主人公に賦與することを避けたのだ。云ひかへれば彼が作中において文三に課した倫理は、自己の實生活において現實に苦しんだ問題であつたのだ。

だが我々はこゝで再びさきに述べた彼の倫理の性格を振り返らねばならぬ。

そしてこゝで重要なのは彼の倫理がその本質上、他の何人をも律し得ぬ、たゞ彼自身にのみ課せられた規範であり、同時にその生活に向けられた「正直」は彼にとつて寸毫も自ら假借することない自己批判、自己解剖の利刄であつたといふ事情である。

「彼れは文學者（作家）としては純寫實主義者であつたが、處世人としてはロマンチストでアイデヤリストであつた。……虚僞を、矯飾を、浮誇を、輕薄を蛇蝎の如くに憎んだ。隨つて自ら欺くやうな言動をするのを最大罪惡としてゐたらしく、常に事々に反省して自己の缺點を剔抉し、自ら責め、自ら罵り、やゝもすれば取越苦勞して、厭世的、悲觀的になりがちであつた。」といふ坪內氏の言葉はこの間の消息を語るものであらう。

むろんいかなる人の生活も己れ一個の物ではない。何故ならば生活とはまさしく彼自身と外界との交渉の謂であるからだ。したがつて、己れ一個の生活を規範する倫理といふごときは事實上倫理として無意味であらう。(そしてあらゆる倫理思想はいかに「個人主義的」なものであらうと、例外なく、もし總ての人が己れ自身を、といふ假定の上に立つてゐる) 坪内氏がこゝに彼の「處世人としてのロマンチスト」を見たのは正しいのかも知れぬ。だがこゝで注意すべきは少なくとも彼自身はこの倫理に「現實に」苦しんで來たといふ事情である。いはゞ、彼の倫理は決して所謂倫理ではなく、むしろ自己虐待の一形式であつたといふ事情である。いひかへれば彼がこの「理想」の忠實な實踐に際して持つた自意識は現實に對する優越感をいささかも含まなかつたのだ。したがつてこの自意識は何等彼を現實に對して武裝することなく、たゞその「理想」が他人との交渉を通じて破れて行くことに苦しんだのだ。

「トルストイは北方の哲人だといふ。此哲人は如何な事を云つてゐる。クロイツ

エル・ソナタの跋に、理想の完全に實行し得べきは眞の理想でない。完全に實行し得ねばこそ理想だ。不犯は基督教の理想である。故に完全實行出來ぬは止むを得ぬ。唯基督教徒は之を理想として終生追求すべきである、と言つて世間の夫婦には成るべく兄妹の如く暮せと勸めてゐる。

何の事だ？　些とも判らん。完全を求めて得られんなら、悶死すべきではないか？不犯が理想で、女房を貰つて、子を生ませてゐたら、普通の墮落に輪を掛けた墮落だ」（傍點中村）と彼は「平凡」のなかで云ふ。かうした言葉のトルストイの晩年に抱いた思想の批判としての當否はさておき、この「苦悶」はたゆみなく「完全を求める」彼の「宗教的、哲學的傾向」に絶えず付きまとつたものなのだ。かゝるときその「正直い理想」は彼に他人に對する優越を與へ得ぬのみでない。逆にそれは彼に「普通の墮落に輪を掛けた墮落」を强ひるものなのだ。したがつて彼は倫理思想をこそ抱いたが、決して倫理家ではなかつたのだ。むしろ彼は自己の思想の持つ倫理といふ性格に苦しんだ人なのだ。いはゞ彼は倫理に安んずる

にはあまりに純潔な自意識をもつて生れて來たのだ。そして彼に「感化を與へた」倫理はたゞその自意識を研ぎ澄せたにすぎなかつたのだ。かくて彼の倫理は何等他人を規範し得ぬ「理想」であつたと同時に、彼自身の生活にとつてすら一箇の重荷にすぎなかつたのだ。彼が生涯を通じて「死んだ思想」を厭ひ、「人生の活氣に觸れる」ことを願つたのも決して偶然でないのだ。おそらく彼は出來得れば、この「普通の墮落に輪をかけた墮落」を逃れて「平凡」に暮したかつたのであらう。だが彼にとつて「生のまゝの」人生に觸れることは彼に許されてゐなかつたのだ。彼の憑かれた峻嚴な、同時に不具な倫理はすでにその青年期の生活を破壞し去つたのみでない。その訓練を經て思想化した彼の自意識は、晩年にいたるまでいかなる生活の局面においても彼の思索の形式であつたのだ。

「其ころ、彼れは毎に自他の批判と解剖とに忙がしかつた。彼れは、其後、種々の烈しい煩悶を體驗して、時には自殺とまで思ひ迫つたこともあつた。さういふ場合にすら、とかく自他批判癖が附き纏つて、不思議に二三分の遊離氣分を失ふ

ことが出來ず、知らず〳〵自己を客觀的に觀照し、とかく純粹な、眞劍な悲觀氣分になれないことが多い、と私に話したことがあつた」と坪内氏は書いてゐる。

さきに述べたごとく、熱烈な人生探究の思想に燃えたとき、「生のまゝの人生」に觸れることは彼の希ひであつた。そして彼は生涯の生活を通じて「生のまゝの人生」から或ひは多くを學んだかも知れぬ。だが彼自身にとつては「生のまゝの人生」に觸れ、これに生きることは遂に單なる憧憬に止まつたのだ。そしてこれは憧憬として終生彼の心に生きたのだ。そしてこの憧憬が彼の晩年の諸作を貫くのは人々の知るところであらう。

だが、こゝで問題はかうした彼の憧れではない。重要なのは彼の倫理がこのとき現實に帶びた相である。またはかうした倫理を强ひられて生きる彼自身の姿である。かくして人々はこゝに引用した坪内氏への述懷すら彼にとつて自己批判の一形式にすぎぬのを見るであらう。自意識とはこれを抱く者にとつて相向つて對置された二枚の鏡のやうなものだ。こゝに投げ込まれたものはいかに單純な事象

といへども無限の二重像を生み出すのだ。そして當時の二葉亭にあつては一方の鏡は生活を負ひ、他の鏡は倫理を擔つてゐた。生活は倫理を映し倫理は生活を映した。しかも不幸にしてこの二つの鏡は全く同じ大きさであつた。いはゞこれは彼の裡においてまつたく相平衡する二つの力であつた。しかもこの平衡のうへに生きて行くことは彼には不可能であつた。何故ならば前述したごとくこの兩者は彼にとつて本質的な矛盾を孕み、この矛盾を證すものはまさしく「生活」であつたからだ。しかも皮肉なことに彼は當時この生活によつて破らるべき倫理を目的として生きざるを得なかつたのだ。

「人の種類を大別して二種とするを得べきか。卽ち、一は現在目前の事をのみ思ひて一生を送る人物にして、一は過去をも現在をも將來をも總て一生の事を悉く思ひて一生を送るものなり。予は現在をも思ひ、將來をも思ひ、過去をも思ひ、凡て心を一生の中に置きて而して一生を送らむと欲すれども、そは只一の空望にて、實際は只現在の事にのみ頭腦を使ひをるなり。

予は今甚だ窮せりと雖も、これまでの如く敢て人に告げて憂ひを分たんとはせず。その事の輕卒に似たるを憎みてなり。人に言ひたればとて、窮せしものゝ達せし例もあらねば、此儘に生命絶えば絶えよ、只苦しくもだえ廻りて、人に救ひを求むべきにあらずと思ふこと數々あり。」

右に引用した彼の日記の一節は、當時彼の自意識の遭遇した苦惱の、少なくも一端を覗ふに足るものである。

云ふまでもなく、彼の「思ふ」過去あるひは未來はすべて我々の「現在」を形成する過去および未來の表象像の謂ひではないのだ。いかなる人が過去と未來の表象像に支へられずに生活し得るのか。すなはち「人の種類を大別して二種とするを得る」のは斷じてこの意味における過去および未來ではないのだ。したがつて彼がこゝで人間を「大別して二種」としてゐるは過去、現在、將來、にたいする「省察」の有無をもつてである。更に一歩を進めれば人生に關して意識した思想の有無をもつてである。彼の場合について云へばその倫理思想の有無によつて

である。それほど當時の彼にとつて思想とは人間に本質的なものに見えたのだ。彼の倫理思想は何等生活に對する規範の形式ではなかつたことはすでに述べた所である。だがそれは彼にとつては自己の生活の本質、または生命であつた。これによつて彼は「人の種類」を二大別さへし得たのだ。

かくて彼が「凡て心を一生の中に置きて而して一生を送らむと欲するのはたんに彼の倫理思想の命ずる希願であるのみでない。むしろその成否の懸つて存する儱踐なのだ」

だが彼は同時にその「空望」たることを意識することを強ひられてゐる。彼の自意識は彼が生活に際しては、「只現在の事にのみ頭腦を使ひをる」ことをその倫理に映すのだ。

むろん、この「空望」は彼が「只現在の事にのみ頭腦を使ひをる」に際してさへ、或る意味で彼の生活を歪めるのであらう。たとへ人間にとつて「凡て心を一生の中に置きて」絶えず「現在をも、過去をも、將來をも」思つて生活すること

は不可能であるにしろ、まさしくかうした思想に支配されて「而して一生を送る」人は現實に存在する筈である。

　だがかうしたことは少なくも當時の二葉亭にとつては問題にならぬのだ。こゝで重要なのは彼が生活の實際に「只現在の事にのみ頭腦を使ひをる」のを意識するやその倫理思想は彼に對して一切の意味を失ふといふ事情である。云ひかへれば、彼は自己の眼に「現在目前の事をのみ思ひて一生を送る人物」と化するのみでない。この「空望」を抱きながら「只現在の事にのみ頭腦を使ひをる」のは彼の倫理觀より見れば「普通の墮落に輪をかけた墮落」なのだ。

　彼にとつてはその倫理とは自己虐待の一形式にすぎぬことはすでに述べた。しかも彼はこの自己虐待が己れに何等かの意味を持つことさへ信じられなかつたのだ。云ふまでもなく當時の彼は心底から素朴にこの倫理思想に動かされ、その實踐を期してゐたのであらう。だがそれは彼に現實を裁斷する何等の自信をも與へず（彼はこれによつて「人の種類」を二大別すると同時に自己の姿を見失つてゐ

る）たゞ彼に苦痛を、しかも無意味な苦痛を強いたのだ。「浮雲」の背後にあつた作者の倫理とは以上のごときものであつた。かゝるときこれを「體現」した文三とはいかなる人物か。すでに說くまでもなく明かな筈である。

七

だがこゝで更に注意を要するのは、文三なる人物は作者自身にとつては勿論、當時の文學傳統においてもまつたく新しい人間であつたといふ點である。したがつて彼はたんに一箇の人間典型として作者の思想によつて生きるのみでない。彼といふ周圍の文學環境に類例のない新たな人間を創り出す作業においても、作者は何よりまづ自己の思想の力を必要としたといふ事情である。

「ときとして藝術家は（一時的に哲學者の道を踏み）自己の意圖を强め、正當化し、それに個人以上の權利を與へ得る原理を獲得しようと試みる」とヴァレリイは云ふ。すなはち「ある藝術家の創作を企圖する作品があまりに複雜かつ巨大であり、しかも新しく、彼の手腕と意圖とがその適當な相互關係を直ちに明瞭に見出し得ぬとき、彼は自ら一般性の外貌を持つ一箇の「理論」を造り出す必要に迫られる――云ひかへれば、彼は抽象的言語のなかに自己に對する一の權威を發見し、それによつて自己に普遍的條件を課するといふ外見のもとに己れの制作を容易ならしめる必要に導かれるのだ。」

むろん作家がこゝに設定する「一般性の外貌を持つ」「理論」とは彼自身にとつていかに必然に見えようと現實においては一個の假構物にすぎない。そしてこの「理論」の正しさは、云ひかへれば、その眞の一般性はたゞその作品によつてのみ證かされるのだ。だが同時に作者にとつては彼の作品はこの「理論」の上に築かれるほかはないのだ。かくてこの假構はあらゆる獨創的な近代作家がその制作に際

して强ひられる智性上の戰ひに必至の惡德なのだ。彼等はたゞ現實に對してこの「理論」を賭けることによつてのみその作品といふ實果を納め得るのだ。そしてある作品の思想性とは常にこの賭の大膽さに比例する。何故なら作家はいかに自己の「理論」を信じようと、その「一般性の外貌」が作品以前にはたんなる「外貌」にすぎぬことを充分承知してゐるのだ。

文三なる典型を夢見たとき、「浮雲」の企圖そのものの未聞の新しさはまさしくかうした思想上の作業を二葉亭に强ひたのだ。云ひかへれば彼はこゝに自己の肉體を越えた思想を設定すると同時にこれを同化する必要に迫られたのだ。さきに私が彼を我國において歐洲近代作家と同じ場所で鬪ふことを强ひられた唯一の作家と云つたのはこの點を指すのである。そして二葉亭をこの鬪ひに導いたものは單なる「ロシア文學の感化」ではないのだ。彼の周圍に强力に生きてゐた我國の自然發生的人間文學は、これにて對抗し生きる人間を創り出すためにかうした精緻な作業を若年の彼に强ひたのだ。

しかも彼は不幸にして、自己の文學的出發に際して强ひられたこの苦惱に滿ちた闘ひに際して、たんに周圍の文學的傳統から全く孤立してゐたのみでない。如上の作業に必要な「思想」として唯自己の素朴な倫理を持つのみであつたのだ。彼は文三なる人物にたゞ素朴に自己の倫理思想を設定するほかはなかつた。云ひかへれば彼は文三の創造に當つて、己れの倫理そのものの「一般性の外貌」に賴ることを强ひられたのだ。しかも彼の倫理思想がいかなるものか、これに「一般性」を假構することがいかなる惡德を强ひるのか、すでに我々の充分知るところである。

こゝに二葉亭が「浮雲」制作に際して遭遇した作家的不幸の眞の擴がりが存するのだ。そしてこの矛盾の擴大に彼の「浮雲」中絶の根本の原因が横たはるのだ。今や彼がこの小説制作に當つて費した傍人に不可解な苦慮の全貌を我々は理解し得るのである。

彼の希ひは、云ふまでもなく、自己の倫理思想の「外貌」たる文三を人間とし

て生かし切ることに存したのであらう。だがその倫理思想そのものが彼の裡でいかに「生きて」ゐたかはすでに我々の見たところである。いはゞ文三は彼の倫理の破綻を「體現」して行つたのだ。しかも作者の意に反してである。

云ひかへれば彼はその「浮雲」の背後に自己の倫理を假構することこそ强ひられたが、その「假構」そのものには何等の假構をも付け加へなかつたのだ。あたかもその實生活において自己の倫理が彼に倫理家としての假構を與へなかつたと同じく、彼はその文學表現においても生活に破られて行く倫理の姿に何物をも附加しなかつたのだ。だがそのために彼にとつてこの倫理なくして制作は不可能であつたといふ事は變らぬとすれば、我々はこゝに二葉亭がその純潔な作家的資質のゆゑに陷つた不幸がいかに奇怪な性格のものであつたかを知るべきなのだ。

むろん「浮雲」の構想を得たとき、人生の經驗に無垢であつた二十四歳の彼はたとへ自己の思想を人生に强ひる意志は毛頭なかつたにしろ、少なくも自己の生

活に對する規範としては或ひはその「一般性の外貌」を信じたかも知れぬ。何故ならばこの「自己に對する一の權威」なくしては彼にとつて「浮雲」は考へられぬ筈だからである。だが彼はその制作に際してこの「外貌」がたんなる「外貌」にすぎぬことを、云ひかへればその眞の「一般性」はたゞ現實に生きる他人との交渉を通じて證かされるほかはないことを、明瞭に意識してゐた。「浮雲」の一篇は彼にとつて自己思想の眞にもつ一般性を計量すべき精緻な實驗の場であつた。

そしてこの企圖は少なくとも作者がその最後の中絶にいたるまで嚴格に貫いたところなのだ。

「浮雲」を構成する第一篇、第二篇、第三篇がやゝ「彼此一貫する脈絡を缺く」ことは多くの人々が彼に非難する點である。そしてこの三年間にわたる「二葉亭の精神動搖時代に跨つて作られた」作品に整然たる技法上の統制は或ひは求められぬかも知れぬ。

だが今日から「浮雲」を注意深く讀み返す者は次のやうな性格がこの「彼此脈

絡を缺く」制作を强く通貫するのに氣付く筈である。すなはち作者によつて「浮雲」のなかに設定された文三以外の人間は唯一人として彼の思想の制約をいさゝかも受けて居らぬ。お勢といひ、お政といひ、本田といひ、悉く彼とは別個の「論事矩(ロジツク)」を持ち、それによつて文三に對決し得る「處世の法に保着し」彼とは無緣の世界に、彼と同等の權利を持つて潑剌と生きてゐる。云ひかへれば作者は決して文三の思想——作者の倫理——を以て彼等を包まうとしてゐないのだ。「あの作は議論が土臺になつてゐる」と作者自身が云ふ。だがその「議論」は決して文三の思想の內部で行はれてゐない。それは彼の思想の外部から他人によつて作者の倫理を破るべく働きかけられるのだ。

かくて、二葉亭にとつて「浮雲」とは彼の自意識の展開であつたのだ。こゝに行はれる「議論」は或る意味で作者の自意識はその倫理思想を營む形式の表現にすぎぬ。しかも彼の自意識はその「表現」が彼の實生活にない純粹な場所に行はれることを命じたのだ。それ故に文三は作者の倫理を抱いたまゝ全く他人のなか

に投げ出されてゐる。「血の繋がらぬ」叔母、それに甘やかされた娘、「役所の同僚」の本田、いはゞ彼に人間的愛情を持つ者は作中に一人としてゐないのだ。郷里の母親はたゞ文三の憧憬の裡に存するにすぎぬ。そして彼とお勢との戀愛すらたんに作者によつて假定されてゐるにすぎぬ。（このことは「浮雲」第一篇第二章第三章を注意して讀めば明瞭であらう。作者自身さへ第三篇第十六章において彼等の「戀愛」を否定してゐる）

　云ひかへれば文三はたゞ自己の思想を通して彼等と交渉し得るだけなのだ。「思想」とはかくてのみ「生活」に對して純粋に計量される、とおそらく當時の作者は確信してゐたのだ。

　そして「浮雲」は彼にとつてたゞかうした自意識の表現としてのみ意味を持つたのだ。

　むろんこゝで、自己の現在實生活において强ひられつゝあつた倫理をそのまゝ文學上に計量せざるを得なかつた作者の企圖の素朴な愚劣を、または彼がその結

果として施さざるを得なかつた作中人物の極度の樣式化を嘲笑することは今日我々にとつて容易であらう。我々はこれとは比較にならぬ精妙な作業を經て創造された多くの思想小說を歐洲文學の傑作として眼前に持つてゐる。

だが今日から見ていかに「稚拙」であるにせよ、彼がこの制作に際して自己の思想に施した操作そのものは飽くまで正しいのだ。云ひかへればその「思想表現」は過つことを知らぬ藝術家の技によつて彼自身の自意識の現實に生きる姿にまで達してゐるのだ。彼の作中人物が極度の樣式化を經ながらなほ人間として潑剌と生きるのもこの故なのだ。しかも不幸にして彼の思想の性格はまさしくその正しい表現が得られた故に自己を打ち破るべきものであつたのだ。

かくて二葉亭にとつて文三を除く「浮雲」の諸人物はいづれもみな實生活の表象であつた。といふよりむしろ彼の自意識によつて純化された「生活」そのものの姿であつた。

かゝるとき、彼の思想を「體現」する文三にとつてまづ何よりの希ひは彼等の

あひだに生きることである。いはゞ彼はこの課題を自己の抱懷する思想そのものの性格によつて强ひられてゐるのだ。しかるに彼の思想にとつて生きるとは自己を否定することにほかならなかつた。云ひかへれば人生に對する彼の倫理はまさしく生活に「頭腦を使ひをる」とき、彼自身にとつてさへ一箇の「空望」と化すほかはない。少なくも彼の自意識はかうした意識を强ひられたのだ。したがつて「浮雲」においても文三の倫理は當然「空望」として表現されざるを得ぬ。作者は常にこのことを意識してゐるのだ。しかも彼にとつては文三をかうした「空望」を抱く人間として「客觀化」することは不可能であつたのだ。何故ならば文三の思想とは彼自身が現實に苦しみつゝある思想であるからだ。「ある思想の表現にはこれを信じ、かつもはや信じないことを要する」といふチボオデェの逆說をこゝに引くまでもない。いかなる人が自己の自意識を、そのまゝ現在の狀態において「客觀化」し得るであらうか。

それゆゑに、文三の「客觀化」はたゞ彼の思想の「客觀化」を通じて行はれる

ほかはない。

云ひかへれば、それは遂に人間化し得ぬ思想なのだ。むろん彼はこの過程を通じて思想としては成長する。だがそれは飽くまで彼の自意識によつて虐まれる思想そのものの姿に止まるのだ。云ふまでもなくこの思想が人間化するや否や忽ち自己の姿を見失ふことを作者は意識してゐる。だが作者が現に生活においてその思想の姿を見失つてゐること、それは文三には許されてゐないのだ。かくては一切の文學表現は不可能に歸するほかはない。したがつて文三は依然として「空望」を抱きつゝ生活する。少なくも彼自身はこの「空望」の實現を企圖してゐる。しかも彼は周圍の者と遂に何等の人間的交渉を持ち得ないのだ。

かゝるとき作者はいかにして彼の企圖の實現を計り得るのか。だが作者の思想の化身たる文三にとつて彼の「空望」の實現なくしてはその存在は無意味と化すほかはない。

この矛盾はその性質上、制作の進行とともに極限に達すべきであつた。そして

「浮雲」はまさしくこの極限において打ち切られてゐるのだ。作者自身もおそらくこの間の事情を意識してゐたのであらう。「浮雲」第三篇十六章以後はこの矛盾の報告書の觀を呈してゐる。

すなはち作者はこゝで――「浮雲」の筆を抛つ直前に――これまでの作中人物の關係を要約して次のやうに云つてゐる。

「眼を改めてみれば、今まで爲て來た事は、夢か將た現か……と怪しまれる、お政の浮薄、今更いふまでもない。が、過つた文三は。――實に今まではお勢を見謬つてゐた。今になつて考へてみれば、お勢はさほど高潔でも無い。移氣、開豁、輕躁、それを高潔と取違へて、意味もない外部の美、それを内部のと混同して、愚かしいかな、文三はお勢に心を奪はれてゐた。

我に心を動かしてゐる、と思つたが、あれが抑も誤まりの緒。苟めにも人を愛す。といふからには、必ず先づ互に、天性氣質を知り合はねばならぬ。けれどもお勢は、初めより、文三の人と爲りを知つてゐねば、よし多少文三に心を動かし

た如き形跡が有ればとて、それは眞に心を動かしてゐたではなく、只ほんの一時感染れてゐたので有つたらう。」

云ふまでもなく、作者はこれを「情慾の曇りが取れて、心の鏡が明かに」なつた文三の言葉として語つてゐる。こゝで彼の希ひはあくまで文三を人間として生かし成熟さすことに存したのだ。だが不幸にして文三の心はかつて「情慾に曇つた」ことなどないのである。「苟めにも人を愛すといふからには……といふ作者の倫理觀は常に嚴として文三の心底に存したのだ。

「何故といへば、私には貴孃が解らず、また貴孃には私が解らないから、どうも親友の交際は……」（第一編第二章）と彼自身お勢に「水を向けられた」ときかうした言葉を吐く。むしろ彼の心底とはこの倫理そのものなのだ。したがつて彼は「情慾」によつてお勢に戀したのではない。彼女に假定された「高潔」に「心」を奪はれて」ゐたのだ。彼の本田に對して覺える嫉妬さへ根本においてお勢の德性に對する疑惑の計量を出ないのもこの故なのだ。かうした「人間」に對しては

（作者自身も認めるごとく）いかなる女も眞に「心を動かし」やうはないのである。

かくてお勢は文三といふ男に戀したのではなく、たゞその「開豁な氣質」をもつて文三といふ思想に「感染れた」にすぎぬ。しかも文三の「茂質」た思想は彼女の「氣質」の何物をも變へ得なかつたのである。

「感受の力の勝つ者は誰しも同じ事ながら、お勢は眼前に移り行く事や物やのうち、少しでも新奇な物が有れば眼早くそれを覗て取つて、直に心に思ひ染めるけれども、惜しい哉、殆んど見た儘で別に享味を加ふるといふことをせずに、無造作に、其物、其事の見解を作つて仕舞ふから、自づから眞相を看破めるといふには至らずして、動もすれば淺薄の見に陷る。（略）感染れる事の早い代りに、飽きる事も早く、得る事に熱心な代りに、既に得た物を失ふことには無頓着。昔物を買ふにしても然うで、買ひたいとなると、矢も楯もなく買ひたがるが、買つて仕舞へば餘り讀みはしない。英語の稽古を始めた時も、また其通りで、始める

迄は一日をも爭つたが、始めて見れば左程に勉强もしない。萬事然うした氣風で有つてみれば、お勢の文三に感染れたも、また厭いたも、共間に絡まる事情を棄てゝ、單に共心狀をのみ繹ねてみたら、恐らくは共樣な事で有らう。」

文三が「浮雲」の末尾において、「眼に見えぬ處、幽妙の處で――稍生れ變つて」得た「識認」とは以上のごときものである。彼はもはやお勢との戀愛に關して何等の幻想を抱かぬのみでない。彼女に對する自分自身の位置をも明瞭に自覺してゐる。作者の倫理はその人間化するに際して織つた數々の夢を破り、こゝに露はな姿を現はしてゐる。文三はたんにその倫理を體現してゐるのみでない、自ら一箇の倫理たるを知るのである。こゝに引用したところのみでなく、第十六章全部にわたる文三の反省は、悉くそのまゝ作者の倫理思想の表現である。

したがつて文三に殘されたお勢に交涉する唯一の道にその得た「識認」をお勢に納得させることである。彼女は納得せぬ場合にはもはや文三にとつて一切は失はれるのだ。二葉亭が「浮雲」のプランにこれが「お勢の墮落と文三の絕望とに

終る」と誌したのもこの故なのだ。

だが文三はこの「認識」がお勢には諾かれぬことを充分豫感してゐる。すでに彼の倫理はお勢の「氣質」を支配するに全然無力であるのを證したではないか。してみればそれが更に深化し、「茂質」を加へた「認識」がお勢の「輕躁」を動かし得る筈はないのである。しかも文三の「識認」が拒否されたとき、云ひかへれば作者の倫理が全く否定されたとき、作者は「お勢の墮落」にいかなる表現を與へ得るのか。「浮雲」の世界はこゝに崩壞する外はないのだ。

したがつて「浮雲」の最後の數章はこの「示談」を前にした文三の躊躇逡巡に費される。またその間に點綴されるお勢の奇怪な行動はすでに作者の手をさへ離れたげである。そしてこの小説がまさしくその「示談」に臨んだ文三の「兎に角物を云ッたら、聞いてゐさうゆえ、今にも歸つて來たら、今一度運を試して、聽かれたら其通り、若し聽かれん時には、其時こそ斷然叔父の家を辭し去らう。と遂にから決心して、そして一先づ二階へ戻つた。」といふ言葉で終るのも決して偶

然でないのだ。かくて我々は彼が何故文學を抛棄したか理解し得るのだ。すなはち彼の「思想」はたんにその實生活に堪へなかつたのみでない。それは正しい意味における文學表現にさへ堪へぬ思想であつたのだ。そしてこゝに彼の「浮雲」は中絶せしめたものは正しくその作家的資質であつたといふ奇怪な逆說が成り立つのだ。云ひかへれば彼の不幸はかうした性格の思想を抱きながら、しかもその文學表現に際して正しい思想上の操作を强ひられた點に存するのだ。これはすべての作家の眞の不幸と同じく人眼を忍ぶ不幸である。だが彼はすくなくも「浮雲」においては眞摯に回避することなくこの不幸に堪へたのだ。したがつてそれは今日からも、彼の生活を知り、その作品を綿密に讀み返す者には充分觸知し得るのだ。彼はその生涯の或る時期には文學を輕蔑したかも知れぬ。だが彼の不幸はその文學表現以外何物も明かすことのできぬ不幸であつた。

　かくて「浮雲」の中絶は、彼が「人生」において遭遇した最初の、しかも決定

的一挫折」であつた。彼は自己の思想の敗北を「數學」的に證されたのみでない。その文學表現の可能性をさへ見失つてしまつたのだ。

そして云ふまでもなくたとへ彼が文學上の問題を拋棄したにせよ、その實生活において苦しんだ倫理問題は同時に一段と矛盾を激化し、兇猛に展開して彼に迫つた筈である。

だが彼はこの苦惱に滿ちた鬪ひの過程についてはたゞ歪んだ言葉をしか殘してゐないのだ。云ひかへれば彼はその表現のためにもはや何等の努力を拂はなかつたのだ。

「その中に、人生問題に就て大苦悶に陷つた事がある。それは例の「正直」が段段に崩されてゆくから起つたので、先づ小說を書くことで「正直」が崩される、その他種々のことで崩される。つまり生活が次第に崩してゆくんだ。」といふ言葉に始まる「予が半生の懺悔」の一節は彼がこの間の事情をもつとも率直に語つた興味ある文章であるが、畢竟するに單なる座談である。したがつて彼がかうした

思想上の惡鬪を經ていかなる「心的作用に調和を得」いかなる姿の成熟を遂げ得たかは我々に明かされてゐないのだ。

彼の後期の作品たる「其面影」「平凡」等も單に成熟人の手に成つたといふのみであり、その「苦勞人振描寫」には內田氏の言葉を借りれば、「根本の內容を組成する材料の採擇、性格の描寫、人生の觀照的等に到つては『浮雲』以後の進境を見る事が出來ない」のだ。

そして云ふまでもなく生涯を熱烈な思想探究に費しながら、思想表現の可能性を全く奪はれてゐた二葉亭の到達した人間的成熟の姿は何等かの歪みを蒙つてゐた筈である。晩年の彼の言葉がその率直さに拘らず持つ一種歪められた性格は或る意味でその證左であらう。

だが今日の立場から、この言葉に强ひられた歪みを正し、そこに「おそらく二葉亭四迷で一生を終らなかつた」二葉亭を設定することは、おそらく無意味な遊戲にすぎまい。彼もまた藝術家として自己の宿命を果てまで踏んだ人なのだ。我

我はたゞからうした言葉の苦惱に滿ちた彷徨に終つた彼の生涯の象徴を見れば足りるのだ。

「二葉亭を何と云つたらよからう。小說家型といふものを强ち青瓢簞のヒョロヒョロ男と限らないでも二葉亭は小說家型ではなかつた。文人風の洒脫た風流氣も通人氣取の嫌味な肌合も無かつた。が、同時に政治家型の邊幅や術氣や倨傲やニコポンは藥にしたくも無かつた。君子とすると覇氣があり過ぎた。豪傑とすると神經過敏であつた。實際家たるには理想が勝ちすぎてゐた。道學先生たるには世間が解りすぎてゐた。——恁ういふ矛盾な性格であつて、此矛盾の爲めに竟に一生を破壞に終つた人であつた。」と內田氏はその「二葉亭餘談」において右のやうに結論する。

事實、彼は明治の社會を構成する人物の如何なる範疇にも屬さぬ人であつた。すなはち彼はまさしく近代作家として、生れて來た人なのだ。

云ひかへればその「矛盾する性格」は社會における「何者」たることをも彼に

妨げたのだ。しかも不幸にして當時の文學傳統の力は彼に作家たることをすら許さなかつた。

だが彼は少なくとも、この社會環境が「彼の矛盾な性格」に强ひた種々の悪德を、眞摯なそして無償な苦惱を糧に生き拔いたのだ。

そして彼の僅かに殘し得た制作が我々に確實に明かす點は唯一つ、或時代に眞に苦しんだ人間の言葉は決して滅びぬといふ、單純な同時に强力な事實である。いはゞ、彼はすべて誠實な近代作家の心底に存した痛烈な信念を、身を以つて「實踐」したのだ。

――三六年七月――

昭和十一年十月十九日印刷
昭和十一年十月廿三日發行

中村光夫評論集

著者　中村光夫

發行者　芝隆一
東京市品川區大崎中丸三八八

印刷者　山田榮吉
東京市小石川區音羽町八ノ二三

印刷所　山田活版所
東京市小石川區音羽町八ノ二三

發行所　芝書店
東京市芝區琴平町虎ノ門會館
電話芝七二二番・一六三六番
振替東京四八〇一〇番

定價　壹圓二十錢

芝書店刊行書

- 河上徹太郎著　自然と純粹　一・八〇　送四
- アンドレ・ジイド　七氏分擔譯　文藝評論　二・五〇　送四
- アンドレ・ジイド　六氏分擔譯　續文藝評論　二・一〇　送四
- ジャック・リヴィエール　四氏分擔譯　エチュード　二・八〇　送二
- アンドレ・ジイド　秋田滋譯　ドストエフスキー論　一・八〇　送四
- レオ・シェストフ　河上・阿部共譯　悲劇の哲學　一・五〇　送四
- 小林秀雄著　續々文藝評論　二・二〇　送四
- フリードリヒ・ニイチエ　阿部六郎譯　物質と悲劇　一・八〇　送四
- レオ・シェストフ　河上徹太郎譯　虚無よりの創造　一・五〇　送〇
- 中島健藏　佐藤正彰共譯　ボオドレエル藝術論集　二・二〇　送四
- 河上徹太郎著　思想の秋　二・二〇　送四
- 神西清譯　チエーホフの手帖　二・一〇　送四

芝書店刊行書

パフメーチェフ 藏原・杉本共譯	マルチンの罪	一・〇〇	送一〇
ラモン・フェルナンデス 高木佑一郎譯	女に賭ける	一・五〇	送一四
エルンスト・トルラア 内山敏譯	獄中からの手紙	一・三〇	送一〇
片岡鐵兵著	女性恐怖症	一・五〇	送一四
アンリ・ベルグソン 平山高次譯	道德・宗教の二源泉	二・五〇	送二〇
ポオル・ヴァレリイ其他 佐藤正彰譯	精神の將來	一・八〇	送一四
イ・ヴェルツマン其他 大平章譯	古典美術の再批判	一・五〇	送一四
ヤンコ・ラヴリン 大島辰雄譯	意志の悲劇	一・二〇	送一〇
D・H・ロレンス 小川和夫譯	自意識と戀愛	一・五〇	送一四
阿部六郎著	深淵の諸相	一・二〇	送一〇
アーサ・シモンズ 河上徹太郎譯	現實派作家論	一・〇〇	送一〇
T・E・ヒューム 長谷川鑛平譯	藝術とヒューマニズム	一・六〇	送一四

